

売立目録所収美術作品のデータベース化とその 近代日本における美術受容史研究への応用

課題番号 19520098

平成 19－21 年度科学研究費補助金〔基盤研究 C〕研究成果報告書

別冊

平成 22 年 6 月

研究代表者
静岡大学情報学部教授

高 松 良 幸

目 次

科学研究費補助金研究成果報告書	i
序	1
1. 入札会と売立目録	2
2. 入札会の実際－大正7年の水戸徳川家入札会を例に	6
3. 高橋箒庵と入札会－入札会の情報戦略	15
4. 入札目録100選	21
5. 売立をした人々	40
むすび	74

凡 例

本報告書は、研究代表者の高松良幸が全編を執筆した。

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 1 日現在

研究種目： 基盤研究(C)

研究期間： 2007～2009

課題番号： 19520098

研究課題名(和文) 売立目録所収美術作品のデータベース化とその近代日本における美術受容史研究への応用

研究課題名(英文) A study of Uritate-Mokuroku(sales catalogues of art works) in the first half of the 20th century in Japan

研究代表者

高松 良幸 (TAKAMATSU YOSHIYUKI)

静岡大学・情報学部・教授

研究者番号： 40310669

研究成果の概要(和文)：

本研究は、戦前の美術品の売立目録のうち 100 冊について、所収の作品の写真・テキストをデジタルデータとして記録し、その各種データを所蔵履歴、活用履歴などさまざまな角度から検索可能なデータベース化を試みた。また入札会の実況を伝える書籍、新聞雑誌記事等の関連資料の検討を行なうことで、戦前のコレクターの美術作品の保存、活用に対する姿勢、美術観や美術作品の移動に関する戦前の社会的意識等を検証した。

研究成果の概要(英文)：

In this study, investigator built the image database of art works which were put on 100 Uritate-Mokuroku(sales catalogues of art works) in the first half of 20th century in Japan. Also, investigator studied the sales of art works of this time in Japan, especially from the viewpoint of art collectors' consciousness for the art.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合 計
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総 計	2,000,000	600,000	260,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 美学・美術史

キーワード：美術史・芸術諸学・博物館学・コンテンツ・アーカイブ・美術受容史・入札会・高橋箒庵

1. 研究開始当初の背景

近代日本における美術受容史に関する研究は、近年多くの成果を産んでいるが、その多くは、博物館や博覧会・展覧会、美術出版史、

文化財保護制度史等に関するもので、民間の個人・団体による日本・東洋美術のコレクションの離合集散、あるいはその史的位置付けに関しての研究成果は、十分であるとは言え

ない。日本の私立美術館・博物館の多くが、戦前の民間コレクションを基盤として成立していることを考慮すると、今後の私立美術館・博物館史研究の進展という観点からも、この問題の研究は不可避である。

一方、戦前の入札会の際に発行された売立目録に、膨大な数の出品作品の画像データが収録されていることは、周知の事実である。しかし、これらの作品のうち、関東大震災や第二次世界大戦の戦災などで失われたものについては、それらが存在した事実を確認できる一次的資料が売立目録所収の画像である場合が多い。また、売立目録所収の作品の中には、現在その所在が不明なものも多く、それらの作品の検証や再発見のためには、売立目録所収の画像が重要なデータとなる。

2. 研究の目的

本研究は、戦前の売立目録所収の膨大な作品の写真・テキストをデジタルデータとして記録し、その各種データを所蔵履歴、公開、茶会における使用等の活用履歴などさまざまな角度から検索可能なデータベース化し、有効活用を図るための方策を検討するとともに、入札会の実況を伝える書籍、新聞雑誌記事等の関連資料の検討を行なうことで、戦前のコレクターの美術作品の保存、活用に対する姿勢、美術観や美術作品の移動に関する戦前の社会的意識等を検証する。また、これまでほとんど省みられていない戦前における実物の美術作品鑑賞の場としての入札の下見会、一般の人々が接した美術図書としての入札目録の役割等の研究を実施する。データベース作成に関しては、もちろん、数千冊にも及ぶ売立目録のすべてを取り上げ、これを実施するのは困難であり、本研究では、その試行的実践として、江戸時代の大名家・公家・豪商、近代以降の著名コレクターなどを荷主とする入札会の売立目録 100 冊以上、作品件数 30,000 点以上について、その画像データベースを作製することを目標とする。

3. 研究の方法

(1) 入札目録 100 冊、総点数 30,000 件以上のデジタル画像化及びデータベース化を実施した。底本は、研究代表者所蔵の入札目録を使用した。

(2) 入札目録掲載の各作品の作者・作品名・員数・法量・装丁・付属品等に関するテキストデータのほか、当該作品に関する現在の呼称によるこれらの項目に関するテキストデータの作成、さらに入札会における落札者・落札価格等のデータの調査をおこない、データベースに入力した。また、各作品の概要、所蔵・公開等の活用履歴に関するデータについてもできる限り入力した。

(3) 主として既存のデータベースアプリケー

ションソフト(マイクロソフト・アクセス)を用いたシステム構築を実施した。また、インターネット公開用には、そのダイジェスト版を作成し、2010 年度中に公開の予定である。(4) 戦前における入札会の実態について、入札会の記事を掲載する新聞・雑誌等も含めた諸文献の調査などを実施した。

(6) 入札会に関係した人物に関する調査研究
入札会における作品出品者、札元、作品購入者のうち、主だった人物に関する各人物像、各美術コレクションの離合集散の実態、美術及びコレクションに関する考え方等に関する調査研究を実施した。

(7) 上記各項目についての研究成果を研究成果報告書(別冊)に取りまとめた。

4. 研究成果

①2007 年度

研究初年度は、まず、データベース化する売立目録の候補 100 冊の選定を行った。選定に際しては、売立荷主および、そのコレクションの重要度、当該の売立に対する当時の世評の高さ、高額落札作品の多さ、現在伝存する著名作品の存在などの基準を指標とし、当該 100 冊を通じて、大正から昭和前期の日本における売立の歴史が概観できるよう配慮した。

これに続いて、収録作品のデジタルデータの作製、テキストデータの入力作業に着手し、年度末までに、売立目録 40 冊強、収録作品 12,000 件余について、作品のデジタル画像化を実施した。また、これと並行して、データベースを構成するテキストデータの項目の選定を実施、表計算ソフトを用いたテキストデータ入力からデータベースソフトへのインポート、画像データの貼り付け等、データベース構築の設計を行った。

一方、入札会の歴史や関係人物についての調査研究では、大正期以前を中心に、高橋箒庵『近世道具移動史』、『東都茶会記』、『万象録』などの文献に、入札会を報道する新聞、雑誌記事などを加え、各入札会の状況、各作品の落札価格、作品の売主・買主・札元の人物、関連作品の茶会や展示での使用に関するエピソード等の把握と整理に努め、それらのデータをデータベースに反映するための準備作業を行った。また、高橋の著書などで語られる人物やエピソード等は、益田鈍翁周辺の政財界人や数寄者を中心とするものであることから、それら以外の人物やエピソードに関しても、近代日本経済史関係の文献等を活用して把握と整理を試みた。

②2008 年度

研究 2 年目に当たる当年度は、年度末までに、約 90 冊分までの収録作品のデジタル画像データの作製、約 70 冊分までのテキスト

データの入力作業を実施した。また、これと並行して、データベースを構成するテキストデータの項目の選定、表計算ソフトを用いたテキストデータ入力からデータベースソフトへのインポート、画像データの貼り付け等、データベース構築の設計、実験を行った。

一方、入札会の歴史や関係人物についての調査研究では、前年度に引き続き、大正後期から昭和初期を中心に、高橋箒庵『近世道具移動史』、『東都茶会記』、『万象録』などの文献に、入札会を報道する新聞、雑誌記事などを加え、各入札会の状況、各作品の落札価格、作品の売主・買主・札元の人物、関連作品の茶会や展示での使用に関するエピソード等の把握と整理に努め、それらのデータをデータベースに反映するための準備作業を行った。また、高橋の著書などで語られる人物やエピソード等は、益田鈍翁周辺の政財界人や数寄者を中心とするものであることから、それら以外の人物やエピソードに関して、特に当時の文人画愛好者の動向を中心に、近代日本経済史関係の文献等を活用して把握と整理を試みた。

また、同一作品が複数回にわたって入札に付された例を、調査過程の中でいくつか発見することができた。それらの作品について、所有者の変転やその理由、入札を経ることが作品の価値、評価に与えた影響等についての調査研究も併せて実施した。

③2009 年度

研究最終年度は、研究当初選定した売立目録 100 冊について収録作品のデジタル画像データの作製、テキストデータの入力作業を完了した。また、これと並行して、データベースを構成するテキストデータの項目の選定、表計算ソフトを用いたテキストデータ入力からデータベースソフトへのインポート、画像データの貼り付け等、データベース構築の実用実験を行った。

一方、入札会の歴史や関係人物についての調査研究では、前年度に引き続き、大正後期から昭和初期を中心に、高橋箒庵等の著作、入札会を報道する新聞、雑誌記事などを加え、各入札会の状況、各作品の落札価格、作品の売主・買主・札元の人物、関連作品の茶会や展示での使用に関するエピソード等の把握と整理に努め、それらのデータをデータベースに反映する作業を行った。また、高橋の著書などで語られる人物やエピソード等は、益田鈍翁周辺の政財界人や数寄者を中心とするものであることから、それら以外の人物やエピソードに関して、特に当時の文人画愛好者の動向を中心に、近代日本経済史関係の文献等を活用して把握と整理を試みた。

これらの成果に基づいて、研究報告書の作

成を行なった。また、その成果の一部については、Web 掲載のための準備を実施した。

④研究成果の公表

研究成果の公表に関しては、以下の 2 種類の方法によって、平成 22 年度中のできるだけ早い時期に、実施する。

まず、第一に、Web 掲載による売立目録所収美術作品に関するデータ公開である。

100 冊分の売立目録に所収されている約 30,000 点の美術作品については、各作品の売立出品時の名称、作者、付属品、法量、装丁、伝来、その他の基本データに加え、判明するものについては落札価格、並びに売立時の購入者、さらに判明する現在の所蔵者（公的機関に限る）の項目に関して作成したデータ一覧を公開する。デジタル画像データについては、そのすべてをインターネット上に公開することは困難であるため、各売立目録の中で、特に重要と判断した作品を上記データ一覧にリンクする形で、公開する。

第二は、研究成果報告書（別冊）の作製である。

従来、科学研究費研究成果報告書は、冊子体の形で作製されていたが、平成 20 年度から、電子媒体による提出となり、その分量も A4 用紙 4 枚から 6 枚程度の分量となった（本研究成果報告書）。しかし、本研究の総括的な取りまとめと、研究成果の詳細な発表のためには、従来の冊子体に準じる分量の報告書を作製する必要があるため、別冊としてこれを作製する。作製した別冊は、PDF ファイルの形式で、上記データ一覧を掲載する Web ページにおいて、平成 22 年度のできるだけ早い時期に公開する。また、必要に応じて、冊子体に印刷し、これを配布する。

なお、別冊の内容は、以下の通りである。

序

1. 入札会と売立目録

2. 入札会の実際

—大正 7 年の水戸徳川家入札会を例に

3. 高橋箒庵と入札会

—入札会の情報戦略

4. 入札目録 100 選

5. 売立をした人々

むすび

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計 2 件）

①高松良幸，住吉如慶・具慶の源氏物語画帖
（『石山寺の美—観音・紫式部・源氏物語—』
所収），大本山石山寺・（株）アート・ワン，2008
年，30—35 頁

②高松良幸, 売立目録所収美術作品のデータベース化とその近代日本における美術受容史研究への応用 (2007-2009 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書別冊), 2010 年

〔その他〕

ホームページ等

[高松良幸研究室 ANNEX]文化財と出会う

<http://www5f.biglobe.ne.jp/~bunkazai/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高松 良幸 (TAKAMATSU YOSHIYUKI)

静岡大学・情報学部・教授

研究者番号: 40310669

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

序

本書は、「売立目録所収美術作品のデータベース化とその近代日本における美術受容史研究への応用（2007-2009 年度科学研究費補助金基盤研究（C））」の「研究成果報告書」の別冊をなすものである。

近年、科学研究費補助金の研究成果報告書は、インターネットによる公開が義務付けられたことによりその分量に制限が加えられたため、研究成果の内容を十分に伝えることができないケースが多い。本書はこれを補うことを目的にこの研究の成果を公開するものである。

この研究は、近年様々な角度から注目を集めている戦前の売立目録の内容をデータベース化し、あわせて戦前の入札会の美術史的、社会史的意義に関する考察を行うテストケースとなることを目的としたものである。

戦前、日本・東洋美術の取引の主役をなしたのが入札会である。特に大正期から昭和初期においては、旧大名家などの華族層のなかで経済的苦境に陥るものが多く、その苦境から逃れることを目的に「家宝」である伝家の名品を売却することが多くなった。そして、それらの多くを購入したのが、近代以降の日本経済の牽引車となった財閥経営者などを中心とする財界人たちであった。その際に用いられたのが入札会という手法であり、入札会に関する記録は、時代の変遷とともに権力の象徴としての「家宝」がどのように移動したかを知るための資料として重要視されるものである。

一方、入札会に出品された作品の写真図録として作製されたのが売立目録であり、これを検証することで、この時期の入札会を通じて、どの作品を入札会開催時まで誰が所蔵していたか、また他の記録と照合することで、それが誰によって購入されたかなどの所蔵履歴を検証することができる。また、関東大震災や第二次世界大戦時の空襲などの災害で失われた作品、現在所在が判明しない作品などについても、写真画像ながらそのイメージを確認することができる。現在刊行中の『古画総覧』（国書刊行会）は、絵画作品のみとはいえ、この戦前の売立目録に所載された写真を画家ごとに網羅するという意欲的な取り組みである。ただ、書籍の形では特定の作品を検索することが困難であり、また同書の価額が高額であることもあって、研究の便には不都合なところもある。

本研究は、このような問題を考慮し、売立目録所収作品の画像データベース（アーカイブ）化を目指すものである。ただ、限られた研究期間、予算の中で戦前作製された数千冊にも及ぶ売立目録のアーカイブ化を実施することは極めて困難であるため、100 冊の著名な戦前の入札会の売立目録に関するアーカイブ化を実施した。本研究を戦前の入札会、売立目録研究のテストケースと称する所以である。

平成 22 年 6 月

研究代表者 静岡大学情報学部教授 高松 良幸

1. 入札会と売立目録

1) 売立

本稿でいう「売立」とは、日本の近代以降、相当数の美術品、道具類等を一堂に会して、それらを、期日を定めて売却することと定義する。特に本稿では、この時期に「売立」を通じて移動が頻繁に行われた日本・東洋の美術品等に関する「売立」を対象とする。

美術品等の売立は、世界各地で、過去においても現在においても、頻繁に行われてきている。ヨーロッパにおいては17世紀以降、競売（いわゆるオークション）形式による美術品の売買が盛んになり、それが今日まで継続、発展していることはよく知られている。¹

近代日本における売立は、明治40年代から昭和10年代に到るまで頻繁に実施され、この時期における日本・東洋美術の売買の主役というべきものであった。²

江戸時代まで日本・東洋美術の作品の主たる所有者であったのは、公家・大名・豪商などである。明治維新以降、彼らの多くは華族として一定の社会的権威を保ったものの、その権威を保つための経済的裏打ちは必ずしも十分ではなかった。そのため、彼らの多くは、その社会的権威を保つための金員の確保のため、伝家のこれら美術品を売立という形で手放すことになったのである。

そして、これらの美術品を購入した者の多くは、近代以降の日本の経済発展によって生まれた財閥等に関連する財界人であった。もちろん彼ら新たなコレクターは、第一次大戦後、関東大震災後、昭和恐慌等の不況などにより、折角手にしたコレクションを手放さざるを得ないというケースもあった。しかしその際の作品売却方法の多くも、やはり売立であったのである。すなわち近代日本における美術品の売立の研究は、この時期における日本・東洋美術作品の移動の実態を明らかにすることを目標としたものである。

また、この時期に売立に出品された作品の多くは、現在日本国内外の多くの美術館・博物館等のコレクションの基礎になっているものであり、美術館・博物館のコレクション史という観点からも重要なものであると考える。

なお本稿でいう「売立」は、単独もしくは複数の美術商が、自らの商品、あるいは所有者から売却の依頼を受けた預かり品を売却する場合もあるが、特定の所蔵者が、入札会という取引方法で実施したものであることを基本とする。

2) 入札会

高橋箒庵によると、江戸時代後期から近代初頭にかけて、日本における美術品の売立は、江戸（東京）においては、^{せり} 糶売りが、大坂（大阪）では入札による売買が一般的であったという。³

糶売りは、いわゆるオークション形式のもので、購入希望者が価額を競り上げていく方式で、最高額を提示したものが落札者となる。

一方、入札は、購入希望作品ごとに購入希望者が希望額を記した札を入札箱に入れ、その最高額が落札額となるという方式である。

しかし、明治後期以降、東京・大阪をはじめ各地における美術品の売立は、入札会という形式が一般化した。

入札会は、まず出品作品を会場に集めそれを購入希望者の観覧に供する下見会を開催し、購入希望者は各購入希望作品の購入希望額を記した札を札元と呼ばれる入札会の主催者に提出する、主催者は各作品について最も高値を付けた購入希望者を落札者とする、という形で売買価格を決定するというのが基本的な形式である。入札希望者が複数の札を入れることが可能であった時期もあり、その際ある購入希望者が入れた複数の札が、異なる購入希望者が入れた最高値の札より高い場合は、この複数の札のうち最安値を落札価格とするというルールであった。

下見会は、近世までは公家・大名・豪商などの権門盛家が所蔵したいわば家宝というべき美術品が、購入希望者であれば観覧できるという機会になるものであり、多くの人々に賑わった。それは同時に、これまで限られた人々の目にしか触れることがなかった美術品が初めて多くの人々に公開された場であったともいえる。

さらに入札会そのものについても、作品の落札状況や価格が新聞などの報道メディアを通じて多くの人々に周知された。これは、それまで一部の人々にしか届かなかった日本東洋の美術品に関する情報を、多くの人々に伝えるという点でも意義深いものがあったと考える。

3) 入札目録

美術品の売立に際し、出品作品の名称、作者、法量などの基本情報を記した目録を作成、印刷し、関係者に配布することは、17 世紀以降のヨーロッパにおけるオークションの発展と並行して行われるようになった。18 世紀以降、フランスでは、オークションカタログが盛んに作製されている。最初は、文字データのみ、その後イラストの挿図、19 世紀後半に写真印刷技術が普及すると、同世紀末には写真入りのオークションカタログが一般化するようになった。⁴

日本において入札会の開催に際しても出品作品の目録を作製することは、明治中期に始まったといわれる。ただ現在遺されている入札目録を見る限り、明治中・後期は、作品名、作者など文字データによる記述を中心としたものであったようである。

東美研究所編『東京美術市場史』によると、入札目録に写真図版を付すことは、明治 42 年、京都で開催された「市田理八氏旧蔵書画屏風類第一回入札」が最初であるとする。一方、渡辺虹衣は、同年やはり京都で開催された日本における写真印刷業の草分けである光村利藻の入札会の売立目録に、出品作品の写真絵葉書を付したのが最初とする。⁵しかし実際は、明治 42 年に作製された売立目録の中に写真入りのものが存在しているので、いつから始まったかは判然としない。

都守淳夫氏によると、売立目録は、明治末期から昭和10年代に到るまで、少なくとも4,000冊以上作製されたという。⁶ この間、印刷技術の進歩により写真精度の向上、図版の大型化、カラー写真の導入など美術写真印刷の技術発展の足跡を、入札目録から確認することも可能である。

また、入札目録は特に著名な入札会ほど10,000冊以上の単位の大量の部数が印刷配布されたと思われ、今日でも古書店の店頭等で多数の入札目録が販売されている。この時期の美術出版物としては最も多くの人々に親しまれたものと思われる。

本稿で取り上げる入札目録100冊は、本稿筆者が、個人的に蒐集した数百冊の売立目録の中から、この入札会全盛期の中で、特に注目された入札会、注目すべき荷主（所蔵する美術品等を売却しようとする者）の入札会、注目すべき作品が収録されている売立目録などを基準に選定した。

4) 売立目録の美術史研究への活用

売立目録、中でも荷主の名が判明する売立目録は、その目録に収録されている作品の、その売立時点までの所有者を明らかにするものとして、美術作品のコレクション史研究に有力な手掛かりを提供するものといえる。

ただし、A家の入札目録に所収された作品であるから、その作品が必ずしもA家の旧蔵品であるとはいえない。

入札会は、あくまでも美術品等の売買を目的として行なわれたものである。売る側は、少しでも出品される作品を高く売却したいという意図に基づいた行動をとる。そのため著名な家の売立の際、他家の所蔵品を紛れ込ませ、その名家の所蔵品と見せかけることによって価格の上昇を狙うというような例も存在する。確実にその名家の所蔵品であったことを立証するためには、売立目録以外の所蔵履歴に関する資料等で裏付けを取る必要がある。

一方、売立目録に収録される美術作品等の写真は、写真そのものが、失われた作品を知るためのデータとして利用できる。本研究で取り上げた売立目録に収録されている作品の中には、関東大震災などの災害や、第二次世界大戦の戦災などで失われた作品も含まれており、売立目録所収の写真のみによってその存在地の姿を確認できるものも、数多く存在するのである。⁷ また、現在所在不明となっている作品についても、売立目録所収の作品写真から、その姿を確認できることになる。現在その所在、存在が確認できない作品についても、その作品が過去に存在した事実、写真図版とはいえそのイメージが確認できることは重要である。⁸

さらに、現存する作品についても、売立当時の写真と現在の作品の姿を比較することによって、売立後の修理などによる改変などの有無を知るための手掛かりとなり得る。周知のとおり、佐竹本「三十六歌仙絵巻」は大正6年11月の「佐竹侯爵家御蔵器入札」に出品され、その後船成金として知られた山本唯三郎の所有に帰した。しかし、その直後の不況

により、山本がこれを手放さざるを得ない状況になった際、益田鈍翁の肝煎りで、歌仙ごと

に切断、売却された。この佐竹家の売立目録に所載される佐竹本「三十六歌仙絵巻」は、切断される前の姿を写した数少ない写真図版である。

また、大正 11 年 7 月の「公爵九條家御什器入札」に出品された尾形光琳筆「孔雀・立葵図」は、売立当時は衝立であったが、現在は屏風に改装されている。同家売立目録所収の同図の写真は、衝立に仕立てられていた時期の姿を伝えるものとして貴重である。

一方、尾形光琳の代表作の一つとして知られる「燕子花図」屏風（根津美術館）は、大正 2 年 4 月の「大谷家（本派本願寺）旧御蔵品入札第一回」に出品された作品であるが、写真から覗うことができるその姿は、現状の同図とは差異がある。すなわち、この売立目録所収の図版では、画面各所に損傷の痕があり、その後修理が行われたことは明らかである。ただ、図版と現状を比較すると、彩色の濃度、細部の図様に微妙な差が存在するところが看取され、この修理の際に一定の補筆、補彩がなされたことで現状の姿になった可能性を想起させる。

以上のように、売立目録、特にその図版は、美術史研究のための資料として、様々な活用

の可能性のあるものなのである。

注

¹ ヨーロッパにおける 17 世紀における美術品オークションに関しては、以下の文献に詳しい。

島本浣『美術カタログ論—記録・記憶・言説 単行本』 三元社 平成 17 年

ただ、ヨーロッパにおけるオークションは、美術作品以外を出品商品とした場合、ヘロドトスの『歴史』に記載される人身売買に関するそれから、2000 年に及ぶ歴史がある。このことに関しては、次の文献に詳しい。

ブライアン・リアマウント著 中村真貴子・下山晃共訳『オークションの社会史：人身売買から絵画取引まで』 高科書店 平成 5 年

² この時期の「売立」の推移に関しては、以下の文献に詳しい。

東美研究所編『東京美術市場史』 東京美術倶楽部 昭和 54 年

小田部 雄次『家宝の行方—美術品が語る名家の明治・大正・昭和』 小学館 平成 16 年

東京美術倶楽部百年史編纂委員会編『美術商の百年：東京美術倶楽部百年史』 東京美術倶楽部・東京美術商協同組合 平成 18 年

³ 高橋籌庵『近世道具移動史』 慶文堂書店 昭和 4 年

⁴ 注 1『美術カタログ論—記録・記憶・言説 単行本』

⁵ 渡邊虹衣『骨董太平記』 太陽出版社 昭和 6 年

⁶ 都守淳夫『売立目録の書誌と全国所在一覧』 勉誠出版 平成 13 年

⁷ 大正 6 年 6 月に開催された「赤星家所蔵品入札」に出品された「金剛般若波羅經解題」は関東大震災で焼失したと伝えられている。

⁸ 平成 12 年以降刊行が進んでいる佐々木丞平・佐々木正子編『古画総覧』（国書刊行会）がこのような意図のもと、現在所在が確認できないものも含めた日本絵画作品のデータベース化を目指したものであることはいままでのま。

2. 入札会の実際―大正7年の水戸徳川家入札会を例に

ここでは、入札会がどのような手順で開催されたのか、具体的な入札会を例に、その裏側を覗いてみることにしたい。

例として取り上げるのは、大正7年10月21日、東京美術倶楽部で入・開札された「徳川侯爵家御蔵品入札」、すなわち、水戸徳川家所蔵品の最初の入札会である。

この入札会を取り上げるのは、大正から昭和初期の多くの名家の入札会に世話方などとして関わった高橋箒庵が、実施に関する詳細な動きをその日記『万象録』に記録しているからである。¹

高橋箒庵の実家は、水戸藩士の家系で、箒庵自身、維新後の水戸徳川家の運営に関する評議会のメンバーであった。旧主家の美術品等の売立ということで、箒庵はこの入札会を成功に導くため、様々な取り組みを行なっている。

以下、『万象録』の記事を参照しながら、大正7年の水戸徳川家の売立が、どのように進めたかについて、検証する。

1) 事前の所蔵品調査

入札会の具体的な実施作業の前になされたのは、荷主の所蔵品調査である。

水戸家は、江戸時代の主たる藩邸であった小石川の屋敷を、明治初頭に新政府に寄付し、向島の旧下屋敷にその本邸を移していた。ただ、この向島邸は、本来、藩主が本来居住しない別邸であるとともに、藩士の滞在、居住、米などの江戸藩邸運営に必要な物資の貯蔵用の屋敷であり、所蔵の美術品等の収蔵にふさわしい宝蔵等もなかった。また周辺に工場が増加するなど環境も悪化したため、この時期、屋敷の移動が同家内で検討されていた。そこで屋敷を移す前に、所蔵品の中で重要なものを残し、それ以外のものについては売却処分するという方針が立てられた。これは同時に、入札会によって得られる収益を活用することで水戸徳川家の財政状況の安定を狙ったものでもあった。

すでに、前年の大正5年6月4日、水戸家当主の徳川圀順が箒庵の自宅を訪ね、高橋箒庵にその相談を行っている。この時点で箒庵は、この大正5年は赤星家の入札など大入札が立て込んでいたため時期的に不適切であり、翌年まで勘考すべき旨回答している。ただ、その後も入札会による所蔵品売却の方針は変わらず、翌年箒庵に調査が依頼されたという次第である。

調査は、大正7年5月14日より開始された。調査にあたったのは、箒庵と前帝室博物館理事の今泉雄作である。この日は水戸家当主の徳川圀順と同家の家職が立ち会い、茶器の調査から開始された。調査の結果、名物を「上の上」、佳品を「上」、同家縁故品を別口などと、個々の作品のランク付けを行なっている。

5月18日には、第2回として掛物、巻物、書画帖等の調査を行なった。この2日間での調査済みの作品は、全体の三分の一余りであった。

その後、箒庵は、松江藩旧藩主松平伯爵家の所蔵品調査のため松江に赴くなど多忙であったため、次の調査は7月4日に行われた。この日は、江戸時代以来の古筆鑑定の家である古筆家の当主で、当時益田鈍翁の弟益田英作が開いた古美術店多聞店に勤務していた古

筆了任を伴って、漆器類などの調査を行なった。6 日、10 日も漆器類の調査を行なった。14 日には、屏風の調査を行ない、この日ですべての調査を完了した。

2) 入札会による売立の方針決定

調査の結果については水戸徳川家家職の福原修によって点数、類別がとり纏められ、8 月 3 日、避暑のため伊香保に滞在していた箒庵のもとに届けられた。福原からは、中の部以下 900 余点について、水戸家では売却の方針が決定されたので、その売却方法を研究してほしいとの依頼が箒庵に寄せられた。

これを受けて翌 4 日、箒庵は福原に上等の道具も半数は売却し、その売却益で水戸家に 100 万円ほどの基本金を設立してはどうか、家職中でよく良く検討するよう提案する手紙を送っている。

8 月 14 日には古筆了任が東京より伊香保滞在中の箒庵を訪問、古美術商の川部利吉が 10 月 18 日特別下見、19・20 日普通下見、21 日入札の腹案を有しているとのことであり、川部を札元に加えてこの日程で実施することを提案した。箒庵は、この提案を水戸徳川家に申し入れると答えた。

箒庵は 21 日に伊香保から帰京、24 日向島の水戸徳川邸で開催された同家の評議員会に出席した。出席者は、水戸徳川家当主徳川圀順、手塚任、福原修の両家職、評議員の室田義文、石河幹明、高橋皐、井坂孝と箒庵であった。ここで箒庵は、所蔵品調査の結果について調査主任として報告、調査済みの 2000 余点中、同家にとっての縁故品、必要品を除きすべて売却し、100 万円の基金を創設することで、同家の財政的安定を図ることを提案した。会議ではこの方針が認められ、入札会による売立処分が決定した。また、日程についても 14 日にあった提案のとおり、10 月 18 日特別下見、19・20 日普通下見、21 日入札での実施について、その指図万端、箒庵に一任された。

3) 札元の決定

翌 8 月 25 日、箒庵は、川部利吉に入札会の日程の決定を告げると同時に、入札会の札元を務める古美術商 13 名を以下の通り決定した。

東京 山澄力蔵・中村作次郎・梅沢安蔵・川部商会・多聞店・池田慶次郎

大阪 戸田弥七・山中吉郎兵衛・山中与七・春海商店

京都 林新助・服部七兵衛・土橋嘉兵衛

26 日には、山澄力蔵が、札元に推挙された謝礼のため、箒庵を訪ねている。

9 月 2 日には、札元 13 人が水戸徳川家に挨拶のため参会した。箒庵は、札元一同に対して、以下のような挨拶をしたと『万象録』は伝えている。長文ではあるが、箒庵のこの入札会にかかる意気込みを伝えるため、以下に記す。

今回御当家御都合に依り入札売却に附すべき道具は先祖伝来品も少なからず、今日の時勢之を入札売却に附するは已むを得ざる次第なれども、名器は何処までも名器の品格を失はざるやう鄭重に之を取扱ふは勿論、買主も成るべく其道具に相当する人物ならんことを心掛け、入開札の際にも真摯なる態度を以て誠実に之を取扱ふやう注意せられたし、余は従来屢ば諸大家の入札世話方を引受けたれども今回は別して旧藩主の所蔵品にして、然も当家評議員中に相談相手と為るべき人なきが為め殆んど一身にて

全責任を負ふが如き有様にて懸念に堪へず、就て年来の馴染甲斐に粉骨碎身の援助を乞ひたし。

また徳川圀順も「宜しく願ふ」という一言を添えた。

9月11日、大阪の古美術商戸田弥七、山中与七、池戸宗三郎が、箒庵のもとに、札元加入の挨拶に参上した。

水戸徳川家入札の場合、箒庵の差配により、札元はスムーズに決定されたものと思われる。しかし札元の決定は、古美術商同士の紛争のもととなることや、荷主の関係者による横槍などで、決定まで紆余曲折を経ることもしばしばあった。特に、高額落札が続出することが予想される入札会や世間の注目を集めやすい名家の入札会の場合、札元の決定をめぐる紛争がしばしば発生した。

例えば、大正7年3月に開かれた「稲葉子爵家平岡家御蔵品入札」では、当初札元に入っていなかった春海商店、梅沢安蔵らが、世話方の箒庵に陳情し、札元に加入したことが同年1月27日、2月2日条に記されている。

4) 出品作品の選定

出品作品の選定は、まず8月26日、箒庵自身が水戸家向島邸で開始したが、先に調査した2,000余点の記録に漏れているものも少なくなかったため、9月2日の札元参会の際に行なうこととなった。

選定は、9月2日の札元参会の直後から開始され、翌3日正午にこの作業を終えた。この2日間で600余点の作品を調査した。3日には、札元の要望に応じて、非売品の大燈国師墨蹟や円山応挙の作品が展覧された。またこの日、漆器類の調査を大阪の漆芸家島野三秋が見学した。これは、大阪の弁護士で数寄者としても知られた高谷恒太郎（号宗範）の紹介によるものである。島野は翌4日、箒庵を訪問し見学の謝礼を述べるとともに、水戸家への自作香合の献上の取り次ぎを依頼している。

4日札元を代表して、中村作次郎が箒庵に出品作品の最低評価額を700,000円と報告した。

なお、箒庵は、この時期すでに『大正名器鑑』の編集作業に入っていたが、これら一連の水戸家の所蔵品調査の中で、同書に収録すべき茶碗、茶入を選定し、9月5日、明治後期以降、美術書の出版で数多くの実績を遺している審美書院の撮影隊に、その写真撮影を行なわせている。

その後9月11日、徳川圀順が茨城県瑞龍山（水戸徳川家墓所の所在地）の同家宝蔵に収蔵されていた茶器、香木（「大内」一名「蘭奢待」、「小倉山」一名「初音」等を含む）等を持参して箒庵を訪ねた。箒庵はこれらの出品を決定し、古筆了任らに写真撮影に取り掛からせた。

また圀順は、瑞龍山宝蔵で出品予定で目録掲載済みの「玉堂肩衝茶入」（現、水府明徳会徳川博物館）に関する水戸斉昭の記録が発見されたことを告げ、この作品が徳川家康の遺愛品で水戸家由緒品のため、親引きとなるよう手配を依頼、代わりに「漱芳茶入」の出品を申し入れた。箒庵は、この茶入の撮影を行なうこととした。

ただ、「大内」などの香木については、正倉院の「蘭奢待」から切り取られたものか疑問であるため、古筆了任に少量を薫じさせ、その香りを確認している。

翌12日には香木の重量を測定すると同時に、「大内」と「初音」の一部を切り取った。

これは前日、箒庵が罔順に、これらの香木の少量を頂戴したい旨願ひ出て許可を得ていたためであり、箒庵は、切り取ったことを電話で同家家職に連絡している。

5) 保険額の設定

9月4日、出品作品の当初の選定を終えた中村作次郎は、出品作品全体の最低評価額を700,000円と報告し、あわせて箒庵と保険金の相談を行なった。入札会への出品に関しては、万が一の事故、犯罪等に備え、出品作品に保険をかけるのが通例であったが、従来その保険金は札元側が負担していた。しかしこの入札会より、保険金は荷主が負担することとなったので、中村は、箒庵と、保険金の額について事前に打ち合わせたのである。

箒庵は、旧主家の所蔵品の売立であることや、自らが提案した入札による売却であることに配慮して、1,200,000円から1,300,000円の保険をかけるよう中村に依頼した。

10月15日、中村作次郎が箒庵のもとに保険証書を持参した。保険額830,000円は、先の箒庵の希望額には及ばなかったが、入札会の保険としては空前の高額であることに箒庵は満足している。また出品作品そのものの保全のため、美術倶楽部では名物品については毎日長持に納め不寝番を付けて警備し、事あれば番人総がかりで安全な場所に避難させるのが先例であり、この入札でもこの体制をとるということで、箒庵は満足の意を表している。保険証書は、日ならず水戸家へ回送された模様である。

6) 売立目録の作製

この入札会の売立目録の作製に関する直接的な記述は、『萬象録』においては見出すことはできない。先述のとおり、作品調査に際しての審美書院等による写真撮影の記述が散見されるのみであるが、当該の売立目録が審美書院より版行されていることから、この調査の際に撮影された写真が売立目録にも使用された可能性もある。

ところでこの写真撮影であるが、9月5日撮影分の茶碗、茶入の写真について同20日、箒庵は審美書院に出向き、茶入の部の写真が甚だ不出来であるから、今後茶入の撮影については一定の体裁を定め、再撮影の必要がないよう注意を行っている。この再撮影は10月13日に行われているが、入札会の下見が同17日から、入開札が21日であることを考慮すると、13日撮影分が売立目録の印刷に間にあったとは思えない。²この9月5日の茶碗、茶入の撮影は、あくまでも『大正名器鑑』への掲載を主目的としたものと思われる。

売立目録の作製は、それに習熟した入札会の札元と、審美書院などの印刷、出版所の連携により進められ、箒庵は写真撮影などの機会にその断片的な撮影記録を『萬象録』に書き留めたものと考えらるべきであろう。

ただ、この間の9月13日、印刷出版業精芸社社長の和田幹男が箒庵を訪ね、同社も今後入札会の目録作製を引き受けたいとのことで、その周旋を依頼している。この時期各家の入札会の世話方を多数引き受けていた箒庵には、このような依頼もしばしば寄せられたと思われる。

なお、『萬象録』の中で箒庵が売立目録作製に関する記述を遺しているものもある。大正5年5月1日条によると、前年に開催された赤星家（第1回）の売立目録に関して、表紙の「古今和歌集仮名序」、「籬菊蒔絵香合 銘九重」という題材選択を箒庵、デザインを古筆、古画研究家として知られる田中親美、コロタイプのカラー印刷を審美書院が行ったことを

伝えると同時に、13,500部という大量の部数の印刷配布を行ったことがわかる。大きな売り上げが予想される入札会の目録には、当時最高のデザインや印刷技術が駆使されるとともに、大量の部数の目録が作製、配布されたのである。

また第一次大戦の影響で、印刷に使用するアート紙の輸入が滞っている状況の中、辛うじて必要な用紙が確保できたことを記すとともに、日本ではまだ上質なアート紙を生産する技術が確立されていないことを嘆いている。実業界での最後の勤務先が王子製紙であった箒庵らしい感慨とも言えるが、そのような中で必要な用紙を確保できたのは、箒庵の王子製紙時代の人脈が活かされたからであるかもしれない。

7) 広報

入札会の広報は、作品希望者への案内状、各種下見の開催など、いわば内輪向けの広報だけではなく、新聞というメディアを用いた広報も活用された。箒庵は『時事新報』紙上に『東都茶会記』³というコラムを当時連載していたので、これが水戸家のみならず箒庵が関係した様々な入札会の広報に大きな役割を果たしたと思われる。

水戸徳川家の入札会に直接関連する記事としては、同年10月2日付けの「瓢乎瓢乎」⁴、10月16日付けの「天下の名香」⁵があげられる。前者は水戸家八代徳川斉修（哀公）が収集した瓢箪にちなんだ書画道具類の内容を紹介し、後者は我が国における香木の伝来を紹介するとともに、水戸家の「大内」、「小倉山」が、正倉院収蔵の「蘭奢待」に比肩しうる名香木であることを伝える。両記事とも、これらの作品がこの入札会に出品されることを伝えるものである。

これらは10月18日から始まる入札会に世間の注目を集め、前景気を煽る意味からも重要な役割を果たしたと思われる。箒庵は、自らが世話方等で関与した入札会の広報的記事を『東都茶会記』等にしばしば執筆しているが、2度にわたる入札会広報の記事の掲載は極めて異例で、これは旧主家であった水戸徳川家の入札会であることを特に意識して行ったことであると判断される。

ただ、水戸徳川家の入札会向けの記事ということでは、さらに早い時期からその準備用と思われる広報記事を執筆している。それは同年6月6日付けの「水戸殿御所持」⁶である。

箒庵はこの年の6月6日より、大正5年向島水戸徳川邸内に自らが移築した茶室嬉森庵で初風炉茶会を催したが、それに際し水戸家当主徳川圀順に依頼し、水戸徳川家に伝来する「曜変天目茶碗」、「井戸茶碗 銘老僧」、「玉堂肩衝」、「圓悟克勤墨蹟」などの名品を会場に借用、展示するとともに、やはり借用した数々の水戸家伝来の茶器を茶会で使用した。この茶会に招待された客は、旧大名家、三井財閥を中心とした東西財界人、当代を代表する茶人等の文化人など多数に及んだ。箒庵はこの記事の中で、水戸家伝来品の代表的なものについて詳述している。

先述のとおり、水戸徳川家の伝来品の入札会による売却が正式に決定したのは同年8月以降であるが、その下準備としての所蔵品調査はすでに5月に箒庵を中心に始まっており、この茶会に出品された作品も箒庵が調査で確認したものである。このような前後関係から推察すると、箒庵は茶会の記事にかこつけて、やがて入札会に出品される可能性があるこれらの作品に対する世間の認識を喚起し、その世評を高めるための広報手段として、水戸

徳川家側に伝来品の茶会への出品を依頼したのではなかろうか。またこの茶会に招かれた財界人、茶人等の中には、入札会における出品作品の入札者になる可能性が高い者も多数含まれていると想定すれば、この茶会そのものが、先々実施される入札会の下見の機会となる可能性も想定したのではなかろうか。

事実、この入札会に出品された目玉作品というべき「曜変天目茶碗」（現、藤田美術館）、「井戸茶碗 銘老僧」（現、藤田美術館）、「圓悟克勤墨蹟」、香木「大内」などを落札した大阪藤田財閥の当主藤田平太郎は、6月12日に三井八郎次郎、益田鈍翁、加藤正義らとともに、この茶会に招かれている（『萬象録』同日条）。

8) 特別内見

特別内見、下見会等の準備に関しても、出品作品選定の作業と並行して、その準備を開始している。すなわち、9月11日には、古美術商中村作次郎が簞庵宅を訪問し、出品作品に貼付する番号札について、篆刻家益田香遠に「後樂園」の印文を刻した瓢形印を作製させこの印文を捺した札を各作品の貼り付ける形式を提案している。

その後、9月25日中村作次郎が簞庵を訪問。先に決定した日程に加え、10月4日にも特別内見を実施したい旨、伝えた。そこでこのことを簞庵が徳川家と交渉すること、招待する好事家30人から40人あての招待状の差出人に簞庵の名義を使用することとなった。

ただ、実際には、この特別内見は、10月10日向島徳川邸で開かれた。来会者は、三井高保、三井八郎次郎、山本唯三郎、近藤廉平、大倉喜八郎、加藤正義、益田鈍翁、団琢磨、島徳蔵ら20名余り。

世話方として応接に出た簞庵は、山本唯三郎や島徳蔵らいわゆる成金連に、「君等は今日志を得て大家を起したる人々にて、徳川初代の大名に比較すれば少くも水戸家三十五万石位の資産を所有する者なり、されば徳川時代に於て三十五万石の水戸家が所有したる道具は君等に於ても亦之を所有するの必要あるべし、されど今日見渡したる所にてお大名の蔵品入札の最後なるやも知らず、此機会を逸すれば他日名品は名家の手に入りて最早一時に名物数品を市場に見るが如き時勢に逢着する事能はざるべし、今度水戸家の入札会に於ては天下の名物十数点以上に上り、而して此等の諸名品を悉く一手に買収するも猶ほ百万円に達せず、西洋諸国に於ける油絵一面の代価にも足らざるものなれば、日本の成金も少しく世界的の勇気を奮ひて此際大に買収し置くべし、是れ唯好事心と云うのみに非ず或る意味に於ては一種老巧なる投資法なるやも知れず」と作品購入をけしかけている。

これに対し、大阪の大物相場師である島徳蔵は、「貴下の側に居りて段々講釈を聴聞すれば遂ひ釣込まれて道楽仲間に入るの虞れあれば勿々遁げ出すに如かず」と答えたという。

古美術品の購入を、成金が経済的に成功した証として、また投資手段として山本や島に語る簞庵が、旧主家の売立に関する経済的成功を意図したのは確かである。当時古美術品の所有を、財産蓄積の一環と見なす風潮が強かったこと、この当時の入札会等における古美術品の最大の買い手が、ここに登場する、いわゆる成金連であったことなどを、ここから読み取ることができる。実際、山本は、この前年の佐竹侯爵家の入札において358,000円で落札された「佐竹本三十六歌仙絵巻」を、この年の1月に買収しているし、「遁げ出すに如かず」と簞庵に返した島も、この大正期から昭和初頭に多くの古美術品を蒐集している。

もう一つ注目されるのは、「此等の諸名品を悉く一手に買収するも猶ほ百万円に達せず、西洋諸国に於ける油絵一面の代価にも足らざるものなれば」という記述である。箒庵のこの感慨は、大正初期から続く、入札会における古美術品の高額落札の続出にも拘らず、西洋美術の諸作品に較べ、日本美術の価格が低いという嘆きととることができる。もちろん、大戦景気を背景に、日本の古美術の価格が高騰しつつある時期であっても、西洋美術に較べて日本の古美術が割安であり、この後、さらに日本の古美術の価格が上昇するのではないかという山本や島に対する購入勧誘の意図に基づいた言葉であることは確かである。しかし、明治期の古美術品への注目の低さと低価格、それに伴う古美術品の海外流出を目の当たりにしてきた箒庵は、古美術品の国内価格が高額であることによって、海外流出のリスクを小さくできると考えたのかもしれない。

9) 非公式の内見、調査等

この間、水戸徳川家の出品予定作品は、箒庵の仲介により、特別内見等の公式な観覧以外の形でも、関係者に接する機会が与えられている。

9月24日には、松浦陞（旧平戸藩主）が箒庵を訪問、陶磁器研究者の奥田誠一が、水戸家所有の「曜変天目茶碗」（現、藤田美術館）の写真撮影を希望しているので、その旨水戸家に取り次いでほしいと依頼した。奥田は、大正3年、大河内正敏らと彩壺会を結成し、近代における陶磁器研究の先駆的存在となった人物である。これは、入札会にかこつけての作品調査依頼であるが、次は箒庵自身による入札会の関係者への広報の意図が含まれる事例といえる。

10月6日、箒庵は、自邸に益田鈍翁、益田たき、室田義文、岩原謙三を招き茶会を催した。この際、9月12日に切り取った「大内」、「初音」を客に試し聞きさせている。箒庵は、「試験のため」としているが、入札会において入札をする可能性がある人々に試し聞きをさせるのは、彼らの入札意欲を高めるためのキャンペーンの一環とも見ることができるだろう。また、たとえ彼らがこの入札に参加しない場合でも、将来における別の入札会への参加、箒庵が主導する茶道数寄などへの人脈構築、深化に寄与するものであるといえよう。

10) 下見会

入札会場である両国美術倶楽部における下見会の準備は、10月17日に始まった。箒庵は、夕刻から両国美術倶楽部に出向き入札品展示の実況検分を行なっている。当日は別の入札会の開札が行われていたので、展示の準備は階下のみで行われていたと『萬象録』は伝える。⁷水戸徳川家の入札会の出品作品には、展示面積を多く必要とする漆芸品の優品が多く、本館だけではおさまりきらないため、仮設建物を設置、葵紋の引幕などで装飾の上、そこに漆芸品等を展示していたという。

18日、特別下見が始まった。この特別下見のため箒庵、室田義文（水戸藩出身の外交官、財界人）の名で800通の案内状を全国の数寄者に送ったという。

大正の船成金三人男の一人内田信也が来場したので、箒庵は、内田に茨城県出身であるのだから記念に入札を、と勧めている。この他の来場者として、徳川義親（旧尾張藩主）、安川敬一郎（安川電気等創業者）、金子堅太郎（大日本帝国憲法起草者の一人で、官僚、外交官等として活躍）、下條正雄（日本画家下條桂谷）等の名を記録している。会場周辺は、

自動車数十台が列をなす雑踏で、巡査 6 名が出張しても手不足の感があったということで、人気の高さに入札会の成功を期待している。

なおこの日来場した徳川義親には、尾張徳川家所蔵の茶入、茶碗の悉皆拝見を依頼しその承諾を得、また金子堅太郎には、旧藩主黒田家所蔵の「博多文琳茶入」拝見の仲介を依頼している。これは『大正名器鑑』の編纂に關しての協力を求めてのものである。入札会の下見は、茶会などとともに、当時の華族、政財界人や数寄者が交流する場としての機能を有していたとともに、箒庵はそのような機会を巧みに活用して、自らの茶事等に関する諸事業の展開の機会としていたのであろう。

翌 19 日には、妻楊子とともに美術俱樂部へと赴いた。来場していた名古屋の好事家関戸守彦と園悟墨蹟の落札価格予想で雑談している。19 日・20 日の下見会に關する『萬象録』の記事はこの件のみである。両日は一般下見の日程であったためであらう。

あわせて、この前後の水戸徳川家入札会關連の記事を『萬象録』から以下にあげる。

16 日北海道の実業家持田謹也が箒庵を訪問、入札会における購入作品候補についてのアドバイスを求めた。箒庵は、中等品 2・3 点を指示したという。

17 日京都の古美術商服部七兵衛が来宅、第一次大戦終結間近で株価下落が心配される時局ではあったが、關西方面の美術市場は活発であるとの報告を受け、水戸家の入札にも時局の心配はなかろうと想像している。

20 日、自身の入札候補作品を出入りの古美術商である池田慶次郎に選定させている。入札当日の 21 日には、入札価格の協議を池田と行っている。

11) 入・開札

10 月 21 日、美術俱樂部において入・開札が行われた。結果は総売上 118 万円。徳川家康より伝来とされ、水戸徳川家の意向で出品はするが売却はしないという方針であった「玉堂肩衝」などは、予定通り親引きとされた。箒庵は「実は此入札に先ち独塊構和提議ありしが爲め、株式が下落し平和気構へにて景氣沈衰の状態を呈しければ、折悪しき時に此入札会を催して其結果如何あらんと人知れず大に心配せしに、名家の余慶とや云はん此好結果を齎らしければ、余も亦大に面目を施し当夏以来周旋奔走の甲斐ありしこそ嬉しけれ」と感慨を記している。同夜は成功の祝い、会場で徳川侯爵らと夕食を喫している。

なお、入札会の際世話方は、開札への立ち会い、落札の検印押捺、落札価格の帳簿記入など、落札の公正を確認する作業を行うことが通例であったが（『萬象録』大正 5 年 6 月 11 日条「赤星第 1 回売立開札」など）、この入札会におけるこれらの作業の記述は見受けられない。

12) 終了後

10 月 21 日の入・開札が終了した後は、入札会のいわば後始末に關する記述が、『萬象録』にはある。

まず 10 月 24 日、水戸徳川家の道具調査に關し、今泉雄作、古筆了任への謝礼、札元招待会について、水戸家家職の福原修より相談があった。

12 月 4 日には、その福原修が水戸家の使者として、世話方の謝礼として哀公遺愛の「回也香合」と白縮緬 1 疋が、箒庵に贈られた。

同 10 日には札元慰労会が浜町常磐屋で開催された。謝礼として札元一同に菓子折りと 50 円の三越切手が贈られた。

さて入札会の売り上げ金の処分についてであるが、12 月 5 日に水戸徳川家の評議会が開催された。その場で、売却代金のうち 93 万円を川崎銀行に定期預金として預け、その後証券などで活用する方針が決定された。また売上金のうち 1 万円を永年同家に出仕した家職以下の男女使用人に分与されることになった。

なお水戸徳川家の入札会に関する売上金の分配の記述はみうけられないが、『萬象録』には、前年開催された秋元子爵家、赤星家などの入札会に関連する記述が散見される。それによると、売上金のうちの 8 割が出品者の取り分で 2 割を入札会開催の手数料とし、2 割の手数料の半分が開催にかかる諸費用として札元一同に収められ、残り半分が個々の出品作品の仲介手数料として、それを仲介した美術商、道具商などに分配されたと見られる。

大正 5 年 6 月 17 日条には、「秋元家入札札元報酬」の題のもと、同入札総売り上げの 1 割に当たる 147,000 円の札元による分配案が記されており、32,000 円余の目録作製等諸経費に、入札関係者への報酬、謝礼や社寺等への寄付など加えた額を 45,000 円余とし、残りの 100,000 円余を札元一同で分配するという内訳が記されている。これに対して箒庵は、世話方である箒庵ならびに朝吹英二に対する報酬は無用であること、そして翌日、朝吹と相談の上、これを社寺等へ寄付する旨を伝えている。

注

¹ 本稿における『萬象録』の参照、引用等は以下に依った。

高橋義雄著、大濱徹也・熊倉功夫・筒井紘一校訂『萬象録：高橋箒庵日記』第 1 巻～第 8 巻 思文閣出版 昭和 61 年～平成 3 年

² 例えば水戸徳川家所蔵の大名物茶入「玉堂肩衝」の写真は、目録と『大正名器鑑』では明らかに異なる。

³ 『時事新報』は福沢諭吉が創刊した新聞であり、箒庵は、慶應義塾に学んだ後実業界に転じるまで、『時事新報』の記者であった。明治 44 年に実業界を引退し茶道中心の生活を送るようになった直後の同 45 年から、同紙にこの連載を始めた。箒庵はそののち、この連載の 1 年分が纏まると書籍としての刊行を行った。この連載は、大正 8 年までを「東都茶会記」、大正 9 年から 15 年までを「大正茶道記」と題して継続された。さらに昭和 2 年から 12 年までを「昭和茶道記」と題して連載を継続したが、これは『国民新聞』に掲載された。

なお本稿における『東都茶会記』の参照は以下による。

高橋 箒庵著、熊倉功夫・原田茂弘校注『東都茶会記（近代茶会史料集成）』1～5 淡交社 平成 12 年

⁴ 『東都茶会記』はこの「瓢乎瓢乎」の日付を 10 月 2 日としているが、『萬象録』によると、箒庵はその口授を 10 月 9 日に行っている。とすればこの 10 月 2 日は、10 月 12 日の誤記ではなかろうか。

⁵ 『萬象録』によると、「天下の名香」の口授は 10 月 13 日に行われている。

⁶ 『萬象録』によると、「水戸殿御所持」の口授は 6 月 29 日に行われている。

⁷ 大正 7 年 10 月 17 日、東京美術倶楽部では「越後阿部家府下某旧家御蔵器入札」の入札が実施されていた（都守淳夫『売立目録の書誌と全国所在一覧』 勉誠出版 平成 13 年）。

3. 高橋箒庵と入札会－入札会の情報戦略

前項で述べたように、入札会の実施及びその成功には世話方の役割が極めて大きかったことが了解されると思う。

大正前半期のいわゆる大入札時代を到来させたのは、この水戸徳川家の入札会の世話方として八面六臂の活躍をした高橋箒庵といっても過言ではない。箒庵が入札会の世話方を務めたのは、この水戸徳川家の入札会だけではなく、大正6年の秋元子爵家、赤星家(3回)、佐竹侯爵家、7年の稲葉子爵家、松井子爵家、同8年の鳥取池田家、鹿島(岩蔵)家、郷(純造)家など、この時期の多数に及ぶ。

箒庵の伝歴に関しては、自らの自伝的随筆である『箒のあと』¹のほか、その実業家としての人生、茶人・数寄者としての人生について、多くの研究者等によりたびたび紹介されている。²詳細についてはこれらに譲ることとし、ここでは美術品、道具類等の入札会に関連して、箒庵がどのような活動を行ったか、またそれが当時の入札会の隆盛にどのように貢献したか等について考察したい。

1) 実業家時代の高橋箒庵

高橋箒庵(本名義雄)は文久元年、水戸で水戸藩士高橋常房の四男に生まれた。幼少時は幕末維新の混乱の中家計が困窮し、商家での丁稚奉公なども経験した。水戸の漢学塾、新設の茨城中学で学業を修める中、新聞『時事新報』の設立を目論む福沢諭吉が、その記者育成のために慶應義塾で文才のある学生を募集したのに応募。明治14年に慶應義塾に入学し、翌15年早くも『時事新報』に入社した。

明治20年には交友のあった前橋の生糸商人下村善太郎の援助でアメリカ、ヨーロッパ各国への商学の学習、商業視察などのため洋行した。この中で、当時フィラデルフィアで隆盛を誇っていたデパートメント・ストア、ワナメーカーを視察したことが、のちの三越呉服店(後の三越百貨店)の近代化につながったと言われている。また、各地の美術館、博物館なども多数見学し、欧米における展示文化や、それが国民への教育、文化等に関する情報伝達に果たす役割等についても認識を深めた。

明治22年に帰国の後、明治24年に井上馨の仲介で三井銀行へ入行。その直後から、当時行内で問題となっていた不良債権処理を任務とする整理係となる中で、貸付の抵当となっていた美術品、道具類等の売却などの処理に携わり、これらに関する知識や鑑識眼、取引の方法、美術商、道具商らとの交流を広げて行った。とりわけよく知られているのは、江戸十人組の材木商の家柄で、明治初頭に西洋製糸機械を導入して近代製糸業を開いた河島伝兵衛(川島迂叟)の三井銀行に対する多額の負債を処理するため、抵当となっていたそのコレクションを東京における最初期の入札会で処分したことである。また明治26年に大阪支店支配人となった後、やはり三井銀行が抵当として預かっていた江戸時代の大坂における大両替商の一角であった長田作兵衛(加島屋作兵衛)家などのコレクション処分に当たっている。

一方、欧米洋行時から美術館、博物館などを巡り美術鑑賞に興味を有していた箒庵は、大阪在勤時から本格的に絵画を中心とした美術品の蒐集を始め、書画に関する鑑識眼も身

につけていったと『箒のあと』で述べている。またこの時期、京阪、奈良などの古社寺を歴訪し、その所蔵品である美術品、文化財などに触れる機会も多かったようである。

なお江戸時代以来の大商家であった三井家一統では、江戸時代の歴代当主が茶道に親しみ、近代以降も茶道が盛んであった。明治維新以降三井が大財閥化していく中で、益田孝（鈍翁）をはじめとする三井財閥の幹部や関係する政財界人なども茶道を嗜む者が多く、箒庵も入行後茶道を嗜むようになる。茶を通じた交友は、明治 20 年代末から 30 年代初頭に、益田鈍翁の大師会や、旧平戸藩主松浦家の当主で茶道鎮信流の家元でもあった松浦詮の和敬会などが発足するとともに、当時の上流社会を形成する旧大名・公家などの華族、政財界人、文化人などを巻き込んで大きなものへと成長するが、箒庵もそのような交流の中で中心的な存在になっていった。³

明治 28 年、箒庵は三井銀行から転じて三井呉服店（のちの三越百貨店）理事となり、その改革にあたることとなった。これに際しては、フィラデルフィアのデパートメント・ストア、ワナメーカーなどを洋行時に現地視察をした経験が活かし、近代的なデパートメント・ストアを目指したものであることは夙に指摘されている。具体的には、従来の座売りを改めてショウ・ケースなどを活用した展示販売の方法を主体としたこと、店員の勤務形態の年季制から社員制に変更したこと、女子店員を採用したこと、⁴従来の大福帳ではなく近代的な簿記による会計を導入したことなどがあげられる。また、数々のイベントの開催、広報用冊子の発行、ポスターやビラの印刷、配布、絵看板の導入、新聞広告など、積極的な宣伝広報活動を導入した。

この宣伝広報活動の中核をなしたのが、箒庵が三井呉服店遺跡直後に設立した意匠係である。意匠係には多くの島崎柳塢や福井江亭らの日本画家等が多数在籍し、これら広報物のデザインに携わる一方、商品の呉服の模様などのデザインを主な職務とした。これは、既存の呉服の模様とは異なる新たな呉服模様などを創出する、いわば三井呉服店（三越）発のブランド・デザインの確立を目指したものである。箒庵は、意匠係新案の模様を新橋、柳橋の芸妓などに着させ、流行の先導役を果たさせるという、いわばファッション・モデルのような宣伝広報の手法も採用している。

特に箒庵に関わったものとして良く知られているのが「元禄模様」の流行である。箒庵は、日露戦争後の世相が江戸時代の元禄期に通じる好景気、派手好みの気風になるものと予測し、意匠部にその世相に合致するような呉服衣装などを尾形光琳など作品のデザインをもとに創出させた。また、元禄図案の懸賞公募を行った。その三越ブランドの衣装を新橋演舞場で上演される「元禄踊り」の衣装とするなどの宣伝活動を行った。これらの活動によってもたらされた「元禄模様」は呉服に止まらず、ネクタイ、手拭、櫛などの小間物などにも元禄ブランドをつけて売り出すことにもつながり、さらに世間に「元禄ブーム」と称すべき流行を創出するに至った。近代における文化流行の発信源として果たすデパートメント・ストアの役割を認識させるものであったのである。

箒庵は、明治 31 年には、三井呉服店理事に加え三井鉱山理事を兼任、同社専務理事として経営の最高責任を負う団琢磨を補佐した。その後明治 42 年には王子製紙の専務理事に転じ、明治 44 年、51 歳を期に実業界を引退し、茶人、茶道研究者として、またこれらの領域に関する著述者としての第二の人生をスタートさせた。

2) 入札会の発展と高橋箒庵

箒庵が実業界を引退し、茶道に関わる活動や著述を主な活動とし始める明治末年頃から大正期以降、入札会による美術品、道具類の取引が発展し、また入札会の出品作品の写真を掲載する売立目録の作製も一般化する。そのような中で、箒庵はさまざまな形で入札会や売立目録の作製に関わることになる。

引退から間もない大正初頭においては、関西では西本願寺大谷家、雁半中村家などの大規模な入札会があったものの、東京では明治天皇崩御、大喪に関連するいわゆる自粛ムード、大正 3 年に始まった第一次世界大戦開戦直後の見通しの不透明さから景気の状態は思わしくなく、大規模な入札会は開かれなかった。この間箒庵は、東西の入札会の下見観覧、自らのコレクション形成のための入札参加、友人、知人の入札希望者へのアドバイス、美術商、道具商らとの入札会等に関する情報交換などで入札会に関わっていたことを、『萬象録』は伝えている。また、茶人、茶道研究者として各種の茶会に出席し、あるいは旧大名家の所蔵する美術品、道具類の調査などを行い、それらの内容を『東都茶道記』の記事として著述、発表している。

ところが、大正 6 年に開催された秋元子爵家、赤星家 (3 回)、佐竹侯爵家の入札会のいずれについても箒庵は世話方を務め、これらの入札会が後に「入札三尊」と称されるほどの成功を収めたことから、その後箒庵には多くの入札会の世話方就任の依頼が殺到することになったと思われる。

なぜ箒庵が数多くの大入札会で世話方の役割を担うことになったのか。この問題に関して一つの契機となったのは、これらの入札会の前年 5 月・7 月に開催された仙台伊達家の 2 回の入札会であったと考える。この入札会は伊達政宗以来の大大名家である同家のコレクションが初めて大規模に公開入札にかけられるということで評判を呼び、また 12,000 冊の入札目録の作製、配布が行われ、目録付属の入場券がなければ下見会の観覧を認めないなどの工夫を行い、総売り上げは 1,500,000 円を超えた。

大入札会時代の幕開けを飾るこの入札会を運営という面から見た場合特徴的であるのは、世話方を馬越恭平 (化生) が務めたことであった。馬越は、三井財閥から出て大日本麦酒社長を務め、また茶人としても知られた人物で、数多くの茶器、美術品のコレクターでもあった。それまでの入札会の運営は、荷主と札元、あるいは札元の合議で運営されることが大半で、これは茶人として知られる大物財界人が入札会の世話方を務めた最初期の例であったと思われる。

入札会の運営ということを考えた場合、まず必要なのが入札に出品される商品で、特に当時、優秀な美術品、道具類を所蔵する旧大名家を中心とした華族や財界茶人などからの出品が求められた。また、華族の旧大名なども、この時期には経済的な苦境から脱却や一家の財政的安定を図るなどの目的のために伝家の名宝を手放す動きが広がっていた。一方、近代以降の日本経済の発展の中で、財閥関係者を中心に茶道を嗜む者が増え、彼らは旧大名家等が所蔵する名物茶器を中心とする美術品、道具類のコレクションに熱心に取り組んでいた。このような美術品・道具類の需給関係の中で、旧大名家を中心とする売り手、財界人を中心とする買い手双方、そして入札会を運営する札元の美術商、道具商たちにも顔が利く存在として、馬越恭平に白羽の矢が立ったのであろう。⁵

翌年の「入札三尊」も、おそらくこの例を参照としたのであろう、秋元子爵家は朝吹英

二（柴庵）、赤星家は団琢磨（狸山）、佐竹侯爵家は益田孝（鈍翁）という有力財界人かつ茶人に世話方を依頼した。しかし、各人とも老齢であったり実業界の仕事が多忙であったりというような事情から、箒庵と連名、あるいは箒庵に委託という形で箒庵が世話方を務めることになったようである。箒庵は実業界を引退した自由な立場の茶人、茶道研究者であり、入札会の事情にも精通していること、この3人と箒庵は三井時代に仕事をともにし、また茶席をともにしてきたという親密さが、箒庵の世話方起用に繋がったのであろう。

特に箒庵の場合、札元となる美術商、道具商などとの交際の幅が広く、彼ら入札に関係する人々の利害関係の調整が可能であること、入札会をはじめとする美術品、道具類の取引に精通し、落札者と仲介者、あるいは落札者間で紛争が生じた場合も、これを調整することが可能であると見込まれたのであろう。⁶

さて、世話方としての箒庵の特徴の一つは、元新聞記者、そして茶道に関する著述者として、入札会に関する広報を新聞というメディアを通じて行ったことであろう。前項で指摘した通り、大正7年の水戸徳川家の入札会では『時事新報』連載の『東都茶会記』に3度にわたってその出品作品に関する記事を掲載しているが、この「入札三尊」に関しても、それぞれ記事を掲載している。

これらの記事が、入札会やその出品作品を宣伝広報することで世間の注目を集め、前景気を集めるものであることは先述のとおりである。ただ箒庵の記事は、どのような作品が出品されそれがどのような特徴を持つものであるかを、由緒来歴を交えて紹介し、あわせてそれを出品する荷主の家の歴史や人物の人柄などを伝えることに特徴がある。

この時期の入札会は、高額な美術品や道具類が高額で売買される場であり、新聞各紙や『書画骨董雑誌』のような雑誌類でも主要な入札会の前宣伝、入・開札の概況や高額の落札品の価額などについて伝えられることが多かった。しかしそれらは、価額を中心とした経済的な興味本位のものが大半で、作品そのものやその荷主への記述はあまり見られない。

箒庵が作品や人物を伝えることに意を注いだのは、旧大名家を中心とした荷主が、出品作品に対する愛着や尊敬の念を込め、それらを守ってきたことに対する敬意を示すものであると同時に、高額の代金を支払った買い手の新所有者に、それぞれの作品の特徴、由緒来歴などがもたらす価値を伝えることを意図したためではなかろうか。

本来箒庵は、茶器の売買に入札会という方法を用いることに対して批判的であった。『萬象録』大正5年3月14日条に記す「道具商に対する訓誡」では、大阪春海商店の祝宴に集まった各地の道具商に対して、第一に茶器の神聖を維持することを希望している。旧来大名家等では敬意を払って取り扱われていた伝来品の茶器が入札会という公開の場での売買が取り入れられたことを、「娘子を芸妓と為すが如く」とたとえ、名器の売買は売り手買い手の礼譲を以て行うべきとしている。

その一方、荷主から入札会の世話方を委ねられた立場としては、高額で出品作品の売却を行うべき責任があり、また高額な対価を支払う買い手に対しては、その代価に見合う価値を保障する必要もあった。また箒庵は、前項で紹介した通り、美術品や道具類の売買価格は国家の経済力の反映であり、西洋では油絵1面1,000,000円という作品もあるのに、日本ではそのような売買が行われていないというような当時の状況に対する嘆きも有していた。繰り返すが、このような嘆きの背景には、明治維新直後の旧来の身分秩序の崩壊、神仏分離、廃仏毀釈などの世相の中で、優れた美術品や道具類がその価値を失い、価額の

面でも暴落し、あるいは破壊され、あるいは海外に流出するなどということが発生したことを、認識していたからであろう。美術品や道具類の保存の上で、その価額は高額であることが望ましいという考え方であったと思われる。

入札会には批判的でありながら、入札会が美術品、道具類の価額上昇のために望ましい方法であるという認識の上に立ち、その中で入札会においても売り手買い手の礼譲を保障する方法として、箒庵は、記事において作品や荷主の家、人物などに重点を置いた記述を行ったのではなかろうか。

また数ある箒庵の著作の中でも最も重要なのが、名物茶器の総覧と称すべき『大正名器鑑』である。茶入と茶碗に限ったものであるが、所収される個々の作品について、その姿形、材質、付属品等、さらに由緒来歴に関する客観データを収録し、あわせて精密な写真図版を付すこの著作は、箒庵の名物茶器に関する調査研究の成果データベース化したものであるが、同時にその掲載作品の多くが、この時期に入札会などによって所有者が変わったものでもある。箒庵が入札会の世話方等でその取引に関わった作品も多数収録されている。出版時に箒庵にその意図があったかは不明であるが、本書はこの時期所有者が移動した名物茶器の価値を保障する機能を果たしたのではなかろうか。

一方、入札会による美術品、道具類の取引には批判的であった箒庵も、下見における実物展示、それを前にした出品作品の説明が、購入希望者への購買意欲を高め、入札価額に繋がるものであることはよく承知していたと思われる。三井呉服店時代に西洋式の展示販売を日本で初めて取り入れ、近代的なデパートメント・ストアとしての三越百貨店の成功に繋がったのが箒庵その人だからである。

箒庵は多くの入札会で、世話方の責務として下見会場の検分、下見会当日の来場者の案内や説明に従事しているが、特に前項で述べた水戸徳川家の下見会場に関しては、仮設の建物の四面に水戸徳川家から借用した紫縮緬葵紋の幕を引き廻し、その中に蒔絵器物を展示させた（『萬象録』大正7年10月17日条）。これについて箒庵は「從來曾て見たる事なき大名気分を漾はせぬ。明日特別下見に於ては必ず来館者の目を驚かす事なるべし」とその意図を述べている。

また箒庵のセールス・トークは、来訪した個々の下見客の特徴に合わせて行ったものであることも前項「8）特別内見」で紹介した通りで、島徳蔵から「貴下の側に居りて段々講釈を聴聞すれば遂ひ釣込まれて道楽仲間に入るの虞れあれば勿々遁げ出すに如かず」というような巧みなものであったと思われる。

箒庵は、新聞などの活字メディア、下見会という展示メディアを巧みに活用することによって、入札会の成功を導くことに手腕を発揮したのである。

その一方、箒庵自身にとっても、入札会というものは、自らの茶道研究や著述に関連する情報を収集する場として機能した。入札会の下見等に訪れた人々の多くは、茶器を中心とした優れた美術品、道具類の所有者で、これらの人々との入札会での会話の際、その人が所有するさまざまな作品の調査を依頼したり、他の所蔵者への仲介を依頼するなどということに、箒庵は積極的に取り組んでいる。また、このような場で形成された人脈を通じて、茶器や茶道界などの情報を積極的に収集していたと思われる。それが、箒庵の著作をはじめとするさまざまな活動の材料となっていたのである。

注

¹ 高橋義雄『箒のあと 上・下』秋豊園出版部 昭 11 年

² 高橋箒庵の実業家、茶人などとしての生涯全般に関しては、主に以下を参照。

中川清「文人実業家高橋義雄の生涯」『白鷗法学』6 号 平成 8 年

熊倉功夫『近代数奇者の茶の湯』河原書店 平成 9 年

また、三越百貨店の経営など企業家としての側面からの文化貢献に関しては、主に以下を参照。

神野由紀『趣味の誕生 百貨店がつくったテイスト』勁草書房 平成 6 年

向後恵里子「三井呉服店における高橋義雄と意匠係」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』51 号（第 3 分冊） 早稲田大学大学院文学研究科紀要 平成 17 年

³ 特に明治 31 年、江戸時代初期佐久間将監真勝が大徳寺内に建立した茶室寸松庵を、当時所有していた由利公正から譲り受けて自邸に移築し、その茶室開きに東久世通禧、松浦詮ら和敬会の主要メンバーを招いて開いた茶会が評価され和敬会のメンバーに加わったことが、茶人としての箒庵の名を高めることになった。和敬会は、十六羅漢会と別称されるようにメンバーは 16 名に限られ、欠員が出た場合だけしか新規のメンバーが加わることはなかった。

⁴ 箒庵の提案による女子の採用は、三井銀行時代すでに実施されていた。

⁵ 『近世道具移動史』によると、伊達家入札会の世話方を馬越に委嘱したのは旧仙台藩士富田鐵之助（第 2 代日本銀行総裁）である。富田はこの時期、旧藩主伊達家の家政に関する相談にあずかる立場にあり、この入札会の実施を進言した。この入札における馬越の尽力を、箒庵は「是れより先き馬越氏は三井家を離れて実業界に独立した此時富田翁より有力なる後援を得た恩誼に感じて居たので、此依頼を受くるや一生懸命で其事に当り、自身も亦需要者の大手筋と為つて此入札会に景気を附けた」と伝えている。

⁶ 入札会における美術品・道具類の取引においては、関係者の間でしばしば利害対立や紛争が発生することがあった。

入札会において札元に入ることができるかできないかは、それに関わる美術商、道具商の間で獲得できる利益に大きな差が生じるため、業者間でしばしば紛争になることが多かった。また札元側からすると、入札会の成功には目玉となるような優秀な美術品、道具類の出品が欠かせないが、荷主である旧大名家など上流社会に属する人々にとって、父祖伝来の「家宝」に当たるこのような作品を出し渋るというケースもしばしば見られた（水戸徳川家の入札会でも、水戸家側は当初名品の出品を避けたいという考えがあったことは前項で指摘した通り）。このような場合も、茶人、茶道研究者として荷主の側から信頼を得やすい箒庵は、荷主を説得しうる存在と見込まれたのであろう。さらに旧大名家などの売り手、多くの資産を有する政財界人などの買い手双方を顧客として抱える美術商、道具商としては、これら顧客とのさまざまな紛争は避けたいことであつた。これらの人々と親交がある箒庵は、双方の人々から信頼され、対等な形で話ができると見込まれたと思われる。

実際、秋元子爵家の入札会開催直前、秋元家は原富太郎（三溪）から出品予定の「寢覚物語絵巻」（現、大和文華館）など 4 件の作品を担保に多くの借財をしており、これらの作品を入札に付すことを知った三溪は、大正 6 年 3 月 24 日、世話人の箒庵の許を訪れて善処を依頼している（『萬象録』）。箒庵は秋元家側と交渉し、「寢覚物語絵巻」を三溪の許に残し、他 3 件を入札に付すことで決着を付けた。

4. 売立目録 100 選

本項では、本研究で取り上げた売立目録 100 冊について、その基本データを紹介する。

都守淳夫氏によると、戦前・戦後に発行された売立目録 4335 件を調査され、その書誌を整理分析されているが、実際に作製された売立目録の件数は、戦前だけでもそれを遥かに凌駕するものと思われる。限られた研究期間の中で、そのすべてについて、その収録作品のすべてをデータベース化することは不可能であり、本研究では、戦前における代表的な入札会 100 冊を選び、その売立目録所収作品の画像データベース化を図ることにした。

100 冊の選定に際しては、荷主および、そのコレクションの重要度、当該の入札会に対する当時の世評の高さ、高額落札作品の多さ、現在伝存する著名作品の存在などの基準を指標とし、当該 100 冊を通じて、大正から昭和前期の日本における売立の歴史が概観できるよう配慮した。

なお、紹介順は、入札が実施された年次順とする。紹介する項目は、名称（目録の内題）、下見日、前下見（内見）日、入札日、会場、札元、編集、印刷、荷主等とする。

1 下村正太郎氏御所蔵品第二回入札

（下見）明治 43 年 12 月 2 日・3 日・4 日 （入札）明治 43 年 12 月 5 日

（会場）京都美術倶楽部 （札元）林新助・土橋嘉兵衛・林新兵衛 （印刷）京都合資商報会社

（荷主）大丸創業家の下村正太郎

2 大丸下村家所蔵品入札

（下見）明治 44 年 6 月 6 日・7 日 （入札）明治 44 年 6 月 8 日

（会場）京都美術倶楽部 （札元）林新助・堀本佐助 （印刷）京都合資商報会社

（荷主）大丸創業家の下村正太郎

3 大谷家（本派本願寺）旧御蔵品入札第一回

（下見）大正 2 年 3 月 27 日・28 日・29 日 30 日 （入札）大正 2 年 4 月 1 日

（会場）本派本願寺御殿

（札元）今井貞次郎・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・中川重太郎・田中合名会社・植村平兵衛

（印刷）京都合資商報会社

（荷主）大谷光瑞（西本願寺）

4 大谷家（本派本願寺）旧御蔵品入札第二回

（下見）大正 2 年 4 月 20 日・21 日・22 日・23 日 （入札）大正 2 年 4 月 25 日

（会場）本派本願寺御殿

（札元）今井貞次郎・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・中川重太郎・田中合名会社・植村平兵衛

（印刷）谷口活版所

（荷主）大谷光瑞（西本願寺）

5 大谷家（本派本願寺）旧御蔵品入札第三回

- (下見) 大正2年5月2日・3日・4日 (入札) 大正2年5月6日
(会場) 本派本願寺御殿
(札元) 今井貞次郎・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・中川重太郎・田中合名会社・植村平兵衛
(印刷) 合資商報会社
(荷主) 大谷光瑞(西本願寺)
- 6 堺市宅醸春軒所蔵品入札(第一回)
(下見) 大正2年5月28日・29日・30日 (入札) 大正2年6月1日
(会場) 大阪美術倶楽部 (札元) 山中吉郎兵衛・治村六助・春海敏・林新助
(荷主) 宅徳平。堺の酒醸造業。
- 7 堺市宅醸春軒所蔵品入札(第二回)
(下見) 大正2年6月10日・11日・12日 (入札) 大正2年6月14日
(会場) 大阪美術倶楽部 (札元) 児島嘉助・山中吉郎兵衛・治村六助・春海敏・林新助
(印刷) 谷口活版所
(荷主) 宅徳平。堺の醸造元。
- 8 西本願寺大谷家御蔵器
(下見) 大正2年11月3日4日・5日 (入札) 大正2年11月7日
(会場) 西本願寺御殿
(札元) 池田清助・林新助・高田新助・浅井久太郎・北岡猪三郎・戸田弥七・山中吉郎兵衛
(印刷) 谷口印刷所
(荷主) 大谷光瑞(西本願寺)
- 9 当市(雁半)中村氏旧蔵品目録
(下見) 大正4年12月9日・10日・11日・12日 (入札) 大正4年12月13日
(会場) 京都美術倶楽部
(札元) 林新助・服部七兵衛・北岡猪三郎・今井貞次郎・戸田弥七・植村半兵衛・春海敏
(印刷) 合資商報会社
(荷主) 中村半兵衛。江戸時代以来の京の西陣織問屋「雁半」。
- 10 当市(雁半)中村氏旧蔵品第二回入札目録
(下見) 大正5年1月16日・17日・18日 (入札) 大正5年1月19日
(会場) 京都美術倶楽部
(札元) 林新助・服部七兵衛・北岡猪三郎・今井貞次郎・戸田弥七・植村半兵衛・春海敏
(印刷) 京都合資商報会社
(荷主) 中村半兵衛。江戸時代以来の京の西陣織問屋「雁半」。
- 11 当市(雁半)中村氏旧蔵品第四回入札目録
(下見) 大正5年4月25日・26日 (入札) 大正5年4月27日
(会場) 京都美術倶楽部

(札元) 林新助・服部七兵衛・北岡猪三郎・今井貞次郎・植村半兵衛・春海敏・重岡寛次郎

(印刷) 京都合資商報会社

(荷主) 中村半兵衛。江戸時代以来の京の西陣織問屋「雁半」。

12 仙台伊達家御蔵品入札

(下見) 大正5年5月12日・13日・14日 日本橋倶楽部

(入札) 大正5年5月16日 (会場) 美術倶楽部

(札元) 山澄力蔵・梅沢安蔵・中村作次郎・川部利吉・田谷弘吉・林新助・今井貞次郎・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・北岡猪三郎・戸田弥七・山中吉郎兵衛・春海敏・山中与七・植村平兵衛

(印刷) 審美書院

(荷主) 旧仙台藩主伊達伯爵家

13 第二回仙台伊達家御蔵品入札

(下見) 大正5年7月2日・3日・4日 (入札) 大正5年7月5日 (会場) 美術倶楽部

(札元) 山澄力蔵・梅沢安蔵・中村作次郎・川部利吉・田谷弘吉・林新助・今井貞次郎・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・北岡猪三郎・戸田弥七・山中吉郎兵衛・春海敏・山中与七・植村平兵衛

(印刷) 審美書院

(荷主) 旧仙台藩主伊達伯爵家

14 秋元子爵家御蔵器入札

(下見) 大正6年5月12日・13日 (入札) 大正6年5月14日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 山澄力蔵・梅沢安蔵・中村作次郎・伊藤平蔵・川部利吉・林新助・土橋嘉兵衛・戸田弥七・山中吉郎兵衛・春海敏

(荷主) 旧館林藩主秋元子爵家

15 赤星家所蔵品入札

(下見) 大正6年6月9日・10日 日本橋倶楽部 (入札) 大正6年6月11日 (会場) 美術倶楽部

(札元) 山澄力蔵・中村作次郎・梅沢安蔵・川部利吉・宗与・多門店・林新助・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・戸田弥七・山中吉郎兵衛・山中与七・春海敏

(印刷) 審美書院

(荷主) 赤星弥之助の嗣子赤星鉄馬。弥之助は薩摩系財界人。海軍軍需商人。

16 京都上野旭松庵氏所蔵品入札

(下見) 大正6年9月24日・25日 (入札) 大正6年9月27日 (会場) 大阪美術倶楽部

(札元) 山中吉郎兵衛・山中与七・坂田作次郎・春海商店・高田新助・土橋嘉兵衛・林新兵衛・今井貞次郎

(印刷) 谷口印刷所

(荷主) 大阪北浜の相場師上野与吉。

17 第二回赤星家所蔵品入札

(下見) 大正6年10月6日・7日 (入札) 大正6年10月8日 (会場) 美術倶楽部
(札元) 山澄力蔵・中村作次郎・梅沢安蔵・川部利吉・宗与・多門店・林新助・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・戸田弥七・山中吉郎兵衛・山中与七・春海敏
(印刷) 審美書院
(荷主) 赤星弥之助の嗣子赤星鉄馬。弥之助は薩摩系財界人。海軍軍需商人。

18 第三回赤星家所蔵品入札

(下見) 大正6年10月13日・14日 (入札) 大正6年10月15日 (会場) 美術倶楽部
(札元) 山澄力蔵・中村作次郎・梅沢安蔵・川部利吉・宗与・多門店・林新助・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・戸田弥七・山中吉郎兵衛・山中与七・春海敏
(印刷) 審美書院
(荷主) 赤星弥之助の嗣子赤星鉄馬。弥之助は。薩摩系財界人。海軍軍需商人。

19 高橋男爵家所蔵品入札

(下見) 大正6年10月24日・25日 (入札) 大正6年10月26日 (会場) 東京美術倶楽部
(札元) 山澄力蔵・梅沢安蔵・中村作次郎・川部利吉・伊藤平蔵・伊藤弥三郎・松永徳次郎・清水辰三郎・多門店・林新助・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・北岡猪三郎・今井貞次郎・戸田弥七・山中吉郎兵衛・山中与七・春海敏・植村平兵衛
(印刷) 審美書院
(荷主) 大蔵大臣、のちに総理大臣を務めた高橋是清。

20 佐竹侯爵家御蔵器入札

(下見) 大正6年11月3日4日 (入札) 大正6年11月5日 (会場) 東京美術倶楽部
(札元) 山澄力蔵・中村作次郎・梅沢安蔵・川部利吉・伊藤平蔵・多門店・吉川丑太郎・山本力・森田辰之助・清水辰三郎・林新助・土橋嘉兵衛・戸田弥七・山中吉郎兵衛・山中与七・春海敏
(印刷) 小川一真写真館
(荷主) 旧秋田藩主佐竹侯爵家

21 稲葉子爵家平岡家御蔵品入札

(下見) 大正7年3月16日・17日 (入札) 大正7年3月18日 (会場) 東京美術倶楽部
(札元) 山澄力蔵・中村作次郎・梅沢安蔵・川部利吉・多門店・池田慶次郎・林新助・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・林新兵衛・戸田弥七・山中与七・春海商店
(印刷) 審美書院
(荷主) 旧淀藩主稲葉子爵家
日本における汽車製造の草分け平岡熙

22 近衛公爵御蔵器第一回入札

(下見) 大正7年6月3日・4日 (入札) 大正7年6月5日 (会場) 東京美術倶楽部
(札元) 山澄力蔵・中村作次郎・梅沢安蔵・川部利吉・多門店・林新助・服部七兵衛・

土橋嘉兵衛・戸田弥七・山中吉郎兵衛・山中与七・春海敏

(印刷) 吉川弘文館

(荷主) 旧公家、五摂家筆頭の近衛公爵家

23 近衛公爵御蔵器第二回入札

(下見) 大正7年6月8日・9日 (入札) 大正7年6月10日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 山澄力蔵・中村作次郎・梅沢安蔵・川部利吉・多門店・林新助・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・戸田弥七・山中吉郎兵衛・山中与七・春海敏

(印刷) 吉川弘文館

(荷主) 旧公家、五摂家筆頭の近衛公爵家

24 松井子爵家御蔵品入札

(下見) 大正7年10月1日・2日 (入札) 大正7年10月3日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 中村作次郎・多門店・池田慶次郎・林新助・戸田弥七・春海商店

(印刷) 審美書院

(荷主) 旧川越藩主松井子爵家(松平周防守家)

25 徳川侯爵家御蔵品入札

(下見) 大正7年10月19日・20日 (入札) 大正7年10月21日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 山澄力蔵・中村作次郎・梅沢安蔵・川部商会・多門店・池田慶次郎・林新助・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・戸田弥七・山中吉郎兵衛・山中与七・春海商店

(印刷) 審美書院

(荷主) 旧水戸藩主徳川侯爵家

26 旧丸亀藩主京極家御蔵器入札

(下見) 大正7年11月9日・10日 (入札) 大正7年11月11日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 梅沢安蔵

(印刷) 秋元印行

(荷主) 旧丸亀藩主京極子爵家

27 松沢家蔵品入札

(下見) 大正7年12月3日・4日 (入札) 大正7年12月5日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 山澄力蔵・中村作次郎・林新助・土橋嘉兵衛・戸田弥七・山中吉郎兵衛

(印刷) 吉川弘文館

(荷主) 江戸旧家の油問屋大阪屋孫兵衛(大孫)

28 池田侯爵家御蔵器入札

(下見) 大正8年4月5日・6日 (入札) 大正8年4月7日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 山澄力蔵・中村作次郎・梅沢安蔵・川部利吉・多門店・林新助・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・今井定次郎・北岡猪三郎・戸田弥七・山中吉郎兵衛・山中与七・春海敏・植村平兵衛・桐野豊造・塩見保太郎

(荷主) 旧岡山藩主池田侯爵家

29 因州池田侯爵家御蔵品入札

(下見) 大正 8 年 5 月 31 日・6 月 1 日 (入札) 大正 8 年 6 月 2 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 山澄力蔵・中村好古堂・梅沢安蔵・川部商会・多門店・池田慶次郎・田中正次郎・伊丹信太郎・林新助・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・戸田弥七・山中与七・春海商店

(印刷) 精芸出版

(荷主) 旧鳥取藩主池田侯爵家

30 鹿島家御蔵器入札

(下見) 大正 8 年 6 月 21 日・22 日 (入札) 大正 8 年 6 月 23 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 山澄力蔵・中村好古堂・梅沢安蔵・川部商会・多門店・岡村藤兵衛・林新助・春海商店

(印刷) 精芸出版

(荷主) 鹿島組創業者鹿島岩蔵の養嗣子鹿島精一

31 旧松平伊賀守御蔵品入札

(下見) 大正 8 年 6 月 28 日・29 日 (入札) 大正 8 年 6 月 30 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 山澄力蔵・中村好古堂・梅沢安蔵・多門店・山西宗五郎・川部商会・林新助・土橋嘉兵衛・戸田弥七・春海商店

(印刷) 上田三交社

(荷主) 旧信州上田藩主松平子爵家

32 某旧家蔵品入札

(下見) 大正 8 年 11 月 1 日・2 日 (入札) 大正 8 年 11 月 3 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 多門店・伊丹信太郎

(印刷) 精芸出版

(荷主) 江戸旧家の酒問屋鹿島家か

33 郷男爵家御蔵品入札

(下見) 大正 8 年 11 月 22 日・23 日 (入札) 大正 8 年 11 月 24 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 中村好古堂・川部商会・多門店・本山豊実・佐藤茂・池田慶次郎・林新助・土橋永昌堂・戸田弥七・山中吉郎兵衛・春海商店

(荷主) 大蔵次官、貴族院議員等を務めた男爵郷純造の嗣子郷誠之助

34 尾州徳川家御蔵品入札

(下見) 大正 10 年 11 月 5 日・6 日 (入札) 大正 10 年 11 月 7 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 山澄力蔵・中村好古堂・梅沢安蔵・川部商会・多門店・本山幽篁堂・伊丹信太郎・池田慶次郎・林新助・土橋永昌堂・服部来々堂・戸田弥七・山中吉郎兵衛・

池戸宗三郎・春海商店・野崎久兵衛・米万商店・味岡由兵衛・伊藤喜兵衛・横山
守雄・長谷川長宣堂

(印刷) 精芸出版

(荷主) 旧名古屋藩主徳川侯爵家

35 茂木家旧蔵品入札目録

(下見) 大正 10 年 12 月 17 日・18 日 (入札) 大正 10 年 12 月 19 日 (会場) 東京美術
倶楽部

(札元) 山澄商店・中村好古堂・梅沢安蔵・川部商会・多門店・伊丹信太郎・本山幽篁
堂・清水辰三郎・東都美術商会・池田慶次郎・野村洋三・林新助・土橋永昌堂・
服部来々堂・浅井清之助・戸田弥七・山中吉郎兵衛・池戸宗三郎・春海商店・米
万商店・野崎久兵衛

(印刷) 精芸出版

(荷主) 横浜生糸商茂木惣兵衛

36 坂本金弥氏所蔵品入札

(下見) 大正 11 年 3 月 18 日・19 日 (入札) 大正 11 年 3 月 20 日 (会場) 東京美術
倶楽部

(札元) 伊丹信太郎・泉田吟松堂・本山豊実・東都美術商会・梅沢安蔵・川部商会・林
新助・土橋永昌堂・服部来々堂・戸田弥七・池戸宗三郎・春海商店・坂田作治郎
商店・臼井吉松・米万商店・野崎久兵衛・塩見亀一郎

(印刷) 三交社

(荷主) 岡山の実業家、代議士坂本金弥

37 公爵九條家御什器入札

(下見) 大正 11 年 7 月 8 日・9 日 (入札) 大正 11 年 7 月 10 日 (会場) 東京美術俱
楽部

(札元) 中村好古堂・伊丹信太郎・本山豊実・林新助・熊谷鳩居堂・戸田弥七・山中吉
郎兵衛・野崎久兵衛

(印刷) 精芸社

(荷主) 旧公家、五摂家の九条家

38 武藤山治氏御所蔵品入札

(下見) 大正 12 年 1 月 19 日・20 日 (入札) 大正 12 年 1 月 21 日 (会場) 大阪美術
倶楽部

(札元) 池戸宗三郎・春海商店・戸田弥七・太田佐七・田中合名会社・久保安之助・山
中吉郎兵衛・児島嘉助・坂田作治郎・水原金兵衛・治村竹治郎・林新助・土橋嘉
兵衛・福田浅治郎・玉井久治郎・森田清太郎・伊藤平山堂・多門店・本山豊実

(荷主) 鐘紡社長、のち代議士の武藤山治。

39 徳川家御所蔵品入札

(下見) 大正 12 年 4 月 7 日・8 日 (入札) 大正 12 年 4 月 9 日 (会場) 東京美術倶楽
部

(札元) 川部商会・中村好古堂・多門店・伊丹信太郎・岩井慶三郎・林新助・戸田弥七・
米万商店

(印刷) 精芸社

(荷主) 徳川伯爵家 (旧御三卿田安德川家)

40 早川家御所蔵品入札

(下見) 大正 12 年 5 月 12 日・13 日 (入札) 大正 12 年 5 月 14 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 山澄商店・梅沢安蔵・中村好古堂・多門店・伊丹信太郎・本山豊実・佐藤茂・清水辰三郎・小山常次郎・金森三郎・川部商会・林新助・土橋永昌堂・今井貞次郎・北岡商店・戸田弥七・山中吉郎兵衛・春海商店・池戸宗三郎・植村半兵衛・宇治久商店・米万商店・谷村庄平

(印刷) 精芸社

(荷主) 三井系財界人、南満州鉄道総裁早川千吉郎の遺族

41 若洲酒井伯爵家御所蔵品入札

(下見) 大正 12 年 6 月 12 日・13 日 (入札) 大正 12 年 6 月 14 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 山澄商店・梅沢安蔵・中村好古堂・多門店・伊丹信太郎・川部商会・林新助・土橋永昌堂・服部来々堂・戸田弥七・山中吉郎兵衛・池戸宗三郎・春海商店・宇治久商店・米万商店

(荷主) 旧小浜藩主酒井伯爵家

42 旧伊予西条藩主子爵松平家御蔵器入札

(下見) 大正 13 年 6 月 7 日・8 日 (入札) 大正 13 年 6 月 9 日 (会場) 京都美術倶楽部

(札元) 川部商会・山澄商店・中村好古堂・多門店・伊丹善蔵・本山豊実・伊丹信太郎・林新助・土橋永昌堂・服部来々堂・戸田弥七・山中吉郎兵衛・春海商店・池戸宗三郎・宇治久商店・米万商店

(印刷) 上田三交社

(荷主) 旧西条藩主松平子爵家

43 益田信世氏所蔵品入札

(下見) 大正 13 年 10 月 25 日・26 日 (入札) 大正 13 年 10 月 27 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊丹善蔵・伊丹信太郎・川部商会・多門店・中村好古堂・山澄商店・近善商店・林新助・服部来々堂・土橋永昌堂・池戸宗三郎・春海商店・戸田弥七・横山守雄・宇治久商店・米万商店

(印刷) 宮本印行

(荷主) 益田孝(鈍翁)の三男益田信世(実際の荷主は、その母で孝の側室益田たきか)

44 吉田楓軒蔵品入札目録

(下見) 大正 13 年 12 月 6 日・7 日 (入札) 大正 13 年 12 月 8 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊丹善蔵・伊丹信太郎・川部商会・多門店・中村好古堂・山澄商店・本山豊実・今井貞次郎・林新助・林新兵衛・服部来々堂・土橋永昌堂・北岡猪三郎・池戸宗三郎・春海商店・戸田弥七・植村半兵衛・山中吉郎兵衛・横山守雄・宇治久商店・

米万商店

(印刷) 宮本印行

(荷主)。江戸旧家の質屋吉田丹左衛門

45 前田侯爵家御蔵器入札目録

(下見) 大正 14 年 5 月 23 日・24 日 (入札) 大正 14 年 5 月 25 日 (会場) 前田侯爵邸

(札元) 伊丹善蔵・伊丹信太郎・川部商会・多門店・中村好古堂・山澄商店・小山常次郎・佐藤茂・清水辰三郎・本山豊実・森与商店・今井貞次郎・林新助・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・北岡猪三郎・池戸宗三郎・春海商店・戸田弥七・山中吉郎兵衛・米万商店・宇治久商店・岡本嘉兵衛・谷村庄平・内山乙次郎・松平吉太郎・二本外二郎・宮地甚吉郎

(印刷) 宮本印行

(荷主) 旧金沢藩主前田侯爵家

46 波多野承五郎氏所蔵品入札目録

(下見) 大正 14 年 5 月 20 日・21 日 (入札) 大正 14 年 6 月 1 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 本山豊実・山澄商店・伊藤平山堂・熊谷鳩居堂・池戸宗三郎・児島嘉助

(印刷) 宮本印行

(荷主) 三井系財界人波多野承五郎

47 子爵土屋家御蔵品入札

(下見) 大正 14 年 9 月 29 日・30 日 (入札) 大正 14 年 10 月 1 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 山澄商店・川部商会・伊丹信太郎・林新助

(印刷) 宮本印行

(荷主) 旧土浦藩主土屋子爵家

48 井上侯爵家御所蔵品入札。

(下見) 大正 14 年 11 月 7 日・8 日 (入札) 大正 14 年 11 月 9 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊丹善蔵・伊丹信太郎・伊藤平山堂・川部商会・多門店・田谷広吉・中村好古堂・山澄商店・松山米太郎・清水辰三郎・本山豊実・今井貞次郎・林新助・林新兵衛・服部七兵衛・土橋嘉兵衛・里見忠三郎・北岡猪三郎・池戸宗三郎・春海商店・戸田弥七・植村平兵衛・山中吉郎兵衛・児島嘉助・横山守雄・米万商店・森田清太郎

(印刷) 宮本印刷

(荷主) 維新元勲井上馨の嗣子井上勝之助。

49 当市上野旭松庵所蔵品入札目録

(下見) 大正 14 年 11 月 14 日・15 日 (入札) 大正 14 年 11 月 16 日 (会場) 京都美術倶楽部

(札元) 今井貞次郎・林新助・林新兵衛・服部来々堂・高田探古堂・土橋永昌堂・北岡猪三郎・池戸高山堂・春海商店・戸田弥七・山中吉郎兵衛・坂田作次郎

(印刷) 京都日出新聞社

(荷主) 大阪北浜の相場師上野与吉

50 徳川侯爵家蔵品伽藍洞蔵品入札

(下見) 大正 15 年 11 月 6 日・7 日 (入札) 大正 15 年 11 月 8 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊丹善蔵・伊丹信太郎・伊藤平山堂・川部商会・中村好古堂・山澄商店・近善商店・本山豊実・森与商店・林新助・服部来々堂・池戸宗三郎・春海商店・戸田弥七・山中吉郎兵衛・米万商店・横山守雄・宇治久商店

(印刷) 宮本印行

(荷主) 旧水戸藩主徳川侯爵家
高橋箒庵

51 紀州徳川家蔵品展覧目録

(下見) 昭和 2 年 4 月 2 日・3 日 (入札) 昭和 2 年 4 月 4 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊藤平山堂・伊丹信太郎・伊丹善蔵・川部商会・多門店・中村好古堂・山田保次郎・山澄商店・小山常次郎・水戸幸・清水辰三郎・今井貞次郎・林新助・服部来々堂・土橋嘉兵衛・池戸宗三郎・春海商店・戸田弥七・山中吉郎兵衛・横井米万商店・森沢安之助

(編集兼発行者) 高本文 (発行所) 徳川侯爵家什宝係 (印刷) 宮本直一

(荷主) 旧和歌山藩主徳川侯爵家

52 村井家書画什器入札

(下見) 昭和 2 年 9 月 24 日・25 日 (入札) 昭和 2 年 9 月 26 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊藤平山堂・森与商店・中村好古堂・本山豊実・川部商会・伊藤大好堂・北岡猪二郎・今井貞次郎・林新助・山中吉郎兵衛・春海商店

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 明治期の大煙草商、のち村井銀行創業の村井吉兵衛の遺族。

53 神戸鹿峰翁遺愛品展覧図録

(下見) 昭和 2 年 10 月 22 日・23 日 (入札) 昭和 2 年 10 月 24 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊藤平山堂・一色利厚・川部商会・中村好古堂・中川清寿・佐藤栄市・清水辰三郎・本山豊実・石原竹影堂・林新兵衛・土橋永昌堂・池戸宗三郎・春海商店・山中吉郎兵衛・児島嘉助・水原金兵衛・山田百華堂

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 甲州系財界人で東京電灯社長の神戸挙一の遺族

54 高橋家蔵品入札

(下見) 昭和 3 年 3 月 3 日・4 日 (入札) 昭和 3 年 3 月 5 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊藤平山堂・川部商会・余田喜一・多門店・中村好古堂・山澄商店・小山常次郎・清水辰三郎・本山豊実・林新助・北岡猪三郎・春海商店・山中吉郎兵衛

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 大蔵大臣高橋是清父子

55 前公爵松方家蔵品入札

(下見) 昭和3年3月24日・25日 (入札) 昭和3年3月26日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊藤平山堂・伊丹信太郎・神通古玩堂・川部商会・多門店・中村好古堂・山澄商店・古木常八・佐藤茂・清水辰三郎・本山豊実・林新助・服部来々堂・土橋永昌堂・北岡猪三郎・池戸宗三郎・春海商店・戸田弥七・山中商会・児島嘉助・米万商店

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 松方正義の嗣子で十五銀行頭取の松方巖。

56 前公爵松方家蔵品第二回入札

(下見) 昭和3年4月7日・8日 (入札) 昭和3年4月9日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 中村好古堂・神通古玩堂・古木常八・本山豊実

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 松方正義の嗣子十五銀行頭取の松方巖

57 公爵島津家蔵品入札目録

(下見) 昭和3年5月26日・27日 (入札) 昭和3年5月28日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊藤平山堂・伊丹信太郎・伊丹善蔵・橋本元佑・川部商会・多門店・竹内善次・中村好古堂・山田保次郎・小山常次郎・斎藤栄寛・本山豊実・山澄商店・林新助・服部来々堂・土橋永昌堂・北岡猪三郎・今井貞次郎・池戸宗三郎・春海商店・戸田弥七・山中吉郎兵衛・宇治久商店・横山商会・米万商店

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 旧鹿児島藩主島津公爵家

58 広岡家蔵品入札

(下見) 昭和3年6月16日・17日 (入札) 昭和3年6月18日 (会場) 大阪美術倶楽部

(札元) 戸田弥七・山中吉郎兵衛・児島嘉助・太田佐七・池戸宗三郎・春海商店・坂田作治郎・水原金兵衛・植村平兵衛・林新助・土橋永昌堂・服部来々堂・今井貞次郎

(印刷) 谷口印刷所

(荷主) 江戸時代の大坂豪商、明治後は加島銀行、大同生命等創業の加島屋(広岡)久左衛門家。

59 山科毘沙門堂什器入札目録

(下見) 昭和3年9月8日・9日 (入札) 昭和3年9月10日 (会場) 京都美術倶楽部

(札元) 今井貞次郎・林新兵衛・土橋永昌堂

(印刷) 一誠堂印刷所

(荷主) 山科毘沙門堂

60 江州浅見家所蔵品入札目録

(下見) 昭和3年9月22日・23日 (入札) 昭和3年9月24日 (会場) 京都美術倶

楽部

(札元) 今井貞次郎・林新助・林新兵衛商店・服部来々堂・高田採古堂・土橋永昌堂・
福田浅次郎・北岡猪三郎商店・池戸宗三郎・春海商店・山中吉郎兵衛・児島嘉助・
水原金兵衛商店・伊丹信太郎・中村好古堂・山澄商店・本山豊実・長谷川長宜堂・
米万商店

(印刷) 京都日出新聞社

(荷主) 近江長浜のちりめん貿易商、近江銀行等経営者の浅見又蔵

61 神戸川崎男爵家蔵品入札目録

(下見) 昭和3年10月8日・9日 (下見会場) 川崎家本邸

(入札) 昭和3年10月11日 (会場) 大阪美術倶楽部

(札元) 池戸宗一郎・春海商店・戸田弥七・山中吉郎兵衛・山中商会・児島嘉助・今井貞
治郎・林新助・林新兵衛・服部来々堂・土橋永昌堂・山中合名会社・伊藤平山堂・
川部商会・中村好古堂・山澄商店・本山豊実

(編集兼発行者) 三浦秀之助 (発行所) 春光美術社 (印刷) 凸版印刷株式会社大阪分
工場

(荷主) 川崎造船所創業者川崎正蔵の嗣子川崎芳太郎。

62 伯爵徳川家御蔵品入札目録

(下見) 昭和3年10月20日・21日 (入札) 昭和3年10月22日 (会場) 東京美術
倶楽部

(札元) 伊藤平山堂・池戸宗三郎・飯田国太郎・林新助・川部商会・土橋永昌堂・中村
好古堂・山田保次郎・山中吉郎兵衛・松永善三郎

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 徳川伯爵家(旧御三卿一橋徳川家)。

63 神戸勝田家所蔵品目録

(下見) 昭和4年2月3日・4日 (入札) 昭和4年2月5日 (会場) 大阪美術倶楽部

(札元) 池戸宗三郎・春海商店・戸田弥七・白井吉松・山中吉郎兵衛・米田久雄・津川
義隆・林新助・服部来々堂・土橋永昌堂・川部商会・中村好古堂・山澄商店

(印刷) 守田直(写真)

(荷主) 大正期の船成金で、のちに神戸市長の勝田銀次郎。

64 旧越前福井藩主松平侯爵家御蔵品入札目録

(下見) 昭和4年2月10日・11日 (入札) 昭和4年2月12日 (会場) 東京美術倶
楽部

(札元) 伊藤平山堂・川部商会・中村好古堂・山澄商店・兼子剛・林新助・春海商店・
米万商店・伊端道介・黒川五三郎

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 旧福井藩主松平侯爵家

65 本入札

(下見) 昭和4年3月14日・15日 (入札) 昭和4年3月16日 (会場) 大阪美術倶
楽部

(札元) 池戸宗三郎・井上熊太郎・春海商店・戸田弥七・太田佐七・植村平兵衛・山中

吉郎兵衛・児島嘉助・阪田作次郎・水原金兵衛・砂貞吉・今井貞次郎・林新助・林新兵衛・服部来々堂・土橋永昌堂・福田浅次郎・北岡猪三郎・伊藤平山堂・川部商会・中村好古堂・山澄商店・山田保次郎・清水辰三郎・本山豊実・伊藤喜兵衛・横山商会・米万商店・宇治久商店・山田百華堂・内山乙次郎

(印刷) 谷口印刷所

(荷主) 藤田伝三郎の甥で、日本水産等創業者の田村市郎

66 藤田男爵家蔵品入札目録

(下見) 昭和4年5月8日・9日 (入札) 昭和4年5月10日 (会場) 藤田家本邸

(札元) 池戸宗三郎・春海商店・戸田弥七・太田佐七・植村平兵衛・山中吉郎兵衛・山中商会・児島嘉助・阪田作次郎・今井貞次郎・林新助・林新兵衛・服部来々堂・高田採古堂・土橋永昌堂・福田浅次郎・北岡猪一郎・伊丹善蔵・伊丹信太郎・川部商会・多門店・中村好古堂・山澄商店・本山豊実・横山商会・宇治久商店・米万商店・谷村庄平

(印刷) 春光美術社

(荷主) 藤田財閥。

67 侯爵中山家大岡家所蔵品入札

(下見) 昭和4年6月27日・28日 (入札) 昭和4年6月29日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊丹信太郎・伊丹善蔵・川部商会・中村好古堂・山澄商店・今井貞次郎・林新助・春海商店・伊藤喜兵衛・宇治久商店

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 旧公家中山侯爵家。
代議士大岡育造か。

68 一木庵高橋家蔵品入札目録

(下見) 昭和5年10月25日・26日 (入札) 昭和5年10月27日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊丹善蔵・伊丹信太郎・伊藤平山堂・川部商会・中村好古堂・山澄商店・山田保次郎・水戸幸商店・本山豊実・林新助・服部来々堂・池戸宗三郎・春海商店・戸田弥七・山中吉郎兵衛・横山商会・宇治久商店・米万商店

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 高橋箒庵

69 説田家蔵品展覧目録

(下見) 昭和6年5月17日・18日 (入札) 昭和6年5月19日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊藤平山堂・川部商会・中村好古堂・太田亀三郎・山澄商店・山本力・古木松鶴堂・小山常次郎・神通古玩堂・本山豊実・林新助・土橋永昌堂・池戸宗三郎・山中吉郎兵衛・米万商店・竹内善次・中村好古堂・太田亀三郎・山澄商店・山本力・古木常八・小山常次郎・水戸幸商店・神通古玩堂・本山豊実・林新助・土橋永昌堂・北岡猪三郎・池戸宗三郎・春海商店・山中吉郎兵衛・児島嘉助・横山商店・米万商店・神通静玩堂

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 江戸旧家の酒問屋説田家。

70 説田家蔵品展覧目録

(下見) 昭和7年6月6日・7日 (入札) 昭和7年6月8日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊藤平山堂・川部商会・中村好古堂・太田亀三郎・山澄商店・山本力・古木松鶴堂・小山常次郎・神通古玩堂・本山豊実・林新助・土橋永昌堂・池戸宗三郎・山中吉郎兵衛・米万商店

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 江戸旧家の酒問屋説田家。

71 某家所蔵品入札目録

(下見) 昭和8年1月22日・23日 (入札) 昭和8年1月24日 (会場) 大阪美術倶楽部

(札元) 池戸宗三郎・井上熊太郎・春海商店・戸田弥七・太田佐七・植村平兵衛・山中吉郎兵衛・児島嘉助・坂田作治郎・水原金兵衛・今井貞次郎・林新助・林新兵衛・服部来々堂・土橋永昌堂・福田浅次郎・北岡猪三郎・川部商会・山澄商店・本山豊実・横山商会・米万商店・宇治久商店

(印刷) 谷口印刷所

(荷主) 伊丹の旧家で酒造業の小西新右衛門。

72 方外庵御所蔵器入札

(下見) 昭和8年2月17日(内見)・18日・19日 (入札) 昭和8年2月20日

(会場) 東京美術倶楽部

(札元) 壺屋本店橋本元治・幽篁堂本山豊実

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 日本銀行総裁の川田小一郎の嗣子川田龍吉。

73 石川県樋爪家蔵品入札

(下見) 昭和8年5月14日・15日・16日 (入札) 昭和8年5月17日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 大久保皓司・川部商会・寿泉堂中川清寿・本山豊実・林新兵衛・山中吉郎兵衛・宮地甚吉郎

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 七尾の海運事業家樋口讓太郎。

74 某家旧蔵品入札

(下見) 昭和8年6月10日・11日 (入札) 昭和8年6月12日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 一色利厚・伊藤平山堂・東京春海商店・川部商会・中村好古堂・山澄商店・林新兵衛・土橋永昌堂・戸田弥七・横山商会・宇治久商店・米万商店

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 伊勢電鉄社長熊沢一衛。

75 双軒庵美術集成図録

(入札) 昭和8年6月26日

(札元) 伊藤平山堂・伊丹信太郎・石井柳助・川部商会・中村好古堂・山澄商店・本山
豊実・今井貞次郎・石原弥七・服部来々堂・林新助・林新兵衛・土橋永昌堂・北
岡猪三郎・池戸宗三郎・春海商店・戸田弥七・太田佐七・植村平兵衛・山中吉郎
兵衛・児島嘉助・阪田作治郎・水原金兵衛・高橋文鳳堂・門垣静観堂
(編集統括) 外狩素心庵 (編集参与) 池戸宗三郎・鈴木栄之亮
(発行者) 長野安太郎 (発行所) 九州電気軌道株式会社 (印刷) 東京美術印刷社
(荷主) 九州電気軌道 (前社長松本泰蔵の旧蔵品)。

76 続双軒庵美術集成図録

(下見) 昭和8年10月8日(招待)・9日・10日 (入札) 昭和8年10月11日
(会場) 東京美術倶楽部
(札元) 伊藤平山堂・伊丹信太郎・石井柳助・東京春海商店・豊田益之助・川部商会・
吉田吉之助・中村好古堂・中川寿泉堂・中島庸介・山澄商店・山本淇翠堂・本山
豊実・池戸宗三郎・戸田弥七・山中吉郎兵衛・児島嘉助・阪田作治郎・水原金兵
衛・今井貞次郎・服部来々堂・林新兵衛・土橋永昌堂・北岡猪一郎・高橋文鳳堂・
門垣静観堂
(荷主) 九州電気軌道 (前社長松本泰蔵の旧蔵品)。

77 侯爵蜂須賀家御蔵品入札

(下見) 昭和8年10月21日・22日 (入札) 昭和8年10月23日 (会場) 東京美術
倶楽部
(札元) 山澄商店・伊丹善蔵・川部商会・伊藤平山堂・中村好古堂・伊丹信太郎・戸田
弥七
(印刷) 東京美術印刷社
(荷主) 旧徳島藩主蜂須賀侯爵家。

78 静和園蔵品展覧目録

(下見) 昭和8年11月22日・23日 (入札) 昭和8年11月24日 (会場) 徳川侯爵
家別邸
(札元) 川部商会・春海商店・一色利厚・斎藤譲一・池戸宗三郎・岡吉三郎
(編集) 高木文 (印刷) 東京美術印刷社
(荷主) 旧和歌山藩主徳川侯爵家

79 故ビゲロー氏遺愛品浮世絵及四條派画幅入札

(下見) 昭和8年12月9日・10日 (入札) 昭和8年12月11日 (会場) 東京美術倶
楽部
(札元) 本山豊実・池戸宗三郎・山中吉郎兵衛
(印刷) 京都・便利堂印刷所 京都・一誠堂印刷所
(荷主) ウィリアム・ビゲローの遺族。

80 摂津池田稻束聴松軒氏所蔵品入札

(下見) 昭和9年1月16日・17日 (入札) 昭和9年1月18日 (会場) 大阪美術倶
楽部
(札元) 児島嘉助商店・坂田作治郎商店・山中吉郎兵衛商店
(印刷) 谷口印刷所

(荷主) 摂津池田の旧家稲束家。

81 双軒庵目録

(下見) 昭和9年1月20日・21日 (入札) 昭和9年1月22日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊藤平山堂・石井三柳堂・川部商会・中川寿泉堂・中島庸介・山澄商店・本山豊実・池戸宗三郎・山中吉郎兵衛・児島嘉助・今井貞次郎・土橋永昌堂・高橋文鳳堂・門垣静観堂

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 九州電気軌道(前社長松本衞蔵の旧蔵品)。

82 静和園第二回蔵品展覧目録

(下見) 昭和9年2月18日・19日 (入札) 昭和9年2月20日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 川部商会・一色利厚・斎藤讓一・池戸宗三郎

(編集兼発行者) 高木文 (印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 旧和歌山藩主徳川侯爵家。

83 香雪斎蔵品展覧図録

(下見) 昭和9年3月24日・25日 東京美術倶楽部

昭和9年4月2日(招待日)・3日・4日

(入札) 昭和9年4月5日 (会場) 大阪美術倶楽部

(札元) 池戸宗三郎・戸田弥七・春海商店・山中吉郎兵衛・児島嘉助・坂田作治郎・水原金兵衛・土橋嘉兵衛・林新助・服部来々堂・林新兵衛・福田浅次郎・山澄商店・本山豊実・川部商会・中村好古堂・伊藤平山堂・石井三柳堂・横山商会

(編纂者) 内藤堯宝・有尾佐治 (編集参与) 池戸宗三郎・戸田弥七・土橋嘉兵衛

(発行所) 藤田男爵家什器係 (印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 藤田財閥。

84 松浦伯爵家並某家蔵器展覧入札

(下見) 昭和9年11月2日 (特別下見) 3日・4日 (入札) 昭和9年11月5日

(会場) 東京美術倶楽部

(札元) 山澄商店・川部商会・伊藤信太郎・伊丹善蔵・近善商店・中村好古堂・土橋永昌堂・池戸宗三郎・戸田弥七・春海商店・横山商会

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 旧平戸藩主松浦伯爵家。

85 小泉三申氏愛玩品入札

(下見) 昭和9年11月13日・14日 (入札) 昭和9年11月15日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 本山豊実・川部商会・石井三柳堂・中島庸介・森本寧楽堂・橋本元佑・村田香樹園・林新助

(荷主) 言論人、代議士の小泉策太郎。

86 もくろく

(下見) 昭和9年11月27日・28日 (入札) 昭和9年11月29日 (会場) 大阪美術

倶楽部

(札元) 児島嘉助・山中吉郎兵衛・池戸宗三郎・春海商店・水原金兵衛・土橋永昌堂

(印刷) 谷口印刷所

(荷主) 大阪北浜の相場師島徳蔵。

87 竹軒藏品展覽図録

(下見) 昭和 10 年 6 月 1 日・2 日 (内見) 昭和 10 年 6 月 7 日・8 日

(入札) 昭和 10 年 6 月 9 日

(会場) 大阪美術倶楽部

(札元) 水原金兵衛・児島嘉助・池戸宗三郎・坂田作治郎・山中吉郎兵衛・戸田弥七・
春海商店・太田佐七・土橋嘉兵衛・林新兵衛・石原弥七・本山豊実・川部商会・
中村好古堂・石井柳助

(編集兼印刷発行者) 伊藤一郎 (発行所) 竹軒藏品図録刊行会

(印刷) 一誠堂印刷所

(荷主) 大阪の煎茶数寄者横江萬治郎(号竹軒)。

88 有賀家所藏品展覽入札

(下見) 昭和 10 年 10 月 25 日 (特別下見)・26 日・27 日

(入札) 昭和 10 年 10 月 28 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 川部商会・近善商店・水戸幸商店・本山豊実・山澄商店・中村好古堂・伊丹信
太郎・服部来々堂・土橋永昌堂・池戸宗三郎・戸田弥七・横山商会・宇治久商店

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 三井系財界人有賀長文。

89 山王荘藏品展覽図録

(下見) 昭和 10 年 10 月 22 日・23 日 東京美術倶楽部

昭和 10 年 11 月 5 日・6 日・7 日

(入札) 昭和 10 年 11 月 9 日 (会場) 大阪美術倶楽部

(札元) 児島嘉助・池戸宗三郎・水原金兵衛・山中吉郎兵衛・坂田作治郎・春海商店・
土橋嘉兵衛・福田浅次郎・林新兵衛・本山豊実・伊藤平山堂・川部商会・石井柳
助

(印刷) 谷口印刷所

(荷主) 大阪北浜の相場師福田誠之助。

90 旧篠山藩主青山子爵家御蔵器入札

(下見) 昭和 10 年 11 月 15 日 (特別下見)・16 日・17 日

(入札) 昭和 10 年 11 月 18 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊藤平山堂・伊丹信太郎・一色利厚・川部商会・中村好古堂・山澄商店・日野
雄太郎・土橋永昌堂・池戸宗一郎・戸田弥七

(印刷) 東京美術印刷社

(荷主) 旧篠山藩主青山子爵家。

91 田村家所藏品入札

(下見) 昭和 10 年 12 月 1 日・2 日 (入札) 昭和 10 年 12 月 3 日 (会場) 大阪美術倶楽
部

(札元) 井上熊太郎・池戸宗三郎・太田佐七・児島嘉助・坂田作治郎・沢島太助・善田喜一郎

(印刷) 精工印刷所

(荷主) 藤田伝三郎の甥で、日本水産等創業者の田村市郎。

92 北摂岸上家並某家蔵品大入札会展覧

(下見) 昭和 11 年 2 月 1 日・2 日 東京美術倶楽部

昭和 11 年 2 月 6 日・7 日・8 日

(入札) 昭和 11 年 2 月 10 日 (会場) 大阪美術倶楽部

(札元) 児島嘉助・山中吉郎兵衛・池戸宗三郎・戸田弥七・水原金兵衛・坂田作次郎・春海商店・土橋嘉兵衛・林新兵衛・善田喜一郎・本山豊実・川部商会・石井柳助

(印刷) 谷口印刷所

(荷主) 摂津池田の旧家で酒造業の岸上善五郎。

93 長春閣蔵品展覧図録(神戸川崎男爵家蔵品入札目録)

(下見) 昭和 11 年 2 月 27 日・28 日 東京美術倶楽部

昭和 11 年 3 月 8 日・9 日・10 日 川崎家本邸

(入札) 昭和 11 年 3 月 12 日 (会場) 大阪美術倶楽部

(札元) 山中吉郎兵衛・山中商会・児島嘉助・池戸宗三郎・戸田弥七・春海商店・坂田作治郎・水原金兵衛・林新助・林新兵衛・土橋嘉兵衛・服部来々堂・山中合名会社・川部商会・本山豊実・中村好古堂・山澄商店・伊藤平山堂・石井柳助

(編集兼発行者) 坂口覚 (発行所) 長春閣蔵品図録刊行会

(印刷) 原色版印刷社 便利堂 佐藤浜次郎 (印刷社) 中村盛文堂

(荷主) 川崎財閥。

94 平井東庵氏所蔵品入札目録

(下見) 昭和 12 年 2 月 6 日・7 日 大阪美術倶楽部

昭和 12 年 2 月 12 日・13 日・14 日

(入札) 昭和 12 年 2 月 15 日 (会場) 京都美術倶楽部

(札元) 今井商店・土橋永昌堂・林新兵衛商店・服部来々堂・福田浅次郎・善田喜一郎・児島嘉助・池戸宗三郎・春海商店・戸田弥七・山中吉郎兵衛・坂田作治郎商店

(印刷) 京都鈴木尚美堂

(荷主) 京都西陣織問屋、実業家平井仁兵衛。

95 香雪斎蔵品展覧図録

(下見) 昭和 12 年 4 月 4 日・5 日 東京美術倶楽部出張(改築中二付) 喜可久

昭和 12 年 4 月 9 日・10 日・11 日

(入札) 昭和 12 年 4 月 13 日 (会場) 大阪美術倶楽部

(札元) 池戸宗三郎・戸田弥七・山中吉郎兵衛・児島嘉助・春海商店・坂田作次郎・水原金兵衛・土橋嘉兵衛・林新助・林新兵衛・福田浅次郎・服部来々堂・山澄商店・本山豊実・川部商会・中村好古堂・伊丹信太郎・伊藤平山堂・石井三柳堂・横山商会・谷村庄平

(編纂者) 内藤堯宝・満岡忠成 (編集参与) 池戸宗三郎・戸田弥七・土橋嘉兵衛

(発行所) 藤田男爵家什器係 (印刷) 東京美術印刷社・京都鈴木尚美社

(荷主) 藤田財閥。

96 徳川田安家御蔵品入札

(下見) 昭和 13 年 4 月 16 日・17 日 (入札) 昭和 13 年 4 月 18 日 (会場) 東京美術倶楽部

(札元) 伊藤平山堂

(印刷) 東京美術社

(荷主) 徳川伯爵家 (旧御三卿田安德川家)。

97 三楽庵所蔵品入札

(下見) 昭和 15 年 2 月 14 日・15 日 (入札) 昭和 15 年 2 月 16 日

(会場) 大阪美術倶楽部

(札元) 山中吉郎兵衛・池戸宗三郎・戸田弥七・土橋嘉兵衛・林新兵衛・藤井繁次郎・川部商会・本山幽篁堂

(印刷) 永井日英堂

(荷主) 倉敷紡績社長大原孫三郎。

98 松筠亭蔵品展覧目録 (鴻池男爵家蔵品展覧目録)

(下見) 昭和 15 年 5 月 28 日・29 日 東京美術倶楽部

昭和 15 年 6 月 8 日 (招待日)・9 日・10 日

(入札) 昭和 15 年 6 月 12 日 (会場) 大阪美術倶楽部

(札元) 坂田作治郎・山中吉郎兵衛・井上熊太郎・砂元吉・児島嘉助・戸田弥七・山中商店・池戸宗三郎・土橋嘉兵衛・中村好古堂

(印刷) 永井日英堂

(荷主) 江戸時代の大坂豪商、三和銀行等創業者鴻池男爵家。

99 観空庵遺愛品入札

(下見) 昭和 16 年 2 月 15 日 特別下見・16 日・17 日 (入札) 昭和 16 年 2 月 18 日

(会場) 東京美術倶楽部

(札元) 山澄商店・川部商会・平山堂・中村好古堂・吉田吉之助・小林信次郎・福田元永堂・林新兵衛・戸田弥七・池戸宗三郎

(編集兼発行者) 上田亀吉 (発行所) 東京美術倶楽部 (印刷) 東京美術社

(荷主) 三井系財界人の前山久吉。

100 もくろく

(下見) 昭和 18 年 5 月 23 日・24 日 (入札) 昭和 18 年 5 月 25 日

(会場) 原田積善会 (東京美術会館出張)

(札元) 川部商会・平山堂・吉田吉之助・本山幽篁堂

(編集兼発行者) 上田亀吉 (発行所) 東京美術会館 (印刷) 東京美術社

(荷主) 鴻池銀行重役等を務めた原田二郎が設立した原田積善会

5. 売立をした人々

本項では、前項で取り上げた売立目録 100 選の荷主について紹介するとともに、売立当時の各荷主の置かれた状況、売立後の主要出品作品の移動等について、その概要を紹介する。

なお、各項の冒頭には荷主の人名・家名などを記し、その下に荷主となった入札会の売立目録の名称・入札日・会場を示す。入札会の売立目録の名称の前に置かれる番号は、前項の売立目録 100 選の番号と一致する。

1 下村正太郎

1 下村正太郎氏御所蔵品第二回入札 明治 43 年 12 月 5 日 京都美術倶楽部

2 大丸下村家所蔵品入札 明治 44 年 6 月 8 日 京都美術倶楽部

下村正太郎は、江戸時代中期、下村彦右衛門正啓が京都伏見に創業した呉服商大文字屋（大丸）の 12 代当主。大丸は、明治維新後の近代化の波に乗ることができず、経営上の苦境に陥り、正太郎の父 11 代正太郎も急死したため、早稲田大学在学中であった正太郎は、急遽退学し、大丸の再建に携わることとなった。正太郎は、伝来の家財等を売却し、借財の整理に当たる一方、大丸を近代的なデパートへと改革することで、苦境を脱することを企図した。

その家財整理の一環として企図されたのが、伝家の美術品等の入札による売却である。下村家の入札は 5 回にわたって、京都美術倶楽部において実施された。京都・大阪で江戸時代以来の老舗として威勢をふるってきた大丸の伝来品だけに、江戸後期の京都・大坂画壇の著名画家の作品が数多く含まれていた。

その中で、特に注目されるのは、『大丸下村家所蔵品入札』の表紙に掲載される祇園南海「墨竹図搔取」（現、メトロポリタン美術館）である。この作品は、江戸中期、泉州泉佐野の豪商で、江戸中期の儒者、文人の支援者として知られた唐金興隆が、その妾の婚礼のため、紀州藩儒であった南海に、執筆を依頼したものであった。興隆の曾孫（ただし、興隆には実子がなかったため、義理の曾孫）が大丸下村家に嫁入りした際、これを持参したものであるという（付属品の頼山陽の添状）。『大丸二百五拾年史』（大丸二百五十年史編集委員会編『大丸二百五十年史』 株式会社大丸 昭和 42 年）は、下村家 6 代目の下村正立の妻女について、「正立の妻貞は泉州の富豪唐金家の女で、正立二十二歳の寛政九年に入嫁した。その嫁入り道具の豪華が語り草になったと伝えられている」としており、この時に下村家にもたらされたものであろう。江戸時代中・後期の上層における豪商の縁戚関係と彼らの文人文化の継承を象徴する作品といえよう。

なお、この「大丸下村家所蔵品入札」には「垂裕堂十二景詩歌巻」が収録されているが、この垂裕堂とは、唐金興隆の書齋名であり、これも「墨竹図搔取」同様、唐金家から下村家に伝来した作品と思われる。

2 西本願寺大谷伯爵家

3 大谷家（本派本願寺）旧御蔵品入札第一回 大正 2 年 4 月 1 日 本派本願寺御殿

- 4 大谷家（本派本願寺）旧御蔵品入札第二回 大正2年4月25日 本派本願寺御殿
5 大谷家（本派本願寺）旧御蔵品入札第三回 大正2年5月6日 本派本願寺御殿
8 西本願寺大谷家御蔵器 大正2年11月7日 西本願寺御殿

西本願寺門主の大谷家は、浄土真宗開祖親鸞聖人の血脈を引く家系であり、同寺の歴史とともに多くの美術作品・文化財を収蔵してきたことは、今更いうまでもあるまい。現在においても、多くの美術作品・文化財を所蔵する西本願寺ではあるが、大正初期に実施した4度の売立により、多くの美術作品・文化財が流出した。

明治後期、西本願寺門主の地位にあった大谷光瑞は、中国西域地域等の仏教遺跡等の探索のため、大谷探検隊を三次にわたって派遣した。また、神戸六甲山の別荘二楽荘の建設などへの巨額な出費が光瑞の大きな負債となり、その返済に西本願寺教団の資金を用いたという疑獄事件にも発展したため、光瑞は門主の地位を離れ、大谷家の美術作品、文化財も処分されることとなった。

この入札で、特に注目されるのは、「大谷家（本派本願寺）旧御蔵品入札第一回」に出品された尾形光琳「燕子花図」屏風（現、根津美術館）である。この作品については、105,000円で、鶴印と通称する同寺勘定方、壇信徒、関係者の設立した団体が落札し、本山からの流出を避けようとした（『書画骨董雑誌』大正2年4月号）。しかし、翌大正3年、早急な借財整理の必要に迫られたことで、根津嘉一郎に50,000円で売却されたという（『書画骨董雑誌』大正3年6月号）。

一方、「西本願寺御蔵器入札」に出品された伝牧谿「半身達磨図」は、50,000円で山中商会の山中吉郎兵衛が自身の所有のため落札した。この吉郎兵衛が大正6年に亡くなった後川崎男爵家に納められが、昭和3年の川崎家の入札会に出品された際、再び山中商会在が買い戻したという（渡辺虹衣『骨董太平記』）。

4回の入札を通じての西本願寺大谷家のコレクションの流出は、美術作品、文化財が、本来の所有者の許から離れたものであることでは惜しまれる出来事であったが、これらの中には、その後の大正・昭和前期の大入札会時代にたびたび入札に付されて、美術に関心を有する者の話題を占めるものもあったし、また現在、美術館等に所蔵されているものも多い。

3 宅徳平

- 6 堺市宅醸春軒所蔵品入札（第一回） 大正2年6月1日 大阪美術倶楽部
7 堺市宅醸春軒所蔵品入札（第二回） 大正2年6月14日 大阪美術倶楽部

宅家は、江戸時代以来、泉州堺において、銘酒「沢亀」の醸造元として繁栄した旧家である。明治以降、当主の宅徳平は、家業を宅合名会社としてその近代化を図るとともに、その資産を電鉄、銀行事業等に投資し、浪速銀行、大阪貯蓄銀行、南海鉄道などの取締役を務めた。

同家は江戸時代以来の富商であり、江戸時代京都、大坂画壇の画家たちの作品を数多く所蔵していたと思われるが、徳平自身は茶道に精通し、明治期に茶道具等の作品を数多く蒐集したと目される。

宅家の2回の売立は、徳平の養女とめの実父で、明治期の名古屋を代表する財界人であっ

た奥田正香の債務分担のために実施されたと高橋箒庵は伝えている（『近世道具移動史』）。

4 中村半兵衛

9 当市（雁半）中村氏旧蔵品目録 大正 4 年 12 月 13 日 京都美術倶楽部

10 当市（雁半）中村氏旧蔵品第二回入札目録 大正 5 年 1 月 19 日 京都美術倶楽部

11 当市（雁半）中村氏旧蔵品第四回入札目録 大正 5 年 4 月 27 日 京都美術倶楽部

中村半兵衛は、雁金屋半兵衛という屋号で江戸時代以来知られた京都西陣の呉服商。明治以降も順調に家業を営んできたが、当主の金銭上の不始末のため所蔵品を売り立て、借財整理を図ろうとしたという（『書画骨董雑誌』大正 5 年 1 月号）。

第 1 回に出品された「継色紙（神かきの）」（現、湯木美術館）が、31,200 円で落札されるなど、古筆を中心に従来の入札会の記録を破る高額落札が続いたため、「雁半相場」と称された。

出品作品の多くは京都の旧商家に相応しく、江戸時代の京都画壇を代表する画家たちの作品で占められている。

5 伊達伯爵家

12 仙台伊達家御蔵品入札 大正 5 年 5 月 16 日 美術倶楽部

13 第二回仙台伊達家御蔵品入札 大正 5 年 7 月 5 日 美術倶楽部

伊達政宗以来の家系を誇る旧仙台藩主。江戸時代の大大名家であると同時に、歴代藩主の中には、4 代伊達綱村をはじめ茶道に精通したものも存在したため、旧大名の中でも、多くの美術作品、文化財を所有していたことで知られる。

伊達家の家臣の家に生まれ、明治後は第 2 代日本銀行総裁、東京府知事などを歴任し、実業家としても活躍した富田鐵之助が、伊達家に売立を建言し、世話方として大日本麦酒の社長を務めた三井系財界人で、数寄者として知られた馬越恭平を推したことで、この売立は、実現した。

仙台伊達家という旧大大名の所蔵品の入札会というだけではなく、第 1 回入札に際しては、売立目録 12,000 冊を刷り、1 冊 1 枚の下見入場券を付し、入場券を持たないものは下見会場への入場を許さなかったことなどが話題を呼んだ。

第 1 回の出品作品の中では、「岩城文琳茶入」（現、藤田美術館）が 56,000 円、狩野正信「周茂叔愛蓮図」（現、九州国立博物館）が 28,889 円などで落札され、総落札額は 1,000,000 円を超えた。第 2 回の出品作品では、「福原茄子茶入」が 57,000 円、伝狩野元信「伯牙弾琴図」（現、パーク・コレクション）が 29,000 円で落札され、2 回合わせて約 1,500,000 円の売り上げを記録した。

この 2 回の入札は、旧大大名家が自らの家名を明らかにした上で実施された最初のもので、これが大成功を収めたことが、翌年の秋元子爵家、赤星家、佐竹侯爵家の入札（いわゆる「入札三尊」）につながった点で注目される。

6 秋元子爵家

14 秋元子爵家御蔵器入札 大正 6 年 5 月 14 日 東京美術倶楽部

秋元子爵家は、旧上州館林藩主。小藩の譜代大名であったが、喬知、涼朝が江戸幕府の老中を歴任したことで贈答等が多かったためか、数多くの優れた美術作品を所蔵していた。また明治期の当主秋元興朝は、絵巻物の研究者としても知られていた。

明治期、興朝は貴族院における政治活動に多額の資金を必要とし、「寢覚物語絵巻」（現、大和文華館）などを抵当に、横浜の実業家で数寄者としても知られる原富太郎（号三溪）等から借財しており、これらの清算と同家財政の安定化のための基金とするため、所蔵品の売却を企図した。しかし、大正 5 年の華族世襲財産法の改正までは、華族の世襲財産に組み入れられていた美術作品等の売却処分は禁止されていた。この改正直後から同家の作品の入札による処分が計画され、3 月には三井系財界人の朝吹英二、高橋箒庵が世話方と決定。4 月 23 日に興朝は急死するが、入札は予定通り実施された。この入札に関して、箒庵は『東都茶会記』大正 6 年 4 月 6 日付け「名門名品」で、秋元家のコレクションとその入札を紹介している

この入札会での総売上は、1,478,000 円。先の第 1 回仙台伊達家入札の総売り上げが 1,000,000 円余であったという記録を抜き、入札会隆盛時代の到来を決定づけた。以降、これに続く赤星家の 3 回の入札と佐竹侯爵家の入札をあわせて、高橋箒庵は「入札三尊」と称した（『近世道具移動史』）。

7 赤星弥之助

15 赤星家所蔵品入札 大正 6 年 6 月 11 日 美術倶楽部

17 第二回赤星家所蔵品入札 大正 6 年 10 月 8 日 美術倶楽部

18 第三回赤星家所蔵品入札 大正 6 年 10 月 15 日 美術倶楽部

赤星弥之助は、薩摩出身の政商。明治 10 年代には、同郷の五代友厚らと神戸港の栈橋建設に乗り出し、国際港神戸発展の基礎を築いた。また明治海軍の創立に関わった西郷従道・樺山資紀らと縁戚にあり、イギリスで建造された日清戦争時の軍艦に設置する大砲に特許権を設けたことで、多額の特許料を得たという。この他、貸金業なども含めて、莫大な資産を形成し、これを以て「道具界の鰐魚」（『移動史』）と称されるような旺盛なコレクション活動に乗り出したのである。

そのコレクション内容は、梁楷「雪景山水図」（現、東京国立博物館）、「那智滝図」（現、根津美術館）などの絵画作品のほか、名物茶入約 20 点を含む茶道具など質・量ともに極めて優れたものであったが、弥之助の没後、嗣子の赤星鉄馬は古美術品に興味を持たず、その売却の世話方を縁戚の樺山愛輔を通じて団琢磨に依頼、団はさらに高橋箒庵を推し、兩人を世話方として入札が実施された。この入札に関して箒庵は、『東都茶会記』大正 6 年 5 月 27 日付け「名器と持ち主」で、赤星弥之助コレクションとその入札を紹介している。

高橋箒庵によると、そのコレクション活動は、明治 24 年頃から没年の 37 年までの 10 数年という短期間であるにも拘らず、3 回の売立は、総額 5,100,000 円以上にのぼる高額な落札額を記録した。落札額では、昭和 15 年の鴻池家で売立が、史上最大であるが、物価変動や作品の質・量を考慮すると、大正から昭和前期における最大規模の売立であるといえる。

8 上野与吉

16 京都上野旭松庵氏所蔵品入札 大正 6 年 9 月 27 日 大阪美術倶楽部

49 当市上野旭松庵所蔵品入札目録 大正 14 年 11 月 16 日 京都美術倶楽部

上野与吉は、大阪北浜で活躍した相場師。

上記 2 件のほか、大正 3 年には、「上野好撰氏所蔵品入札」を催している。

その一方、入札会を通じて、多くの優れた美術作品の購入も行っており、大売立時代に際し、作品の売買を通じてコレクションの内容の向上を企図したと思われる。

大正 6 年の売立は大売立時代到来を予見した購入資金確保が目的か。この中に住吉如慶「源氏物語画帖」（現、石山寺）などが含まれる。

その資金を元手に、佐竹侯爵家の入札では雪村「風濤図」（現、野村美術館）等を購入。しかし昭和 14 年の売立の際、「風濤図」も売り立てられ、同じく大阪北浜の大物相場師島徳蔵がこれを購入した。

9 高橋是清

19 高橋男爵家所蔵品入札 大正 6 年 10 月 26 日 東京美術倶楽部

54 高橋家蔵品入札 昭和 3 年 3 月 5 日 東京美術倶楽部

明治・大正・昭和の財政家として名高い高橋是清は、明治期から日本絵画のすぐれたコレクションを有していたことが知られるが、これは、是清の生家が、江戸時代以来続く狩野派の絵師であり、特に実父川村庄右衛門守房が、江戸城本丸屏風係を務めたことなどに由来すると思われる。

大正 6 年の入札は、大正 2 年に初めて大蔵大臣に就任し、立憲政友会に入党して以降、政界の枢要の地位にあった是清の政治資金調達のために実施されたものか。「入札三尊」の狭間に行なわれたものであり、当時の記録ではあまり大きく取り上げられてはいないが、「地獄草子」（現、奈良国立博物館）など良質な出品作品が含まれている。

この落札では禅月大師「羅漢図」（現、宮内庁）が不落札になるなど、予想落札額より低い約 510,000 円の総落札額であった。このことについて、高橋箒庵は、「畢竟自から道具を購買する力なき博物館の連中などを顧問として、第三位くらいの道具屋より買入れたる品物なれば、比較的高価に仕入れたるに拘らず、之を売却するに当りて好結果を呈する能はざるは固より其所なり」（『万象録』大正 6 年 10 月 27 日条）と酷評している。

しかし、これは、大量の名物茶道具を含む大入札が相前後する時期にあって、購入者の関心が、茶道関係の作品に向きがちであったことによるものと解するのが妥当であろう。また、箒庵自身の関心が、鑑賞用の作品にあまり向いていなかったことも要因と思われる。「新古書画、玉類、朝鮮掘出雲鶴器物、仏画若くは屏風の類に大幅物多けれども、本来男（高橋是清）は茶人に非ざるが為め大広間用の品物のみにて好事家の目を惹く者なく」という見方をしている（『万象録』10 月 24 日条）。

昭和 3 年の入札は是清の嗣子是賢が催したものであるが、一部には是清の所蔵品も含まれていたという（『中外商業新報』昭和 3 年 3 月 6 日号）。

10 佐竹侯爵家

20 佐竹侯爵家御蔵器入札 大正 6 年 11 月 5 日 東京美術倶楽部

佐竹侯爵家は、旧秋田藩主。大正 6 年「入札三尊」の最後を飾るこの入札は、佐竹家の財産整理の一環として、同家家令大縄久雄（衆議院議員）が佐竹家の同意のもと企画し、益田鈍翁、高橋箒庵を世話方として開催された。この入札に関して、箒庵は『東都茶会記』大正 6 年 10 月 26 日付「信実三十六歌仙」で、この入札の目玉であった、いわゆる佐竹本「三十六歌仙絵巻」を紹介している

この作品については、最初 400,000 円の止値（最低落札価格）を佐竹家では希望していたが、世話方等の相談の結果、350,000 円に引き下げ、それでも単独で落札するものがなく、札元全員の連合で、353,000 円で落札した。翌年、この作品は、当時船成金として威勢をふるっていた山本唯三郎が買い取ったが、第一次大戦終了後の不況のため、間もなく山本も手放さざるを得ず、大正 8 年には、益田鈍翁の主導のもと、絵巻を切断して分譲され、各歌仙軸装とされたことはよく知られている。

また、雪村「風涛図」は、先に紹介した通り、大阪北浜で相場師として活躍した上野与吉が落札したが、上野はこの入札で、名物「山桜大海」茶入もあわせて落札している。

11 稲葉子爵家

21 稲葉子爵家平岡家御蔵品入札 大正 7 年 3 月 18 日 東京美術倶楽部

稲葉子爵家は、旧淀藩主。稲葉正成と春日局の間に生まれた稲葉正勝をはじめ、江戸時代には、5 人の老中を輩出した譜代大名の名門である。

稲葉子爵家の売立は、前々年、前年の伊達伯爵家、「入札三尊」などの盛会の流れを引くものといえる。この入札でも、高橋箒庵が世話方を務めた。箒庵は『東都茶会記』大正 7 年 3 月 1 日付け「曜変天目」で、この入札の中で特に注目された「曜変天目茶碗」（現、静嘉堂文庫美術館）と、その入札を紹介している。

「曜変天目茶碗」については、公式の下見会に先立つ 2 月 23 日、藤田平太郎、岩原謙三、団琢磨、根津嘉一郎、加藤正義、三井八郎次郎らに、箒庵の自宅で内見が催された（『万象録』）。「曜変天目茶碗」は 167,000 円で、横浜の生糸貿易商小野家が落札、その後、同家より三菱の岩崎家に譲渡された。

12 平岡熙

21 稲葉子爵家平岡家御蔵品入札 大正 7 年 3 月 18 日 東京美術倶楽部

平岡熙は旧幕臣の出身で、明治初頭にアメリカに留学。汽車の製造を学び、日本における汽車製造の先駆者となった。また帰国後の明治 11 年、日本最初の野球チームを結成した人物としても知られている。邦楽に通じ、吟舟と号し、三味線東明流の創始者としても知られている。高橋箒庵の後妻楊子の父で、箒庵にとっては岳父に当たる。この入札の際箒庵が勧めて、稲葉家・平岡家の合同入札会とした。

『移動史』などは、平岡家からの出品は更紗や小間物類が主体であるとする。

その後も高橋箒庵の世話で、平岡は大正 8 年・11 年の 2 度、小間物類を主体とした入札会を催している。

13 近衛公爵家

22 近衛公爵御蔵器第一回入札 大正 7 年 6 月 5 日 東京美術倶楽部

23 近衛公爵御蔵器第二回入札 大正 7 年 6 月 10 日 東京美術倶楽部

いうまでもなく、近衛公爵家は五摂家筆頭の公家の名門である。前年度の「入札三尊」以来のブームに乗って、入札会を実施した。世話方は住友財閥の鈴木馬左也が務めた。

出品されたのは、近衛家熙の茶道関係の作品が主体。また売立目録の各作品の紹介の中には、近衛家熙の侍医山科道安が家熙の言行を記録した『槐記』中の、各出品作品に関連する記事を併記している。

高橋箒庵が、「格別の名品ありと思はれざるに、其価格は予想以上にして」（『万象記』大正 7 年 6 月 6 日条）というように、第 1 回だけで 1,200,000 円を超える売り上げとなった。

この売立は、近衛家歴代の美術作品、文化財の管理を従来京都から東京に移すに際し、不用品の処分を行なうことが目的であったとする。しかし当主の近衛文麿は、大正 5 年に貴族院議員となって政界進出することとなり、その政治資金が必要であったことや、入札品の売上を株式などの金融資産とすることで近衛家の財政体質の強化を図ることを目的としたものであろう。斎藤利助『書画骨董回顧五十年』（四季社 昭和 32 年）は、「この時近衛家では一百二十万円の入札売上げがあったが、某実業家の差金でその金をもって全部郵船株を買い」とこの間の消息を伝えている。

14 松井子爵家

24 松井子爵家御蔵品入札 大正 7 年 10 月 3 日 東京美術倶楽部

松井子爵家は旧川越藩主。徳川家康から松平姓を賜り、江戸時代には代々松平周防守と称し、老中を 3 名輩出した譜代大名であった。特に江戸中期の当主であった康福が多くの書画、茶器を蒐集したことが知られている。ただその主要部分は、明治維新前後に売却され、この入札の出品作品はその残りにすぎないと高橋箒庵は指摘している（『万象録』大正 7 年 9 月 25 日条）。

この当時松井家と稲葉家は縁戚関係にあり、稲葉家入札の評判から、松井家が稲葉家を介して、大正 7 年 6 月 4 日、箒庵に世話方を依頼した（『万象録』）。箒庵は『東都茶会記』大正 7 年 9 月 30 日付け「周防侯遺愛品」で、康福とその遺愛品、この入札の出品作品などを紹介している。

入札の結果、「名物古銅大ソロリ花入」が 45,900 円で落札されるなど、総売上 281,000 円余を記録した。

15 徳川侯爵家（水戸徳川家）

25 徳川侯爵家御蔵品入札 大正 7 年 10 月 21 日 東京美術倶楽部

50 徳川侯爵家蔵品伽藍洞蔵品入札 大正 15 年 11 月 8 日 東京美術倶楽部

大正 7 年の水戸徳川家の入札は徳川御三家の入札会の劈頭を飾るもので、茶道関係を中心とした出品作も大いに注目された。この入札の世話方も、やはり高橋箒庵。ただ水戸藩士の家系に生まれた箒庵にとっては旧主家の入札会であり、その成功に尽力した様子については先述のとおりである。『東都茶会記』大正 7 年 6 月 6 日付け「水戸殿御所持」では調査作品を紹介、10 月 2 日付け「瓢乎瓢乎」では水戸家八代徳川斉修（哀公）が収集した瓢箪にちなんだ書画道具類を紹介、10 月 16 日付け「天下の名香」では出品作品の香木などを紹介している。

水戸家の売立の理由は、先述のとおり、向島の邸宅の整理と家政安定のための基金設立であることを箒庵は指摘している。

「圓悟克勤墨蹟」の 142,000 円、「井戸茶碗 銘老僧」の 91,000 円、「曜変天目茶碗」（現、藤田美術館）の 53,800 円などが高額落札品で、総売上約 1,180,000 円を記録した。

大正 15 年の入札会は、水戸徳川家、伽藍洞の合同で開催されているが、この伽藍洞は、高橋箒庵の号の一つである。大正 7 年の入札の際、売却されなかった作品に、高橋箒庵の蔵品を交えて実施されたものである。

ただ、出品作品の中で注目を集めたのは箒庵の作品であった（後述）。水戸家伝来品の中で売立に供された優品は、大正 7 年の入札に集中していたと思われる。

16 京極子爵家

26 旧丸亀藩主京極家御蔵器入札 大正 7 年 11 月 11 日 東京美術倶楽部

旧讃岐丸亀藩主京極子爵家は、佐々木源氏の血脈を引く武家の名門である。丸亀藩 2 代藩主京極高豊が、野々村仁清に多くの作品の製作を依頼した仁清の庇護者として知られた。この入札には、今日でも仁清の代表作として知られる「色絵藤花文茶壺」（現、MOA 美術館）、「色絵吉野山茶壺」（現、福岡市美術館）、「色絵釘隠」（現、京都国立博物館）などが出品された。

「色絵藤花文茶壺」が 68,000 円、「色絵吉野山茶壺」が 70,000 円など、高額で落札されたが、内見会を観覧した高橋箒庵は、狩野常信の三幅対、英一蝶の横物とこれらの仁清の作品以外には「観るべき者なし」と評している。

17 松沢家

27 松沢家蔵品入札 大正 7 年 12 月 5 日 東京美術倶楽部

松沢家は、大阪屋孫八（通称大孫）の名で知られた江戸最大級の油問屋であった。明治後も、油商として東京で大きな地位を保った。江戸の町人旧家の売立として注目を集め、総売上 990,000 円を記録した。

この売立で注目を集めたのは利休所持四方釜で、66,900 円で落札された。また江戸を代表する旧家らしく、谷文晁、酒井抱一、鈴木其一ら江戸画壇の作家の作品も数多く出品され

た。

18 岡山池田侯爵家

28 池田侯爵家御蔵器入札 大正 8 年 4 月 7 日 東京美術倶楽部

旧岡山藩主池田家は、戦国時代の池田恒興から続く池田家の宗家。

この入札も、伊達家、秋元家以来続く、旧大名華族の家財整理と、売上金による家の財政基盤の確立を図ったものであると思われる。『書画骨董雑誌』大正 8 年 5 月号によると、出品作品には能面、能衣装、能道具等以外優品が少なく、しかもこれらの多くは親引となったとあり、同家の主要なコレクションの処分が目的ではなかったことが窺われる。それでも、総売上は 850,000 円を記録した。絵画作品では、入札当時はさほど注目されなかったが、岩佐又兵衛「押絵貼屏風（樽屋屏風）」（その後、屏風各扇が掛幅に改装され、分割伝来）が出品されている。

岡山池田家の主なコレクションは、その後もしばらく同家に伝来し、現在その多くは林原美術館に収蔵されている。

19 鳥取稻葉侯爵家

29 因州池田侯爵家御蔵品入札 大正 8 年 6 月 2 日 東京美術倶楽部

旧鳥取藩主池田家は岡山池田家の分家。豊臣秀吉、徳川家康に仕えた池田輝政と徳川家康の娘督姫の間に生まれた忠雄の系統が藩主を務めたため、外様大名でありながら、江戸幕府から、松平姓、葵紋を許され、親藩に準じる待遇を受けた。

この入札の世話方も高橋箒庵である。入札時の当主池田仲博は、水戸出身の徳川慶喜の 5 男。その縁から水戸徳川家の入札直後の大正 7 年 10 月 25 日、水戸家の家令手塚任を介して箒庵に池田家道具調査の依頼が寄せられ、以後精力的に入札の準備にあたった。またこの入札に関して、箒庵は『東都茶会記』大正 8 年 5 月 26 日付け「名物絵巻物」で、この入札の中で特に注目された飛騨守惟久「後三年合戦絵巻」（現、東京国立博物館）、狩野元信及びその工房の作品と推定されている「酒顛童子絵巻」（現、サントリー美術館）などを紹介している。

ただ、この売立で最高額で落札されたのは、男爵松平齊光（旧津山藩主松平家の分家）の出品による尾形光琳「八橋図屏風」（現、メトロポリタン美術館）である。箒庵は大正 7 年 4 月 18 日の松平男爵家入札の世話方を務めた縁で、この出品を取り持ったようである。

池田家出品の中では、尾形光琳「太公望図」（現、京都国立博物館）、「酒顛童子絵巻」などが高額で落札され、総売上額は 1,050,000 円に及んだ。なお「後三年合戦絵巻」は、池田家、箒庵等の判断で親引にされた。

20 鹿島岩蔵

30 鹿島家御蔵器入札 大正 8 年 6 月 23 日 東京美術倶楽部

建設会社鹿島組（現、鹿島建設）の創業者、鹿島岩蔵のコレクションである。岩蔵の養嗣子

鹿島精一は団琢磨に入札の世話方を依頼したが、三井合名会社の社業で多忙な団は、赤星家入札の時と同様高橋箒庵に世話方を委嘱した（『万象録』大正 8 年 5 月 4 日）。箒庵は池田家、郷家などの入札の世話方とともに、この入札に関する準備も進めた。『東都茶会記』大正 8 年 6 月 16 日付け「鹿島の周文」では、この入札の中で特に注目された周文（実際は松谿）「湖山小景図」（現、京都国立博物館）を紹介している。

総売上は 376,000 円であったが、「湖山小景図」の落札価格は 159,300 円で、この作品が主役の入札であった。

21 松平子爵家（旧上田藩主）

31 旧松平伊賀守御蔵品入札 大正 8 年 6 月 30 日 東京美術倶楽部

旧信州上田藩主の松平家は三河時代以来徳川家に仕えた藤井松平家の一族で、江戸時代中期の忠周、幕末の忠固の 2 人の老中を輩出した。小大名ながら優れた美術品等のコレクションを有していた。

大正 8 年の入札では、「片輪車蒔絵螺鈿手箱」（現、東京国立博物館）が 249,000 円、狩野元信「三聖吸酸・枇杷栗鼠・栗鳥図」が 72,000 円、尾形光琳「夏草図」屏風（現、根津美術館）が 52,600 円など高額落札品が相次ぎ、総売上高が 510,000 円を超えた。

しかし同家は、大正元年 12 月 13 日に「某華族御蔵器入札」としてすでに所蔵品の売立を行っており、これが 2 度目の売立であった。この大正元年の入札の際には、伝李安忠「鶉図」、「寸松庵色紙」などの名品が出品されている。いずれも 10,000 円に至らない落札価格であったが、当時としては高額な落札価格であった。

なお高橋箒庵は、この大正元年の入札の理由について、当時の当主松平忠正が朝鮮の鉱山事業経営者に対する保障のための 100,000 円余の支払いとしている。また家の名誉のため内々での処分をとというのが荷主の希望であったが、美術商山澄力蔵が入札による売却の利を説いたとしている（『移動史』）。

いずれにせよ同家の 2 度の売立は、経済的苦境からの脱却を意図したものであると思われる。

22 某旧家（鹿島家か）

32 某旧家蔵品入札 大正 8 年 11 月 3 日 東京美術倶楽部

荷主は判明しないが、江戸時代の諸流派の画家の作品を数多く収録する。

目録の表記は、「某旧家」とあるが、今回の研究で使った底本には、「新川の老舗酒店鹿島家所蔵品」「江戸時代から知られてゐる名家だけに品格の高い物があるのは其特色である」という書き込みがある。これを信じるとすれば、新川の下り酒問屋で、江戸屈指の豪商の 1 人に数えられる鹿島清兵衛家、またはその類縁者と考えられる。

江戸狩野、江戸琳派等の作品に優れたものが多い。

23 郷純造

33 郷男爵家御蔵品入札 大正 8 年 11 月 24 日 東京美術倶楽部

郷純造は美濃国（岐阜県）出身。幕末期には幕府側で外交、貿易問題に対応し、明治以降は維新政府の大蔵官僚として活躍した。4男の昌作が三菱創業者岩崎弥太郎の養子となり、娘幸子が川崎銀行の2代川崎八右衛門に嫁ぐなど、財界との縁戚関係も多い。

この入札は、純造の遺品整理として嗣子の郷誠之助が実施したものである。世話方は、まともや高橋箒庵が務めた。大正 7 年 11 月 25 日、川崎銀行を訪ねた箒庵に頭取の川崎八右衛門が、義兄弟の郷誠之助の書画売却に関する世話方を依頼、同 27 日川崎銀行で川崎、郷、箒庵が面談。入札による処分を決定している（『万象録』）。ただ、第一次大戦終戦後の不況の時期であることに配慮して、当初大正 8 年の早い時期の予定されていた入札は、誠之助の申し入れによって同年後半に延期された（『万象録』大正 8 年 2 月 3 日・6 日条）。『東都茶会記』大正 8 年 11 月 14 日付け「五三樓愛蔵」では、郷純造の人となり、ならびにこの入札の中で特に注目された芸阿弥「観瀑図」（現、根津美術館）などを紹介している。

郷誠之助は、日本運送、日本メリヤス、入山炭鉱、王子製紙などの社長や役員を歴任し、東京株式取引所の理事長も務めた財界人である。

売立では「観瀑図」が 318,000 円の突出した落札価格となり、総売上は 1,001,000 円を超えた。

24 徳川侯爵家（尾張徳川家）

34 尾州徳川家御蔵品入札 大正 10 年 11 月 7 日 東京美術倶楽部

徳川御三家筆頭である尾張徳川家は、御三家の中では水戸家に次いで大正 10 年 11 月 7 日に第 1 回、同 17 日に第 2 回の売立を実施したが、その目的は他の旧大名家のような借財の返済や家の財政の安定化など、経済的苦境に対応するためのものではなかった。その経緯についてはすでに小田部雄次氏が指摘している通り、尾張家伝来の優れた美術品・文化財の永続的な保存のため、財団法人徳川黎明会を設立し、美術品の保存、公開施設としての徳川美術館を建設する資金を得るためであった（『家宝の行方』）。この入札に関しても、高橋箒庵が、世話方として関わっているが、その出品作品に価値の高い物が少なかったため、度々、価値のある作品の出品を尾張家に求めたが、優品を美術館で保存しようという尾張家側の意向を崩すことはできなかったという。箒庵は、『大正茶道記』大正 10 年 10 月 31 日付け「尾州家蔵品払」で、この入札の趣旨を紹介している。

出品作に優品が少ないという当時の世評にも拘らず、第 1 回の総売り上げは、570,000 円余に及んだ。

25 茂木家

35 茂木家旧蔵品入札目録 大正 10 年 12 月 19 日 東京美術倶楽部

初代茂木惣兵衛は、上野国に生まれ、幕末、明治初頭の横浜で生糸貿易により富を築いた。茂木惣兵衛の名は 3 代にわたって襲名され、原三溪の原家などと並ぶ代表的な横浜生糸商として活躍した。また初代惣兵衛は、熱海の観光名所熱海梅園の開設者としても知られてい

る。

大正9年、第一次大戦後の戦後不況の中で、その主体企業である茂木合名会社が倒産。この入札は、その倒産整理のための私財提供のため実施されたものと思われる。

出品作は、狩野派、円山四条派等を主とした近世絵画、茶道具など多岐の分野に及ぶ。「本手立鶴茶碗」が48,000円、「寸松庵色紙（としふれは）」が20,000円など、総売上は628,000円に及んだ。

26 坂本金弥

36 坂本金弥氏所蔵品入札 大正11年3月20日 東京美術倶楽部

坂本金弥は明治・大正期に活躍した財界人、政治家。岡山で『中国民報』（現、『山陽新聞』）を創刊。また岡山の帯江銅山を買収して鉱山業に進出するなど、岡山財界の中心的人物の一人として知られた。明治31年以降、衆議院議員として進歩党、立憲同志会などで活躍した。

美術品の収集では、第1回仙台伊達家入札で落札した「岩城文琳」ほか、多くの茶道具を所有していた。大正11年の坂本の入札会では、この「岩城文琳」は158,000円で落札されるなど、総売上高620,000円余となった。

売立の理由については判然としないが、第一次大戦後の戦後不況の中で、大正8年には世界的な銅価格の暴落が発生している。このような経済的苦境の中での財産処分の一環として実施された売立ではなかろうか。

27 九条家

37 公爵九条家御什器入札 大正11年7月10日 東京美術倶楽部

九条家は、五摂家の一つに数えられる公家の名門。この売立の時期、大正天皇の皇后となった九条節子（貞明皇后）の実家として、知られていた。九条家の所蔵品売立の理由のついては判然としない。小田部雄次氏は、憶測の域を超えないとされながら、裕仁皇太子（昭和天皇）の摂政就任、宮中某重大事件として知られる皇太子の婚約問題、皇太子の洋行問題など宮廷内のさまざまな動きの中で、皇后が資金を必要としたのではなかろうかとされる（『家宝の行方』）。

総売上額は280,000円余とそれほど大きくはないが、尾形光琳「孔雀立葵図」屏風（現、個人蔵、当時は衝立）が20,500円で落札されるなど、出品された書画の中には、注目すべきものが散見される。

28 武藤山治

38 武藤山治氏御所蔵品入札 大正12年1月21日 大阪美術倶楽部

武藤山治は岐阜県出身の財界人、政治家。慶応義塾を経て三井銀行入社。その後鐘淵紡績社長としてその経営の実権を握り、日本を代表する紡績会社として育て上げた。福利厚生を重視した経営者として、日本の労働者の待遇改善の先駆者としても知られている。

三井系財界人の多くと同様、武藤も美術作品のコレクションに意欲を示したが、その主た

る関心は近世の日本絵画にあり、特に与謝蕪村のコレクターとして知られている。

武藤は大正 12 年 4 月、政界浄化と政治改革を目指して実業同志会を結成、翌年の衆議院総選挙で当選した。この入札の目録の冒頭には、「今回小生の多年致蒐集候先の書画古器物類を入札に附し其売上金の全部を小生の目下従事致居候国民覚醒運動に投ずることに致候間（以下略）」という武藤の挨拶文があり、新党結成のための政治資金獲得のために開催された入札会であることが分かる。

蕪村を中心とした近世絵画を中心とした出品で、約 350,000 円の総売上額となった。

29 徳川伯爵家（田安德川家）

39 徳川家御所蔵品入札 大正 12 年 4 月 9 日 東京美術倶楽部

96 徳川田安家御蔵品入札 昭和 13 年 4 月 18 日 東京美術倶楽部

田安德川家は、江戸時代の徳川家御三卿の一家で、明治・大証・昭和前期の当主は、大正天皇の侍従長を務めた徳川達孝である。

田安德川家は、上記の 2 度にわたって入札会を開いている。いずれも同家の財政問題の解決を意図したものと想像される。特に昭和 13 年の入札会は、金融恐慌の余波を受けた十五銀行（華族の資産を出資金として、明治 10 年に開業した銀行。俗に「華族銀行」と称された）の破綻後、達孝は自らの邸宅を処分し、実兄の徳川宗家当主徳川家達の許に身を寄せる等、その経済的苦境に対応するものであった。

大正 12 年の売立では、茶器を中心とした出品で総売上額約 263,000 円、昭和 13 年の売立では、書画を中心とした出品で総売上額約 124,000 円という結果であった。

30 早川千吉郎

40 早川家御所蔵品入札 大正 12 年 5 月 14 日 東京美術倶楽部

早川千吉郎は、石川県出身。東京帝国大学卒業後、大蔵省、日本銀行を経て、三井銀行に入社。三井財閥の枢要の地位を占めたのち、大正 10 年、南満州鉄道社長（満鉄）となるが、その翌年没した。

早川の所蔵品の多くは日本絵画であった。多くの三井系財界人のように、数寄者として茶器の蒐集に努め、茶会等の交流に参加するということには積極的ではなかったが、高橋箒庵の茶会記等によると、このような数寄者の交流の機会にも、時折参加している。

売立は、早川の没後その遺品整理として行なわれた。最高落札額は、雪舟「山水図」（現、個人蔵）の 145,900 円であったが、それに次いで伊藤若冲「雪中遊禽図」（現、個人蔵）が 76,000 円で落札されたのが目を引く。戦前における若冲の評価は、作品によっては必ずしも低いものでなかったことが判る事例として注目される。総落札額は 1,400,000 円に達した。

31 酒井伯爵家（小浜）

41 若洲酒井伯爵家御所蔵品入札 大正 12 年 6 月 14 日 東京美術倶楽部

旧小浜藩主酒井家は徳川幕府重臣の酒井家の別家で、徳川家光・家綱時代に老中・大老を歴任した酒井忠勝を藩祖とする。歴代藩主の多くが幕府の要職について活躍したが、幕末期に京都所司代に就いた酒井忠義は、幕府の立場を擁護する一方、幕府の権威を背景に、多くの茶器の収集に努めた。また復古大和絵系の絵師冷泉為恭に自家の「伴大納言絵巻」（現、出光美術館）の模写を行なわせるなどその庇護にあたったが、為恭は幕府要人との交際が反幕派から疑われ、暗殺されたことはよく知られている。

この入札は 108 点と出品点数は多くなかったが、多数の優れた茶器が含まれていたことで総売上 2,400,000 円に上った。最高落札額は 200,000 円の「国司茄子茶入」（現、藤田美術館）であるが、特に三井家は、幕末期、召し上げに近い形で忠義に買収された「北野肩衝茶入」（落札価格 159,200 円）、「二徳三島茶碗」（同 76,200 円）、「粉吹茶碗」（同 76,200 円）（いずれも現、三井記念美術館）などを買戻した。

絵画の出品の中では、平安末期の「吉備大臣入唐絵巻」（現、ボストン美術館）が出品され、札元の一人であった戸田弥七が 188,900 円で買収したが、その後買い手がつかず、昭和 7 年ボストン美術館に買収された。この海外流出劇が旧国宝以外の文化財の海外流出を防止するための「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」制定の契機になった。

なお小浜酒井家伝来のもう一つの重要な絵画作品である「伴大納言絵巻」は、この入札の際には出品されず、戦後出光美術館の所有になった。

32 松平子爵家（西条）

42 旧伊予西条藩主子爵松平家御蔵器入札 大正 13 年 6 月 9 日 京都美術倶楽部

旧西条藩主松平家は、初代藩主松平頼純が紀伊徳川家初代の徳川頼宣の 3 男にあたる紀伊家の分家である。2 代藩主頼致は、紀伊家の徳川吉宗が 8 代将軍となったため紀伊家を相続し、徳川宗直と名乗った。その後も、5 代藩主頼純が紀州家を相続し徳川治定となるなど、紀伊家との交流が盛んであった。

牧谿「漁村夕照図」（現、根津美術館）が出品されているにもかかわらず、これが親引になったためか、また京都で開催された入札のためか、当時大きな注目を集めることはなかった。

これは、大正 12 年 9 月 1 日に、関東大震災が発生し、関東方面での入札会の開催ができなくなったこと、大震災後の混乱した経済、世相の中で、入札会による美術品等の購入に対する意欲が従来のコレクター間で減退したことが影響したことによるものと思われる。

33 益田信世

43 益田信世氏所蔵品入札 大正 13 年 10 月 27 日 東京美術倶楽部

益田信世は、三井物産創業者で三井合名会社理事長などを歴任した三井財閥育ての親で、数寄者としても戦前最大級の美術コレクションを形成した益田孝（鈍翁）の三男。三井本店、三井造船などで勤務し、晩年は初代小田原市長を務めた。

しかし、信世には古美術品に関する趣味はなく、実際にはその母で鈍翁の側室であった益田たきのコレクションであると見られる。たきは鈍翁の財界人脈から得た情報をもとに、株

式投資で多額の収入を獲得し、その資金を美術品の購入に充てコレクションを形成していた。また、自らも紫明と号する女流茶人として知られていた。この入札は、信世の個人的借財の返済のため、たきがコレクションを提供したものと見られている。(鈴木邦夫「鈍翁コレクションのアルケオロジー」 五島美術館編『鈍翁の眼 益田鈍翁の美の世界』平成 10 年) 総売上は、約 267,000 円に上った。

出品作の中で特に注目されるのは、「大中臣頼基像（佐竹本三十六歌仙）」(現、遠山記念館) である。佐竹本「三十六歌仙絵巻」は、大正 8 年末に分割されたが、分割された各図の中で、最も早い時期に分割時の所蔵者の手許から離れた例になる。

34 吉田丹左衛門

44 吉田楓軒蔵品入札目録 大正 13 年 12 月 8 日 東京美術倶楽部

吉田家は、江戸時代以来、下谷に広大な土地を有した江戸の旧家で、丹左衛門は「大質」と称する質屋の元締役を務めた豪商であった。明治初期から茶人として活躍し、近代数寄者による茶道復興のきっかけとなった和敬会には、当初メンバーとして参加した数寄者であり、益田鈍翁や高橋箒庵などの三井系財界人数寄者の茶道における先導役を果たした。また、古筆や古絵巻などの模索、復元にあたった田中親美の後援者としても知られる。

売立では、「古筆手鑑」が 80,000 円、「高野切」が 40,100 円など古筆が上位を占め、総落札額は 932,000 円を超えた。

35 前田侯爵家（金沢）

45 前田侯爵家御蔵器入札目録 大正 14 年 5 月 25 日 前田侯爵邸

江戸時代最大の大名であった旧金沢藩主前田家。大名としての規模の大きさと同時に、歴代藩主には、文化や学術の振興に熱心なものが多かったことから、多くの美術品、文化財のコレクションを蓄積し、明治以降もこれを所蔵し続けてきた。

前田家が、この入札を実施した目的は、入札で得た利益をもとに、所蔵品のうち重要なものを保存するための体制を固めることであったと思われる。当時の当主前田利為は、関東大震災を経験し、多くの命が所蔵してきた文化財の喪失という事態に遭遇し、これに対する危機感を有した。大正 15 年 2 月 26 日、利為は公益法人育徳財団（現、前田育徳会）を設立しているが、これは前田家の所蔵品を財団の管理とし、より安全な形で保存していくために設けられた組織である。尾張徳川家の徳川義親が、自家伝来の美術品・文化財の管理のため、徳川黎明会（徳川美術館）を設けた例と同様のものである。

そのため、前田家伝来の作品の中で特に優れたものが出品されたとはいえないが、「織部餓鬼腹茶入」（現、野村美術館）が 57,800 円など茶器を中心に高額落札が相次ぎ、総落札額は 1,090,000 円を超えた。

36 波多野承五郎

46 波多野承五郎氏所蔵品入札目録 大正 14 年 6 月 1 日 東京美術倶楽部

波多野承五郎は、遠江国掛川出身の実業家、政治家。慶応義塾に学んだ後、福沢諭吉が創刊した時事新報の主筆、外務省などを経て、朝野新聞社長、王子製紙、三井銀行などの役員を務め、大正9年には衆議院議員となった。

数寄者としても明治期から知られており、三井系財界人の茶会などにもしばしば招かれているが、本来の趣味は文人画、煎茶などであり、そのコレクションもこの方面の作品が主体を占めている。

出品作の中では、木米「山水図」・頼山陽「五言絶句」双幅が47,900円、大正8年の信州上田松平家の売立に出品された狩野元信「三聖吸酸・枇杷栗鼠・栗鳥図」が31,900円などの絵画作品が高額落札品で、売上総額489,000円を記録した。

37 土屋子爵家（土浦）

47 子爵土屋家御蔵品入札

大正14年10月1日 東京美術倶楽部

土屋家は、旧土浦藩主。土屋数直・政直父子が老中を務めた譜代大名家の名門である。この2人は、小堀遠州の系統に連なる大名茶人としても知られており、主に政直の蒐集にかかると、小堀遠州の遠州蔵帳と並んで著名なものである。

残念ながら、土屋蔵帳に記載された道具の大半は、江戸時代から明治期に、すでに土屋家から流出していたようで、この入札においては、その主要なコレクションは含まれていない。

38 井上馨

48 井上侯爵家御所蔵品入札 大正14年11月9日 東京美術倶楽部

長州出身で外務大臣、大蔵大臣などを歴任した井上馨は、日本・東洋美術蒐集の先覚者としても知られる。その蒐集は明治初頭から始まり、晩年に至るまでに、巨大なコレクションを形成した。その背景にあったのは財界とのつながりで、西郷隆盛から「三井の大番頭」と称されたこと、汚職事件で政府を離れていた時期に益田孝（鈍翁）と創業した先収会社が三井物産に発展したことなど、明治初期から三井財閥とは緊密な結びつきにあったほか、日本郵船や同郷の藤田伝三郎が創業した藤田組などとも深い関係があった。

その政府高官としての権威と、財力を用いて蒐集したコレクションは、明治期に成立した中では最大規模の個人コレクションであるといえる。

馨の跡は、甥で養子の井上勝之助が継いだ。主に外交官として活躍した勝之助は、日本・東洋美術に関する趣味が少なく、また関東大震災で、宝蔵の屋根が損傷するなどの事態も発生したため蔵品の一部処分に踏み切ることとなった。

入札に際しては馬越恭平、益田孝、団琢磨、野崎公太、高橋箒庵が世話方となり、井上と縁のある財界人が挙って入札に参加したため、総落札額はほぼ2,460,000円という高額になった。

「御所丸茶碗 銘夕陽」（現、藤田美術館）が109,500円、「古筆手鑑 藻塩草」（現、京都国立博物館）が89,910円、伝馬遠「寒江独釣図」（現、東京国立博物館）が68,000円、

「虚空蔵菩薩像」(現、東京国立博物館)が53,910円など優品の高額落札が目白押しの売立であった。

39 高橋箒庵(義雄)

50 徳川侯爵家蔵品伽藍洞蔵品入札 大正15年11月8日 東京美術倶楽部

68 一木庵高橋家蔵品入札目録 昭和5年10月27日 東京美術倶楽部

高橋箒庵(義雄)は、水戸出身の財界人、数寄者。慶応義塾を卒業後、時事新報の記者を経て、三井銀行、三井呉服店、王子製紙などで活躍したのち、実業の世界を去り、数寄者としての活動に入った。

実業界引退後、名物等の優秀な茶入、茶碗とその記録を集成した『大正名器鑑』、大正昭和期の茶道数寄の動向を伝える『東都茶道記』、『大正茶道記』、『昭和茶道記』、明治・大正・昭和初期における美術品・文化財の移動を跡付けた『近世道具移動史』、自伝『箒のあと』などの膨大な著述を行なった。また、明治45年5月から大正10年6月まで執筆をつづけた日記『万象録』は、この間の茶道数寄、美術品・文化財の移動等の動向に関する多くの背景情報を提供するものであるとともに、この時期の政治、経済、文化風俗に関する様々な事象と、それに関する箒庵の私見を記録している。また、本稿で、たびたび箒庵の名や著作をあげているのは、箒庵が、大正・昭和初期の美術品・文化財の移動の多くに世話方などの形で深く関与しているためである。

さて、入札会による売立ということでは、箒庵自身のコレクションもこれに積極的に関わっている。箒庵自身が他家の入札会に注文を出して入手した美術品等の事例はあまりにも多いので本稿では省略するが、自身のコレクションの売立も、明治45年5月27日に京都美術倶楽部で開催された「東都寸松庵所蔵品入札」以降、しばしば行っている。

箒庵が売立を行なった理由は、茶器を中心とした自らのコレクションの質の充実を図るため不用品を売却し、その売上金でより質の高い作品の購入を狙うというような積極的な意味合いがあったと思われる。しかしそれだけではなく、他家の茶器の調査や入札会の運営に数多く参画した箒庵には、このような関係の中で、他家の入札会においての出品作の義理買いや、入札会以外での購入依頼などもしばしばあったのかもしれない。

大正15年の売立は、先述のとおり、水戸徳川家との合同入札会である。この入札においては、箒庵出品の徳川家光「枯木木兎図」で25,900円の最高額で落札されるなど、箒庵の出品に比較的優れたものが多かったことが指摘できる。すでに第1回の入札で、多くの美術品等を売却した箒庵の旧主家水戸徳川家の入札会に、箒庵が花を添える意図のものとの出品であったと思われる。

一方、昭和5年の売立では、「雲州家伝来」という注記のある作品の出品が目立つ。雲州家とは、江戸後期に茶人大名として巨大な茶器コレクションを形成した松平不昧を輩出した旧松江藩主松平家で、『移動史』は、大正14年頃より同家からの茶器コレクションの流出が内々で始まったことを伝えるとともに、箒庵が大正15年12月末までに同家から譲り受けた作品の一覧も掲載している。『大正名器鑑』の編纂等で親しくなった箒庵に、雲州家の当主松平直亮が譲ったものであろう。この入札で22,500円の最高落札価格を付けたのは雲州家伝来の「走井茶入」であった。

40 徳川侯爵家（紀伊徳川家）

51 紀州徳川家蔵品展覧目録 昭和 2 年 4 月 4 日 東京美術倶楽部

78 静和園蔵品展覧目録 昭和 8 年 11 月 24 日 徳川侯爵家別邸

82 静和園第二回蔵品展覧目録 昭和 9 年 2 月 20 日 東京美術倶楽部

いうまでもなく紀伊徳川家は徳川御三家の一家で、八代将軍徳川吉宗、十四代将軍徳川家茂を輩出した家として知られている。明治以降も、旧大名の華族の中では大きな資産を有する家であった。しかし大正後半期以降、同家の財政状況が悪化をきたしたため、昭和 2 年から 3 度の売立を実施することになった。

第 1 回の売立では、「鼻毛老子」と俗称される伝牧谿「老子図」（現、岡山県立美術館）が 119,000 円、伝牧谿「江天暮雪図」（現、相国寺）が 110,000 円の落札価格となるなど、約 1,630,000 円の総売上額を記録した。

なおこの第 1 回の売立目録の作成にあたっては、紀伊徳川家が明治 34 年に設けた私設図書館南葵文庫の主事であった高木文が編集にあたり、各出品作のうち伝来の明らかなものについて、その伝来記録を付して紹介する方法がとられた。これについては目録の口上文に「展覧に際し猶名品の記録を詳記し此の後愛玩さるる諸士に報したき」とその動機を記している。菊倍版の大型書として作製された最初期の目録であることとともに、売立目録が商品カタログという性格のみならず、美術書、美術研究書としての性格を帯び始める最初期の例がこの目録であると思われる。

第 2 回、第 3 回の入札は、ともに代々木上原に所在した紀伊家の別邸静和園を名乗って実施された。第 2 回の出品作品には、書画や茶器に加え、武具類、特に刀剣が含まれている。中でも「名物松井江」と称される「刀 朱銘義弘」（現、佐野美術館）をはじめとする紀伊家伝来の名刀が多数含まれている。

売立目録は、菊 4 倍版という巨大なもので、このサイズの売立目録は、数千種は存在するといわれる売立目録の中でも、他にほとんど類例はないものであろう。編集には、第 1 回に引き続いて高木文があたり、いくつかの作品には、記録とともに、充実した作品解説を付している。

第 3 回の入札では、「江雪左文字」と称される「太刀 銘筑州住左」（現、小松安弘興産）が出品されたほか、第 2 回に続いて刀剣の出品が多数を占める。

第 1 回・第 2 回とは異なり、売立目録は、菊判の洋装本である。編集は同じく高木文で、主要作品に記録、解説文を付す形式は、第 2 回と共通する。

41 村井吉兵衛

52 村井家書画什器入札 昭和 2 年 9 月 26 日 東京美術倶楽部

村井吉兵衛は京都出身の実業家。明治時代にタバコの製造、販売で財をなし「タバコ王」と称されたが、明治 37 年、日露戦争の戦費調達のため「煙草専売法」が施行され、タバコ事業が国営化されると、その保証金を村井銀行を中核とした各種事業に投資し、いわゆる村井財閥を形成した。京都東山に所在し近代京都を代表する建築物である長楽館は、村井吉兵

衛の京都別邸として建てられたものである。

この入札は、昭和 2 年 3 月に発生した金融恐慌により村井銀行が倒産したため、その清算処理の一環として実施されたものである。吉兵衛もこの前年に没しており、村井財閥は、これを機に一気にその財界での地位を失うこととなった。

入札では、相阿弥「四季山水図屏風」(現、メトロポリタン美術館)が 30,000 円で落札され、総落札額は 300,000 円余となった。

42 神戸挙一

53 神戸鹿峰翁遺愛品展覧図録 昭和 2 年 10 月 24 日 東京美術倶楽部

神戸挙一は甲州出身の財界人。同じ甲州出身の財界人若尾逸平に認められ、東京電灯の社長を務め、電力会社としての同社の基礎を築いた。

その一方文人書画のコレクターとして知られており、頼山陽、田能村竹田らの秀作を数多く収蔵していた。中でも竹田の「亦復一楽帖」(現、寧楽美術館)は、その作品の質とともに、大正・昭和初期におけるたびたびの移動を通じて世評をさらった。

この入札は前年に没した神戸の遺品整理として行なわれたものであるが、折からの金融不況の中で、同家の家政を救済する意味合いがあったのかもしれない。なお、図録が文人書画を主体とする出品であることに配慮して、唐本仕立てであることについて、渡辺虹衣『骨董太平記』は、数ある売立目録の中でも「異彩を放った」ものとしている。

「亦復一楽帖」が 139,000 円で落札されるなど、総売上は 1,005,000 円を超え、文人書画主体の入札会としては大きな成功を収めた。

43 松方正義

55 前公爵松方家蔵品入札 昭和 3 年 3 月 26 日 東京美術倶楽部

56 前公爵松方家蔵品第二回入札 昭和 3 年 4 月 9 日 東京美術倶楽部

松方正義は薩摩出身の政治家で、大蔵大臣・総理大臣などを歴任し、明治政府、特にその財政の基礎を築いた維新元勳であることは、今更指摘するまでもない。その一方、三菱の岩崎家、川崎造船の川崎家と縁戚関係を結ぶなど、財界との縁も深かった。

美術品蒐集は、明治初年に日田に知事として赴任した松方が、現地在住の文人画家平野五岳と親交を持ったことに始まる(『東都茶会記』大正 5 年 9 月 27 日付「海東侯別業」)。その後、鍛冶橋狩野家の狩野探美を顧問として、狩野探幽をはじめとする狩野派の秀作の蒐集に意を注いだという(『移動史』)。

売立のきっかけは、松方正義の嗣子松方巖が頭取を務める第十五銀行が、金融恐慌の余波で破綻したことである。十五銀行は明治 10 年の秩禄処分の結果、多額の金禄公債を得た華族たちがこれを原資として設立した銀行である。多くの華族にとって基本財産の最大の出資先が破綻したということで、関東大震災の被害に加え、これ以降華族の中には経済的苦難を背負わざるを得ないものが多くなった。

松方巖はこの責任をとって公爵位を返上、私財提供による損害の弁済にも応じることとなり、この 2 度にわたる売立が行われた。

2 度の入札とも、狩野派を中心とした絵画作品が主な出品物であったが、総売上額は、第 1 回が 756,000 円、第 2 回は約 144,000 円に及んだ。

44 島津公爵家（旧鹿児島藩主）

57 公爵島津家蔵品入札目録 昭和 3 年 5 月 28 日 東京美術倶楽部

旧鹿児島藩主島津家は、江戸時代においては、加賀前田家に次ぐ大大名であり、維新を主導した藩ということで明治以降も新政府から厚遇され、豊かな財政状況を保ってきた。しかし、金融恐慌の中で破綻した十五銀行の最大の株主が島津家であった。この破綻による被害弁済のため、売立を行なうこととなったのである。

売立は昭和 3 年と 4 年の 2 度行われたが、主要な作品は昭和 3 年の売立に出品された。第 1 回入札に先立ち、薩摩出身の樺山愛輔が、団琢磨を介して高橋箒庵に世話方を依頼している。

この入札会では、「松屋肩衝茶入」（現、根津美術館）が 129,000 円、「柳藤四郎茶入」が 70,600 円で落札され、総売上額は約 1,060,000 円に及んだ。

45 広岡久左衛門

58 広岡家蔵品入札 昭和 3 年 6 月 18 日 大阪美術倶楽部

広岡久左衛門家は、江戸時代大坂において加島屋久右衛門の屋号で知られた両替商。鴻池善右衛門家等と並ぶ大坂の代表的な富商として知られた。明治以降は、加島銀行、大同生命などを創業し、江戸時代の大坂豪商の中では、鴻池家などと並んで、明治以降も生き残った数少ない存在といえる。

広岡家も、江戸時代多くの美術品コレクションを保有していたというが、その多くは、明治初期に売却したという。しかし同家を代表する宝物であった「紅葉呉器茶碗」は、その後も同家にとどまり続けた。昭和 3 年の同家の入札では、この「紅葉呉器」が出品され 189,900 円で売却された。

なおこの広岡家の売立も、銀行、保険という金融資本を主力業務とする同家が、金融恐慌により、大きな損害を被ったことが原因である。

46 毘沙門堂

59 山科毘沙門堂什器入札目録 昭和 3 年 9 月 10 日 京都美術倶楽部

京都山科に所在する毘沙門堂は、天台宗の門跡寺院であり、江戸時代の門跡の中には、茶道の嗜みが深いものもいたことで、しかし、明治以降、財政状況の悪化をきたしたようで、すでに、伝来の美術品等の一部は内々で売却されていた。この売立もそのような寺院経済の状況の中で企図されたものと思われる。

この売立で最も注目されたのが、弘法大師「金剛般若波羅經解題」である。当時の数寄者中の大立者で、弘法大師を敬愛して大師会を始めた益田鈍翁が、この作品の購入を熱望した。

入札の結果、その願いが叶って、鈍翁は 33,900 円でこれを落札することができた。入手後の鈍翁は、これに上質の表装を加え、昭和 3 年 12 月 7 日、小田原の自邸においてに披露の茶会を行なったという（『移動史』、『昭和茶道記』昭和 3 年 12 月 7 日付け「大師礼讃」）。

47 浅見又蔵

60 江州浅見家所蔵品入札目録 昭和 3 年 9 月 24 日 京都美術倶楽部

浅見又蔵は近江長浜の豪商。明治初期、ちりめんの製造販売、輸出に乗り出し巨万の富を得、これらを銀行や琵琶湖の水運事業などに投資し、近江地方に近代化に貢献した。

浅見家の売立は、やはり金融恐慌の影響で、その経営下にある近江銀行が破綻したことにある。

売立では、木米「山水図（化物山水）」（現、個人蔵）が 46,980 円、「猿島屏風」と称される「日吉山王祭礼・賀茂競馬図」屏風が 19,310 円などで落札され、総売上 1,120,000 円に達した。

48 川崎男爵家

61 神戸川崎男爵家蔵品入札目録 昭和 3 年 10 月 11 日 大阪美術倶楽部

93 長春閣蔵品展覧図録（神戸川崎男爵家蔵品入札目録） 昭和 11 年 3 月 12 日 大阪美術倶楽部

川崎正蔵は薩摩出身の財界人。明治維新直後から、新政府に参画した松方正義ら薩摩系の政治家と深くかわり海運、貿易などの事業で成功すると、神戸に川崎造船所を設立して、船舶、汽車などの重機械生産で巨万の富を得、神戸川崎財閥を築きあげた。

その後、川崎造船所の経営は、婿として迎えた松方正義の息子松方幸次郎に委ねられたが、松方幸次郎は、松方コレクションと呼ばれる膨大な西洋絵画（その一部が、国立西洋美術館創設時の基礎的なコレクションとなった）、浮世絵（その多くが、現在東京国立博物館に収蔵されている）のコレクションを築き上げたことはよく知られている。

川崎のコレクションは明治初期から形成が始まったもので、例えば伝顔輝「寒山拾得図」（現、東京国立博物館）は、明治初期に西本願寺から流出した作品であるが、山中商会の山中吉郎兵衛を経て入手したものといわれている。その後もそのコレクション形成には、山中吉郎兵衛が大きく関わっていた。

昭和 3 年の第 1 回の売立も、金融恐慌に端を発するもので、川崎造船所の資金繰りに支障をきたしたためである。この売立では、伝牧谿「半身達磨図」が、123,390 円、文成「放牛図」（現、京都国立博物館）が 43,930 円、「桜下蹴鞠図屏風」（現、根津美術館）が 83,990 円などの落札価格となり、総売上高 2,050,000 円余を記録した。

昭和 11 年の 2 回目の入札は、東京での下見会の直前、2.26 事件が発生したため中止されたというが、同年 3 月 8 日から 10 日に神戸川崎邸において下見、同 12 日大阪美術倶楽部で入札を実施したという説もある（三山進『名品流転』 読売新聞社 昭和 50 年）。いずれにしても、詳細は不明である。

なお、松方コレクションの西洋絵画のうち日本国内に持ち込まれていたものも、この時期

入札などを通じて、その多くが売却された。現在国立西洋美術館に収蔵されている松方コレクションの作品は、第二次大戦後までフランスにとどまっていたものが、サンフランシスコ講和会議後、フランス政府から日本政府に返還されたものであることはよく知られている。

松方コレクション形成の動機に、幸次郎の実父松方正義、岳父川崎正蔵の日本・東洋美術コレクションがあった可能性については今後一層考究されるべきであろう。特に川崎正蔵が神戸の自邸に長春閣という私設美術館を設けていたことや、幸次郎の西洋美術コレクションの目的が東京に共楽美術館建設を意図したものであったことは、経済人が、社会貢献としての美術品の蒐集と公開、その具体的な形としての美術館建設という構想の、日本における最も早い時期の例といえるかも知れない。

49 徳川伯爵家（一橋徳川家）

62 伯爵徳川家御蔵品入札目録 昭和3年10月22日 東京美術倶楽部

一橋徳川家は、江戸時代、徳川御三卿の一家。最後の将軍徳川慶喜が水戸徳川家から一橋家の養子となり、その後将軍家を継いだことはよく知られている。

この入札も十五銀行破綻による華族の家政不安を救済するために実施されたものと思われるが、詳細な理由は不明である。

出品作品の中では、尾形光琳「群鶴図」屏風が 71,980 円、池大雅「岳陽楼・酔翁亭図」屏風（現、東京国立博物館）が 36,993 円などで落札され、総売上は 410,000 円を超えた。

なお、一橋家のコレクションに含まれていた著名な作品としては、元来表裏をなしていた尾形光琳「風神雷神図」屏風、酒井抱一「夏秋草図」屏風（東京国立博物館）があるが、これは、この入札会とは別に、内々で移動していたと思われる。

50 勝田銀次郎

63 神戸勝田家所蔵品目録 昭和4年2月5日 大阪美術倶楽部

勝田銀次郎は、内田信也、山下亀三郎とならんで、大正期の成金時代に、船成金三人男の一人として知られた人物。貿易業を発展させた勝田汽船を設立し、神戸を拠点に第一次大戦時の船舶需要に古船買収、船舶の借り上げなどで応え、巨大な富を築いた。この富を大正6年のいわゆる「入札三尊」の機会などに美術品等の購入に費やし、大正前半期の大入札会時代における最大の買い手の1人となった。

しかし第一次大戦終了後の戦後不況の中、拡大しすぎた事業は危機を迎え、さらに金融恐慌が襲いかかったため、事業整理の一環として蒐集品の売立を実施したものである。勝田はのちに神戸市長となった。

勝田は特に赤星家の入札で多くの名品を入手していたが、この売立ではそれらの赤星家旧蔵品が多数出品され、伝狩野元信「雲龍図」が 61,800 円、「青磁桔梗香合」が 59,100 円、「普賢十羅刹女像」（現、奈良国立博物館）が 17,960 円などで落札された。総落札額は、750,000 円を超えた。

51 松平伯爵家（旧福井藩主）

64 旧越前福井藩主松平侯爵家御蔵品入札目録 昭和4年2月12日 東京美術倶楽部

旧福井藩主松平家は、江戸時代の親藩大名の中でも御三家に次ぐ家格を誇る。幕末期には開明派大名として幕府政事総裁職につき、維新直後には民部卿、大蔵卿に就いた松平慶永（春嶽）を輩出した家である。同家の売立も、金融恐慌に端を発する十五銀行の破綻で生じた損失を埋め、保有資産の回復を図ろうということが目的であったかも知れない。

住吉具慶「徒然草画帖」（現、東京国立博物館）など、今日の日本美術史的な価値観からすると注目すべき作品も存在した売立であったが、総売上額は 300,000 円余に過ぎなかった。金融恐慌後の不況の深刻化による買い手側の減少に加え、間近に控えた明治・大正期の大コレクター藤田家の入札などに資金を投入したいという思惑を有する買い手も多かったことが影響したのではなかろうか。

52 田村市郎

65 本入札 昭和4年3月16日 大阪美術倶楽部

91 田村家所蔵品入札 昭和10年12月3日 大阪美術倶楽部

田村市郎は、藤田財閥創始者藤田伝三郎の兄久原庄三郎の長男で、日立の創業者である久原房之助の実兄にあたる。自身は初め海運業に入り田村汽船を設立したが、下関にその漁業部を設置、のちに共同漁業、日本水産へと発展させた。『移動史』は実父の影響で美術品のコレクションを始めたと伝えているが、もちろん叔父の藤田伝三郎ら藤田一族が、近代における最大の日本・東洋美術コレクターであったことも影響したことであろう。

2度にわたる売立の理由は不明である。昭和4年の売立は金融恐慌の影響によるものである可能性もあるが、同年12月には、共同漁業の本拠地を下関から戸畑に移転している。また昭和9年には、南氷洋捕鯨に初出漁している。2度の入札が行われた時期は、共同漁業の社業の発展期にあたり、そのための資金獲得を意図したものであるかもしれない。いずれにせよ、今後さらなる検証が必要である。

『移動史』によると、昭和4年の売立では、田村家で入りの美術商春海商店の三尾邦三が多くの中札を集め宣伝に努めたことで、総売上額 1,050,000 円を記録することができたという。最高落札額は「小川茶入」の 53,900 円であった。なお『移動史』には、「東京の某大家が同じく旧蔵を処分して新規買入れの資金を得んとする意向と相一致し」との一節があり、田村家以外のコレクションがこの入札の出品作品に含まれているものと思われる。

昭和10年の売立では、江戸絵画各流派の作品が数多く出品された。

53 藤田男爵家

66 藤田男爵家蔵品入札目録 昭和4年5月10日 藤田家本邸

83 香雪斎蔵品展覧図録 昭和9年4月5日 大阪美術倶楽部

95 香雪斎蔵品展覧図録 昭和12年4月13日 大阪美術倶楽部

戦前、藤田伝三郎に始まる藤田財閥は、三井、三菱などと伍す大財閥として知られた。伝三郎は、長州萩の醸造家に生まれ、幕末動乱の時期に奇兵隊に参加、維新後は大阪で藤田組

を開業し実業に転じた後も、長州出身の政府、陸軍の軍人たちとの関係から、政商として活躍した。特に、明治10年の西南戦争の折には、軍靴など軍需品の生産で巨大な富を築いた。明治12年の藤田組贋札事件では、贋札偽造の嫌疑をかけられたが、それを切り抜けると、小坂鉦山の払い下げを契機とした鉦山業への進出、岡山県児島湾の干拓事業など多角的経営に乗り出し、藤田財閥と称された。明治45年の伝三郎の没後、その長子藤田平太郎は、大正6年に藤田銀行を設立するなど事業の拡大を図った。なお、藤田伝三郎の甥田村市郎が日本水産の創業者、久原房之助が日立コンツェルンの創業者であることは、田村市郎の項で紹介したが、久原房之助の義兄である鮎川義介は日産コンツェルンの創業者である。藤田財閥は、これらの新興財閥グループの母体とも位置付けることができる。

藤田伝三郎は、明治初期から美術品の蒐集を開始し、関西方面では明治期における最大の蒐集者といわれた。蒐集の範囲も、仏教美術、宋元画、中世・近世の日本絵画、古筆、墨蹟、茶器、煎茶器、古銅器など多岐にわたった。嗣子の平太郎はもちろん、その弟徳次郎たちも、伝三郎の嗜好を引き継ぎ、大正期にも多数の優れた美術品等の蒐集にあたったため、藤田家のコレクションは当時の日本における最高の質と量を誇るものの一つとなった。

藤田家の売立も、金融恐慌の余波を受けたものであった。『移動史』によると、昭和2年の諸銀行の取り付け騒ぎに際し、藤田銀行は「全財産を日本銀行に提供して辛うじて閉店の苦境を免」れるという状態に陥り、その整理のため昭和4年の売立が企図されたという。

昭和4年の売立では、藤田家は世話方を馬越恭平に依頼。馬越は他に三井守之助、村山龍平、本山彦一らを世話方に加え、入札会の準備を進めた。出品作品は藤田家の蔵品の中では重要なものは少ないという世評であったが、伝夏珪「山水図」が139,000円、木米筆頼山陽賛「山水図」（現、個人蔵）が80,000円、など高額落札が相次ぎ、総落札額2,800,000円を数えた。

昭和9年・12年の売立は、「香雪斎」を名乗って実施されたが、「香雪」は藤田伝三郎の号である。昭和9年の売立目録は内藤堯宝、有尾佐治、昭和12年の売立目録は内藤堯宝、望月信成の古美術研究者が編集にあたり、重要な出品作品については解説文、文字の釈文、伝来記録などを付し、美術書としても閲覧に十分耐えうる体裁をとっている。

昭和9年の売立では、呉春「松竹梅図」が169,500円、「飛青磁花入」が135,000円、「柴田井戸茶碗」（現、根津美術館）が120,000円などやはり高額落札が相次ぎ、総売上額は2,500,000円に達した。

昭和12年の売立では、「有楽井戸茶碗」（現、東京国立博物館）が146,800円、与謝蕪村「野老飼馬図」が135,000円、「尊意参内図（弘安本北野天神縁起絵巻断簡）」（現、サンリツ服部美術館）が77,500円など高額で落札され、総売上額2,150,000円以上に達した。

3回合計の一家の売上とすれば、大正6年の赤星家3回の総売上を上回る戦前最高額を記録した。それでも、藤田家コレクションの主要作品はなお同家にとどまり続け、昭和26年設立の藤田美術館に継承された。

54 中山侯爵家

67 侯爵中山家大岡家所蔵品入札 昭和4年6月29日 東京美術倶楽部

中山侯爵家は明治天皇の生母中山慶子の生家で、慶子の父である中山忠能は、幕末、明治

初期の宮廷政治に明治天皇の外戚として関与した。

中山家の売立の理由については現時点では不明であるが、他のこの時期の華族の売立と同様、金融恐慌、十五銀行の破綻などが影響した可能性を想像することはできる。

売立は大岡家との合同入札会として実施された。落札品の中では「類聚古集」（現、龍谷大学）の 41,000 円が最高で、総落札額は、200,000 円余に過ぎなかった。江戸時代まで中山家は羽林の家格で経済的にはさほど豊かではなく、伝来の美術品、文化財等も、五摂家や清華家のような上位の家格の公家に比べさほど多くなかったのではないかと思われる。

なお、大岡家については現時点では不明である。旧大名家の大岡家であれば、家名に爵位の表記をされると思われる。この時期の美術品等の蒐集家等の中で可能性のあるものをあげるとすれば、衆議院議長、文部大臣などを務めた大岡育造であろうか。

55 説田家

69 説田家蔵品展覧目録 昭和 6 年 5 月 19 日 東京美術倶楽部

70 説田家蔵品展覧目録 昭和 7 年 6 月 8 日 東京美術倶楽部

説田家は、江戸時代から続く新川の下り酒問屋である。明治以降も、酒問屋として繁栄し、明治期の当主説田彦助は、日本における瓶詰め酒輸入のさきがけとなったほか、日本商船株式会社、日本防腐木材株式会社の社長などを務めた。美術品等のコレクションには、彦助による文人画の秀作が多かった。同家の売立の目的については不詳。

昭和 6 年の売立では、渡辺崋山「溪間野雉図」（現、山形美術館）が 100,000 円、木米「兎道朝暾図」（現、個人蔵）が 46,300 円で落札されるなど、総売上額は 384,000 円余を記録した。

また、7 年の売立では、「周銅雷」が 71,000 円で落札され、総落札額は 161,000 円余となった。

56 小西新右衛門

71 某家所蔵品入札目録 昭和 8 年 1 月 24 日 大阪美術倶楽部

小西新右衛門家は、摂津伊丹の銘酒「白雪」で知られる江戸時代以来の大造酒家である。明治以降は、酒造業を中心に、銀行、鉄道など、北摂地域の近代化のための諸産業にも投資し、昭和 8 年の入札時の当主、12 代新右衛門は、日本投資貯蓄銀行の頭取を務めていた。またこの 12 代新右衛門は、茶人としてもその名を知られた。

金融恐慌後の不況の長期化の中で、小西家は、酒造・販売業の合理化、組織化を進めた。そして、昭和 8 年 1 月には西宮と魚崎の酒造部門を継承する小西灘酒造株式会社、同 5 月には伊丹の酒造部門を継承する小西酒造株式会社を設立している。入札会は、これらの事業資金獲得の方法として企図されたものと思われる。

この売立における高額落札品には茶器類が多かったが、絵画では伊藤若冲「菜蟲譜」（現、佐野市立吉澤記念美術館）が 5,600 円のほか、明兆「大道一以像」（現、奈良国立博物館）、如拙「王羲之書扇図」（現、京都国立博物館）など良質な作品が出品されている。総落札額は 530,000 円を超えた。

57 川田小一郎

72 方外庵御所蔵器入札 昭和 8 年 2 月 20 日 東京美術倶楽部

川田小一郎は、土佐出身の財界人で、草創期の三菱において、岩崎弥太郎・弥之助の補佐役として活躍し、三菱財閥発展の基礎を築いた。その後、日本銀行 3 代総裁に就任、中央銀行としての日銀の体制確立に貢献した。明治 29 年の小一郎の急逝の後、その嗣子川田龍吉は、明治 39 年北海道に渡り函館船渠の専務に就任。退職後は北海道に川田農場を設立し、北海道における大規模農業発展のさきがけとなった。男爵イモは、龍吉がイギリスから輸入し、日本に根付かせたジャガイモとして著名である。

目録には入札会の札元による挨拶文が付属しており、出品作品が小一郎の蒐集品であること、作品の死蔵による損傷、劣化を畏れての売立である旨を述べている。具体的な売立の理由は不明である。なおこの挨拶文にある通り、出品作品が小一郎のコレクションであったとすると、小一郎は明治期に最も早く日本美術蒐集を行なった財界人の一人ということになる。

出品作品の中では、「磁青磁袴腰香爐」が 21,300 円、円山応挙「猛虎水飲」が 7,200 円などで落札されたが、特に注目されるのは、円山応挙「藤花図」屏風（現、根津美術館）が出品されていることであろう（落札価格 3,790 円）。総落札額は約 156,000 円であった。

58 樋爪譲太郎

73 石川県樋爪家蔵品入札 昭和 8 年 5 月 17 日 東京美術倶楽部

樋爪譲太郎は、石川県の実業家。明治期より、樋爪汽船、北洋汽船などの海運会社を設立、経営し、能登七尾を拠点に、海運業者として活躍、さらに能登電気の社長などを務め、北陸経済に重きをなした。

この売立で目をひくのは、楊文驄「江山河亭図」（現、遠山記念館）と池大雅「洞庭赤壁図巻」（現、ニューオータニ美術館）という中国、日本の文人画の作品の中でも、古くからその存在が知られてきた 2 作品である。樋爪の美術品等のコレクションの動機は不明であるが、文人画には一定の関心を寄せて蒐集活動を行なったのではないと思われる。また、売立の理由についても不明である。

「江山河亭図」は、江戸後期の文人画家山本梅逸が苦心の金策の末、もとの所有者から購入したもので、これを閲覧するために友人の頼山陽等は、服装を整えて絵を携えてくる梅逸を出迎えた。梅逸がこのことに礼を述べると、山陽は、梅逸にではなく絵とその筆者である楊文驄のために礼を尽くしたのだと答えたという。文人・煎茶趣味の世界では、幕末から近代にかけて良く知られた逸話である。入札会で、この作品は 15,000 円の入札があったが、親引となった（『書画骨董雑誌』昭和 8 年 7 月号）。

「洞庭赤壁図巻」は、池大雅がその支援者である大坂の豪商西村孟清のために製作したもので、孟清は、自らも所属していた漢詩結社混沌社の友人たちにこの作品を示し、多くの詩文を作らせた。また、桑山玉洲や田能村竹田等は、その画論集の中でこの作品の優秀さについて紹介している。この作品は 3,411 円で落札された。

なお、総落札額は113,000円であった。

59 熊沢一衛

74 某家旧蔵品入札 昭和8年6月12日 東京美術倶楽部

熊沢一衛は、三重県の実業家。伊勢電鉄の社長を務め、同電鉄の前線電化や養老鉄道の合併を進めたほか、四日市銀行、四日市倉庫などの社長も務めた。月台と号する茶人としても知られ、三井系財界人の数寄者らとの親交も厚く、大師会などにもしばしば出席している。

熊沢の売立は、伊勢鉄道の疑獄事件、四日市銀行、伊勢鉄道の破綻に端を発するものと思われる。疑獄事件は、熊沢が伊勢鉄道の三重県から名古屋への乗り入れを計画、その免許獲得と関西本線の木曽水系の旧3鉄橋の払い下げを政界に贈賄により働き掛けたというもので、昭和4年に逮捕された。折からの金融恐慌後の不況の中、新線建設に過大の投資をしていた伊勢電鉄とその資金提供元であった四日市銀行は、事件の広がりの中破綻、売立はその責任に対する穴埋めとして行なわれた。

この売立では、「寸松庵色紙（秋かせの）」が46,980円、「源順像（佐竹本三十六歌仙）」（現、サントリー美術館）が27,390円のほか、茶器の優品の出品も多く、売上総額304,600円となった。

60 松本忞蔵

75 双軒庵美術集成図録 昭和8年6月26日 大阪美術倶楽部

76 続双軒庵美術集成図録 昭和8年10月11日 東京美術倶楽部

81 双軒庵目録 昭和9年1月22日 東京美術倶楽部

松本忞蔵は、大阪・北九州を中心に、西日本で活躍した財界人である。九州電気軌道の北九州、福岡間の路線建設計画の推進や電力事業への参入などで同社の経営を主導したが、昭和5年、同社と九州推力の合併計画が進行する中で、忞蔵による同社手形の不正振出しという背任事件が発覚、翌6年、この事件が公表されると、私財提供による弁済の方針が決定され、所蔵する美術品等は同社に移され、昭和8年以降売立による売却が進められた。

忞蔵の義父は明治期の大阪で百三十銀行を中核に、日本紡績等の紡績、南海電鉄等の鉄道のほか、各種事業を展開した松本重太郎である。重太郎は、明治期の大阪において質・量ともに優れた日本美術のコレクションを形成していた。しかし明治37年、当時の不況の中で、百三十銀行の融資の不良債権化や、自重太郎身の関連企業への同行からの不正融資が発覚し、同行が破綻に追い込まれたことで、その責任をとってコレクション等の私財を提供、実業界から引退した。

忞蔵は義父重太郎が散逸させたコレクションを再び松本家に戻すべく、実業界で重きをなすに従い美術品の蒐集にも力を注いだが、今度は自らのコレクションを手放すこととなったのである。なお、「双軒」は重太郎の雅号である。

忞蔵のコレクションは大正・昭和初期の数多くの入札会等を通じて形成されたもので、日本・東洋美術の各分野を網羅するものであるが、文人画、特に田能村竹田やその関係者でコレクションの充実ぶりが知られていた。忞蔵はこれらのコレクションに関して、『双軒庵鑑

賞』、『竹田先生画譜』などの豪華画集を発行している。

第1回の入札会では、大正7年の京極家の売立に出品された仁清作「色絵藤花文茶壺」(現、MOA美術館)が189,000円、大正8年の郷家の売立に出品された芸阿弥「観瀑図」(現、根津美術館)が169,800円、昭和2年の神戸家の売立に出品された田能村竹田「亦復一楽帖」(現、寧楽美術館)が110,000円など、高額落札が相次ぎ、総落札額2,680,000円を超えた。

第2回の入札会では、古筆手鑑「冬木帖」が179,300円、池大雅・与謝蕪村「十便十宜図帖」(現、川端康成記念会)が93,890円などで落札され、総落札額は1,860,000円を超えた。

第3回は、田能村竹田「蓬窓幽興画冊」が34,190円などで落札され、総売上は432,000円を超えた。

なお、3回の入札会に関する売立目録は、美術研究者の外狩素心庵が編集、作品の伝来や解説、釈文などのデータを豊富に盛り込み、美術書としての体裁を整えたものであった。また、第1回の売立目録の冒頭には、忝蔵のあと九州電軌の社長となった三井系財界人太田黒重五郎の序文、太田黒の三井の先輩格の財界人で数寄者としても知られる馬越恭平(馬越は昭和8年4月20日に死去)の入札会紹介状などが配されている。

61 蜂須賀侯爵家

77 侯爵蜂須賀家御蔵品入札 昭和8年10月23日 東京美術倶楽部

旧阿波徳島藩主である蜂須賀侯爵家は、江戸時代以来、多数の美術品を収蔵していた大名家である。明治以降、「源氏物語絵巻」(現、五島美術館)、「紫式部日記絵巻」(現、個人蔵)など、多くの作品が個別に売却され、すでに同家から流出していたが、この入札会によって、それ以降も同家に伝わっていた主要な美術作品等が流出することとなった。

入札会当時の当主は、この入札の年、前年に亡くなった父蜂須賀正韶の跡を継ぎ侯爵を襲ったばかりの正氏であった。蜂須賀家が北海道で経営する雨竜農場において長年続いた小作争議等による借財や、正氏の様々な「道楽」による借財等が重なって、この売立に繋がったと小田部雄次氏は指摘している(『家宝の行方』)。正氏は鳥類学者としてその名を残す一方、派手な女性関係や飛行機操縦などの趣味で巨額な借財を作り、また戦時中には闇取引に関わる経済犯とされたこともあり、昭和20年7月には爵位を返上した。

売立では「紫式部日記絵巻」(現、個人蔵)が239,000円、「西行物語絵巻」(現、徳川美術館)が139,500円、伝本阿弥光悦「子日蒔絵棚」(現、東京国立博物館)が58,000円、「豊国祭礼図」屏風(現、徳川美術館)が36,900円などで落札され、総売上額は1,160,000円近くに及んだ。

62 ウィリアム・ビゲロー

79 故ビゲロー氏遺愛品浮世絵及四條派画幅入札 昭和8年12月11日 東京美術倶楽部

ビゲローはアメリカボストン出身の医師で、明治14年に来日し、同時期に来日したアーネスト・フェノロサとともに日本美術の研究に当たるとともに、多くの作品を収集した。そ

のコレクションの多くがボストン美術館に寄付され、その主要をなしていることはよく知られているところである。また日本において仏教に帰依し、その遺骨は三井寺法明院のフェノロサの墓と隣り合って埋葬された。

この入札会は、明治期から海外への日本・東洋美術の紹介、輸出に関わってきた山中商会の主導により実施された。すなわち売立目録には、山中商会社長の山中定次郎による挨拶文があり、ビゲローの遺族から遺族の許に遺されたコレクションの処分に関する相談を受けた山中が、日本での入札会の開催を提案し実施したものであるという。山中がこの入札会を通じて海外に流出した日本美術の里帰りを実現することを意図したのは、その前年に発覚した「吉備大臣入唐絵巻」（大正 12 年の小浜酒井家の売立で同家から流出。現、ボストン美術館）流出事件の影響で、「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」が同年 4 月施行されたことなど、日本美術の海外流出についての社会の眼が厳しい状況を反映したものといえよう。山中商会は、「吉備大臣入唐絵巻」の旧所有者である戸田商店とボストン美術館の仲介役をこの取引で演じていた。

出品作品には肉筆浮世絵、円山四条派などの近世絵画の秀作が多く、総売上 282,000 円余りを記録した。

63 稲束家

80 摂津池田稲束聴松軒氏所蔵品入札 昭和 9 年 1 月 18 日 大阪美術倶楽部

稲束家は、江戸時代以来続く摂津池田の旧家で、代々酒造業を営んできた。池田は与謝蕪村、呉春、頼山陽ら江戸時代後期を代表する画家や文人が立ち寄り、当地の酒造業者等は彼らに対するパトロン活動を行なったことで知られているが、稲束家もそのような一家であり、多くの書画の作品を江戸時代以来収蔵してきた。

明治期の同家の当主であった稲束司馬太郎は多くの書画の収集に努めた人物として知られ、その息稲束猛は哲学、美術史等の研究者として再建懷徳堂で教鞭をとり、また美術史研究誌『国華』に原稿を寄せる等の活躍をした。

その所蔵作品は、明治期以来、多くの文化人の関心をひき、河東碧梧桐ら蕪村に関心を寄せる近代の俳人が所蔵品の観覧に訪れている。また、同じ池田の旧家である岸本善五郎や、阪急グループ創業者で日本・東洋美術の収集家、逸翁美術館の創立者として知られる小林一三などとは親密な交流があり、彼らのコレクション活動にも大きな刺激を与えたと思われる。

稲束家と美術に関しては、石川遼子「第 4 章 近代池田の芸術と文化」（『新修池田市史 第 3 巻 近代編』 池田市 平成 21 年）に詳しい。また稲束家の歴代が江戸時代から近代まで書き継いできた『稲束家日記』は、同家の芸術文化活動のみならず、池田並びに北摂地域の歴史を研究するための根本史料として貴重視され、『池田市史 史料編 第 4・5・6 巻』（池田市役所 昭和 48 年～61 年）に、宝暦 8 年から明治 45 年までの分が公刊されている。

出品作品は、与謝蕪村、呉春ら池田ゆかりの画家の作品を中心に、円山応挙をはじめとする京都画壇諸流派の画家、岡田米山人・半江父子をはじめとする大阪画壇の画家の作品が多数を占める。

64 松浦伯爵家（旧平戸藩主）

84 松浦伯爵家並某家蔵器展覧入札 昭和9年11月5日 東京美術倶楽部

松浦家は、鎌倉幕府の鎮西御家人となった松浦党に源を発する武家の名門であり、江戸時代を通して平戸藩主としての地位を保った。4代藩主松浦鎮信が石州流を学び、自らも鎮信流を開いた茶人であり、また、幕末・明治初頭の当主であった松浦詮も心月と号した茶人として知られる。特に、詮が中心となって明治31年に立ち上げた和敬会には、東京の華族、政財界人が集い、明治初期に衰えた茶道復興のきっかけとなり、その後の近代数寄者茶道発展につながった。

松浦伯爵家の名では、昭和2年、6年、9年の3度にわたって売立を行なっている。金融恐慌以降の経済混乱の中で、松浦家でも所蔵品の売立を進めざるを得ない状況であったと思われるが、松浦家では昭和2年の第1回の入札に先立ち、道具商山澄力蔵や王子製紙社長の藤原銀次郎らに個別取引で所蔵品のうちの優品を売却し、約400,000円を得たと『道具史』は伝えており、入札会の時点で残っていた優品は少なかったと思われる。3回の入札会には、いずれも茶道具、茶事に関連する書画類を中心とした出品を行なっているが、その中では、ここに紹介する昭和9年（第3回）の売立が、作品の質において最も高いものといえる。

この第3回の入札では、牧谿「遠寺晚鐘図」が83,000円、「大江山絵巻」（現、逸翁美術館）が28350円などで落札され、総落札額は、430,000円に達した。

65 小泉策太郎

85 小泉三申氏愛玩品入札 昭和9年11月15日 東京美術倶楽部

小泉策太郎は静岡県生まれの言論人、政治家で「三申」はその号。静岡日報などに記者として勤めた後、九州新聞などの社長となり、明治末年からは衆議院議員を7期務めた。

コレクションに関しては、特に仏教美術の蒐集に意を注いだ。この売立でも、仏画を中心に、多数の仏教美術の作品が出品されている。また、佐竹侯爵家伝来という注記を付した刀剣類も多数出品されている。10,000円を超える高額落札品はなく、入札による総売上額は143,000円余と、規模としては大きな売立ではなかった。

66 島徳蔵

86（島徳蔵） 昭和9年11月29日 大阪美術倶楽部

島徳蔵は、大阪北浜の株式相場師で、戦前における金融成金の典型として知られた人物である。大正5年から15年まで大阪株式取引所の理事長を務め、大阪金融界の最有力者として活躍したが、昭和2年から乗り出した阪神電鉄の買収劇に失敗したことなどをきっかけに没落していった。

株式取引の利益を以て、大正から・昭和初期の入札会で、多くの美術作品の収集を行ない、豊富なコレクションを形成したが、没落の過程の中で、そのコレクションを手放したのがこの売立である。なお、売立目録には、昭和8年に取り付け騒ぎを起こし破綻した愛国貯金銀

行整理に、島より提供された私財処分が目的とした入札会である旨記されているが、同行の破綻の背後には、同行の経営権を支配した島の不正融資などの犯罪行為があり、これにより島は刑事訴追されている。

出品された作品では、佐竹侯爵家、上野与吉旧蔵の雪村「風涛図」（現、野村美術館）が 60,000 円、直翁「六祖挾担図」（現、大東急記念文庫）が 28,900 円、「源重之像（佐竹本三十六歌仙）」（現、個人蔵）が 21,900 円など、各分野にわたって高額で落札される作品が多かった。

67 横江萬治郎

87 竹軒蔵品展覧図録 昭和 10 年 6 月 9 日 大阪美術倶楽部

横江萬治郎は、京都生まれの財界人。江戸時代以来、横江家は三井家の別家として仕えた家柄で、壮年期まで三井に勤務していたが、その後三井を退職。北浜で株式投資家として活躍する一方、その資金を以て文人画や煎茶道具などを主体とするコレクションを形成した。

横江は、若年期に詩文を儒者宮原節庵、画を文人画家谷口靄山に学び、三井入社後も、多くの三井系財界人が茶道数寄者であったのとは異なり、文人・煎茶趣味を持ち続けた。竹軒と号した文人、煎茶人として近代大阪で知られ、大坂における煎茶文化の興隆に大きな役割を果たした。

文人画・煎茶器のコレクションの売立として、優品が大量に出品され、与謝蕪村「竹林茅屋柳蔭騎驢図」屏風（現、個人蔵）が 130,000 円など総売上額約 1,590,000 円を記録した。

68 有賀長文

88 有賀家所蔵品展覧入札 昭和 10 年 10 月 28 日 東京美術倶楽部

有賀長文は大阪出身の財界人。有賀家は、江戸時代大坂において、国学・歌学の家として知られた。兄有賀長雄は法学者として知られる。東京大学から農商務省に進んだ後、井上馨の推薦で三井に入り、長年にわたって三井合名会社の理事を務めた。

三井系財界人の多くがそうであるように、有賀も、日本の古美術蒐集と茶道数寄の世界に入り、優れたコレクションを形成した。この売立では、「伊勢像（佐竹本三十六歌仙）」（現、個人蔵）が 83,900 円で落札されるなど、総売上は 740,000 円を超えた。

69 福田政之助

89 山王荘蔵品展覧図録 昭和 10 年 11 月 9 日 大阪美術倶楽部

福田政之助は大阪北浜で活躍した相場師で、「福田將軍」と異名された。山王荘は、宇治川河畔に政之助が建てた別荘の名である。上野与吉、石井捨七、島徳蔵らの大阪北浜相場師コレクターの系譜に連なる人物である。

出品作の多くは文人画で、田能村竹田「稲川舟遊図」（現、個人蔵）の 125,800 円を筆頭に総売上高約 1,160,000 円を記録した。

70 青山子爵家

90 旧篠山藩主青山子爵家御蔵器入札 昭和 10 年 11 月 18 日 東京美術倶楽部

旧篠山藩主青山家は、三河以来の徳川家に仕えた青山家の宗家で、江戸時代の歴代当主のうち 4 名が老中を勤めた譜代大名の名門である。青山家の売立も、金融恐慌以降の経済混乱が大きな要因になっていると思われるが、青山家では明治以降の当主に夭折するものが多く、昭和 2 年に亡くなった青山忠精のあと、同 8 年には忠敏、入札当時の当主忠揚は同 13 年にそれぞれ没している。このような頻繁な代替わりが影響した可能性も考慮すべきであろう。

この売立では、「千鳥蒔絵面箱」（現、野村美術館）が 130,000 円で落札されるなど、総売上額は 420,000 円を超えた。

71 岸上善五郎

92 北摂岸上家並某家蔵品大入札会展覧 昭和 11 年 2 月 10 日 大阪美術倶楽部

岸上家は、江戸時代後期以来、摂津池田において酒造業で栄えた旧家である。明治以降、北摂地域の銀行や鉄道等の設立に関わり、北摂地域を代表する財界人に数えられた。また、文化面では、稲束司馬太郎・猛（「63 稲束家」参照）等が設立した池田史談会の出版事業に出資するなど、同地域の文化振興にも重要な役割を果たした。

この売立では、与謝蕪村、田能村竹田等の文人画、円山応挙、呉春、森狙仙ら写生派の作品を中心に、江戸時代各派の絵画作品が多数出品され、総売上約 700,000 円に達した。

なおこの売立には、大正 7 年の水戸徳川家の売立に出品され、その後大阪北浜の相場師石井捨七が入手した「水戸文琳茶入」なども出品されるなど、大正から昭和初期に行なわれた他の入札会に出品された作品も多く含まれ、これらのうちどれだけの作品が岸上家の所蔵品であったかについては、判別しがたい。

72 平井仁兵衛

94 平井東庵氏所蔵品入札目録 昭和 12 年 2 月 15 日 京都美術倶楽部

平井仁兵衛は京都の実業家。近江に生まれ、京都西陣の織物商平井家に養子で入り、京都瓦斯、などの役員を務めるなど京都財界で活躍した。その一方、東庵と号し、画家、茶人としても活躍した。

この売立の目的は不明であるが、同年 7 月に勃発する盧溝橋事件から日中戦争に突入する直前、すなわち、金融恐慌以降の不況のあと、戦時に対応する統制経済体制が間近に迫った時期で、贅沢品である西陣織に関する商売には、厳しい時期が迫っているという事情を考慮する必要がある。

出品作品で目を引くのは「壬生忠見像（佐竹本三十六歌仙）」（現、個人蔵、分割時の所有者は、京都の実業家塚本与三次）が 51,000 円で落札されたほか、近世京都画壇の絵画や、茶器に優品が多数含まれる。それらの中には、「雁半伝来」、「下村（正太郎）家」伝来などの注記があるものも目立ち、大正から昭和期の数多くの売立で平井仁兵衛が落札したもの

も目立つ。総売上は 920,000 円余に及んだ。

73 大原孫三郎

97 三楽庵所蔵品入札 昭和 15 年 2 月 16 日 大阪美術倶楽部

大原家は、江戸時代以来、備中倉敷で続いた豪商で、明治以降、倉敷紡績、倉敷レーヨンなどを創業し、日本の繊維業界をリードした実業家一族であることは言うまでもない。「三楽庵」を号した大原孫三郎は、友人の画家児島虎三郎をパリに派遣し、収集させた多くの西洋絵画のコレクションを大原美術館を設立して公開したことで知られる。一方、日本・東洋美術の収集においても、多数の優品をコレクションしていた。

近代日本における代表的な美術作品収集者である孫三郎であるにもかかわらず、昭和 15 年に売立を実施したのは、翌年 1 月に社長の座を子の總一郎に譲ったこと、6 月に倉敷紡績が、国光紡績を吸収合併したことと関連すると思われる。すでに日本は戦時体制の統制経済時代に入っており、その中で紡績業は、大企業のみを集約する企業統合策が国家によって進められつつあったが、總一郎が進めたこの合併などの企業規模拡大策により、倉敷紡績は存続することができた。

この売立では、「泣不動縁起絵巻」（現、東京国立博物館）、文成「牧牛図」（現、京都国立博物館）等の他、文人画をはじめとする江戸絵画、茶器類にも優品が多く出品された。しかし、これらは大原家の日本・東洋美術コレクションの一部に過ぎず、戦後も数多くの優れた作品を収蔵し続けた。

74 鴻池男爵家

98 松筠亭蔵品展覧目録（鴻池男爵家蔵品展覧目録） 昭和 15 年 6 月 12 日 大阪美術倶楽部

鴻池善右衛門家は、江戸時代初期、摂津伊丹において清酒を醸造し、酒造業などから家を興し、その後両替商として、江戸時代を代表する豪商となった。明治以降は、鴻池銀行・三和銀行（現三菱東京 UFJ 銀行）などの設立、経営に関わり、大阪を代表する財界人となったが、江戸時代以来の金融資本を主体とした財界活動であったため、同じく江戸時代の豪商から発展し、商工諸産業に業務の幅を広げていった三井家のような大財閥に発展することはなかった。

鴻池家は江戸時代以来、茶道具を中心に多くの美術作品を所蔵することで知られた。この売立までの間、伝来の美術品の売立を行なうことはなかったが、一部の収蔵品については、同家からの流出は始まっていた。

売立では、和漢の書画、茶器等に高額落札に品が相次ぎ、総落札額は 6,890,000 円に及んだ。これは、戦前の入札会における最高記録であった。

75 前山久吉

99 観空庵遺愛品入札 昭和 16 年 2 月 18 日 東京美術倶楽部

観空庵は、愛知県出身の財界人前山久吉の号。三井銀行を経て、王子製紙、東京信託など

の役員を務めたのち、浜松銀行頭取、共同保全会社社長などを歴任した。多くの三井系財界人同様、古美術のコレクターであったが、特に古筆、やまと絵のコレクションによってその名を知られた。

前山は昭和 12 年の没しているので、この入札はその遺品整理として実行されたものと思われる。「小大君像（上畳本三十六歌仙像）」（現、個人蔵）が 43,900 円、「公家列影図巻」（現、京都国立博物館）が 46,300 円など、優品が多数出品された。

なおこの売立の目録は、大正前半期同様、218×152mm の菊判サイズになっている。同年 12 月には、紙配給統制規則が公布されるなど、戦時統制経済の時代の中、紙の入手が困難になったことや、美術品の売買に対する社会の風当たりが強まってきたことを象徴するような体裁である。

76 原田二郎

100 もくろく（原田積善会） 昭和 18 年 5 月 25 日 原田積善会（東京美術会館出張）

原田二郎は、明治・大正期の鴻池家の番頭役を務め、鴻池銀行の近代化に貢献した財界人である。子のなかった原田は、大正 5 年、家財を投じて原田積善会を設立、昭和 5 年に没するまで、社会福祉事業に専心した。

この売立は、原田が積善会に寄付したコレクションを売り立てたもので、出品作品の中に鴻池家伝来の注記のあるものが多いのは、同家から原田に度々美術作品等の譲渡が行われていたことを示している。

太平洋戦争開戦後の売立で、戦時中の売立に対する世評は決して芳しいものではないと思われる時期、しかも売買の際の物品税が落札額の 6 割という悪条件下であるにも拘らず、「達磨図」（現、和泉市久保惣記念美術館）など出品作品の優秀さ、社会事業への貢献のための売立という目的のためか、この時期としては、高額な落札が相次いだ。

戦前の大売立時代の最後を飾る売立といえる。

む す び

以上でひとまず本研究に関する本研究に関する報告を擱筆する。

1) で紹介した入札目録に関しては既に多くの研究成果があり、ここでは概略の紹介にとどめた。詳しくは文中で紹介した参考文献をご参照されたい。

2) で紹介したように、高額美術品・道具類が移動する入札会にはさまざまな出来事があり、それぞれの入札会がいわば一つのドラマのような趣きを呈する。5) で概略を示したそれぞれの荷主や入札会、またそこで取り上げられた個々の作品などについては、より詳しい分析が可能であり、それらが織りなす「ドラマ」を明らかにしていくことが今後の課題となろう。

3) で示した高橋箒庵の業績については、なお十分な解明には至っていない。箒庵の各種の著作や、周辺の人物による各種資料の整理分析等から今後これを進めていく必要がある。

上記のとおり残された課題は多く、本書は本研究の内容のラフスケッチの段階にあるものに過ぎない。しかし、この明治末期から第二次世界大戦終戦までの時期に盛行した入札会やそれに関して作製された売立目録は、美術史や文化史、社会史などさまざま分野で今後も研究の対象となっていくことであろう。本研究がその一つの契機となるものであれば幸いである。

なお、本研究の重要な課題である 4) 売立目録 100 選のアーカイブ作成の成果は、5) のデータとあわせて以下の URL で公開、順次整備を進めていく予定である。

売立目録 100 選

<http://www5f.biglobe.ne.jp/~bunkazai/100sen/100sen-top.html>

売立目録所収美術作品のデータベース化とその
近代日本における美術受容史研究への応用
平成 19－21 年度科学研究費〔基盤研究 C〕
研究成果報告書

課題番号 19520098

平成 22 年 6 月

研究代表者・編著／発行人
静岡大学情報学部教授

高松 良幸

〒432-8011 浜松市城北 3-5-1
静岡大学情報学部 高松良幸研究室
TEL053-478-1549